

= ミニシンポ =

「出土遺物からオスティア住民の生き様を探る」

はじめに

豊田 浩志

古代ローマ時代のある遺跡に焦点を定めて、現地調査を重ねての継続的な歴史研究は、未だ我が国で決して普通に行われていることとは思えないが、10年以上にわたるオスティア遺跡の調査の中で、トピックス的に重要とみなされながら、これまで深く追求されずに残されてきていた個別論点は少なくない。今回、とりわけ当時の庶民の生き様を活写すべく、それぞれ残存遺物の仔細な検討を主軸にミニシンポを計画した。折悪しく新コロナで対面での学会開催が不可能ななか、それを逆手にとってイタリア在住者のテレビ参加も得ての実施となった（ご当人は、前日深夜という時差もあって大変だっただろうが）。

最初に、豊田がここ20年のヨーロッパ、とりわけ英国研究者によって目覚ましい成果を挙げている深層ボーリング調査や地球物理学的 geophysical 調査方法（磁気探知、地中レーダー、電気抵抗トモグラフィー等）によって、以前よりもティベリス川の古環境が詳しく再現されてきている状況を概観し、従来の文献学や考古学に基づく通説の根底的見直しが要請されていること、また帝都ローマの外港としてのオスティアやポルトウスの特殊性についても簡単に言及し、以下3人の個別研究の序論とした。

以下、おおむね時代順に、それぞれが得意とする物的対象を素材に論及し、かの地で生きていた生身の住民たちの具体的生き様解明に挑戦した。

まず、古代ギリシア・ローマ時代の呪詛板研究で最近次々と成果を重ねている前野弘志氏が、今回その分析対象をオスティアに定め、帝都ローマと結ぶ主要街道オスティア街道がオスティアのローマ門に至ると街道沿いにネクロポリスが展開するが、門手前左に位置する墓所「A2-1」から出土した呪詛板「TDO.1」について、出土状況を含めてこれほど詳しく紹介しているのは、本邦のみならずかの地においても最初であろう。この呪詛板の重要性は、そこに羅列された9名がすべて女性であり、うち7名が身分的に奴隸、8名が女美容師と明記されていることで、オスティアで美容師という職業が女性の生業として成り立っていたことのみならず、呪詛者

はおそらく彼女たちから疎外された女美容師で奴隸だったという蓋然性が指摘できることから、奴隸や解放自由人（＝解放奴隸）に属する女性たちの今に変わらぬ集客をめぐっての同業者間での競争・軋轢を想起させずにはおかしい素材なのである。

ついで、奥山広規氏が落書きについて報告する。氏は駆け出しの学部生時代から遺跡に散在・放置された碑文を読み解く作業に従事してきたのだが、その延長で今回は当時の庶民がオステイア遺跡の壁面に書き残した痕跡 graffiti の報告である。彼が今回取り上げるのは色々な意味でこれまで研究者の関心を呼んできた「ユピテルとガニメデの邸宅」*Domus di Giove e Ganimede* (I.iv.2)。この命名はこの邸宅最大の部屋にギリシア神話のゼウスとガニュメーデースが描かれているからだが、彼ら二人の関係は男色にあり、それがらみの落書きも確認されるので、この建物はこれまでそれ関係の施設と想定されてきた。遺跡および本邸宅の落書きの悉皆調査を通じてさて結論がどうなるのか、それ以上に落書きを通して庶民感性のむき出しの赤裸々な発露を捉えようという試みに、注目したい。

最後に、藤井慈子氏がイタリア在住の強みを活かし、研究者のみならず製造職の人との交流を重ねる中で、ガラス製造業の最新情報を伝えてくれる。かつて貴重品だったガラス製品は吹き技法が開発されて以降庶民にも手が届くようになり、帝都ローマの物資通過点オステイア・ポルトゥスでもご多分に漏れず製品のみか製造工房すら出土しているが、今回注目するのは後4世紀末のローマの工房で製造されたカット装飾付きガラス、とりわけ公認を勝ち得たキリスト教がらみの図案を刻んだ「プロティロの邸宅」(V.ii.4-5：ガラス以外にキリスト教的痕跡皆無) 出土の器断片を素材として、類例を含めて論じているが、このようなキリスト教的なイメージの容器をはたして信者のみが専断的に使用していたとしていいかどうかを勘案するなら、当時の開明的な？港町庶民の意外にいい加減でたくましい素顔を見ることができるかもしれない。

Ostia 遺跡の特異性と、最近の研究成果

豊田 浩志

まず、今回このようなミニシンポ企画に投稿の機会を与えていただき、心より感謝したい。詳細な個別研究は他のお三方にお任せし、筆者はこの機会に日頃抱いていた疑問に答えを出すべく、多少大きな話をさせていただきお役目を果たすことしたい。本誌第310号掲載の「発表要旨」にも書いたように、筆者もメンバーの調査団は2008年より現在まで文科省科研で継続的に、イタリア共和国のオスティア・アンティカ遺跡の調査を行ってきた。

筆者のような考古学の素人が首尾よく現地管理事務所の公式調査許可を得ることができたのには、ちょっとした工夫があったからだ。それは、メンバーに古代ローマ史研究者のみならず、九州大学工学部建築学科の堀賀貴教授を迎え、彼のチームが当時最先端の3D光学レーザー機器で測量を行い、そのデータを現地管理事務所に提供するという条件で、この調査が許されたのである。いわば、我々歴史畠や美術畠はお呼びでなかったのだが、堀教授のおかげで遺跡の主として表面調査に入ることができたのだった。このような体験から、異分野とのコーポレーションを怖れず試みることが重要だと力説する次第である。

調査に入ればすぐに得心することだが、2000年前実際そこに居住していた人々は、ごく普通の庶民だった。遺跡・遺物を仔細に調査する中で、彼らの日常生活の痕跡が解明されてゆく。歴史で主史料として扱う文書はその書き手の大半が当時のエリート層、支配層だったので、彼らが文字に書き記していた内実を判定するためにも、当時の日常性に触れることができるということは、筆者にとって大変刺激的な体験であった⁽¹⁾。問題は、レベルの違う文書史料 source と出土遺物 material をどう統合的に接合させるかということだが、これは今に至るまで筆者にとって検討課題となっている。

遺跡調査などまったく素人の筆者は最初遺跡内をひたすら彷徨する中で、自分のテーマを求め、これまでの研究者の手垢があまりついていないテーマとして、水回り、特に、トイレ、それと下水構造はどうかと定めた。このテーマは最初雲を掴むようなあやふやなレベルだったが、年月を経て、オスティアのみならず、イタリア国内のポンペイやヘルクラネウム、その他地中海沿岸の他の国々の遺跡を訪れる際

にも継続され、徐々に焦点が合い出し、公共浴場、さらには fullonica、すなわち当時の縮絨・洗濯・クリーニング業への関心へと展開してゆくことになる。結果論的にオスティアはその最適な遺跡だったのである。

2018年に広島で開催された第68回日本西洋史学会大会で、我ら科研チームは成果報告の一環で、小シンポ「見えざる人々の探し方：庶民史構築のために」（座長：坂口明・日本大学教授）を主催したが、そこでの問題意識は今回にも通底している。そして、モノとの接点を持つと、不思議なもので文書史料を残したエリート層へのまなざしも以前とは異なって、血の通った存在と感じるようになった。

さて、同一遺跡での現地調査を10年も継続していると、考古学のど素人といえども門前的小僧よろしきをえて、一丁前に独自の見解らしきものを抱くようになる。本稿では、なぜか欧米研究者も触れていない、盲点となっている幾つかのことにつづれ、しかるのちにここ20年間の欧米研究者たちの新たな挑戦を紹介することで、オスティア研究の現況と将来の研究方向性について考えるところを述べたいと思う。

まず第一に、一般的叙述においては、プテオリ、ミセヌム、オスティア、ポルトゥスという代表的な港湾都市にだけ関心が向けられ、これまでそれでよしとする傾向にあったのだが、Katia Schörle⁽²⁾はそれを見事に払拭して、これまで個別になされてきた地域研究を集大成した研究を公表した。このような研究が出たことにより、筆者にとりオスティアの位置づけを相対化して考え直すいい機会となった。すなわち改めて言うまでもないことであるが、地域の経済活動は、著名な港湾以外においてもそれなりの地域的背景をもって、中小の港で活発におこなわれていた。そしてそれらとオスティアも無関係ではありえなかつたし、規模の大小はあるがむしろ互いに組み込まれての存続と視点を置き直すことができたのである。

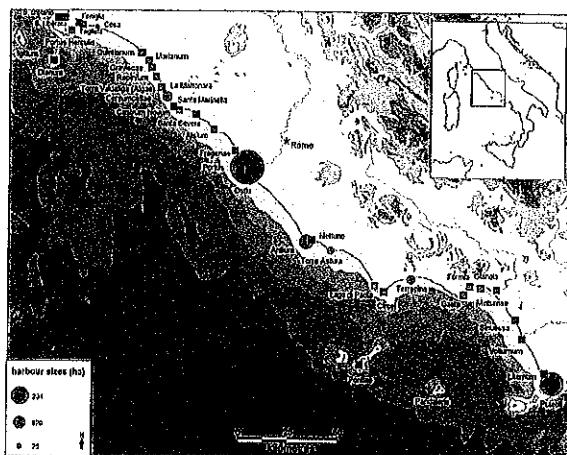


図1：中部イタリアのティレニア海沿岸港分布⁽²⁾

Ostia 遺跡の特異性と、最近の研究成果（豊田）

第二に、筆者にとってF・ブローデル⁽³⁾は大きな導きの星であった。彼によって自然環境である地中海の構造的特異性に気づかされたのだ。いまさら、古代において自然環境が人間に及ぼした絶大な影響力について多言を弄する必要はないだろう。とりわけ筆者が注目したのは、風力に依存していた当時の帆船にとって、航行可能だったのは春先の4月から雨期に入る前の9月の、半年にすぎなかつたという点である。

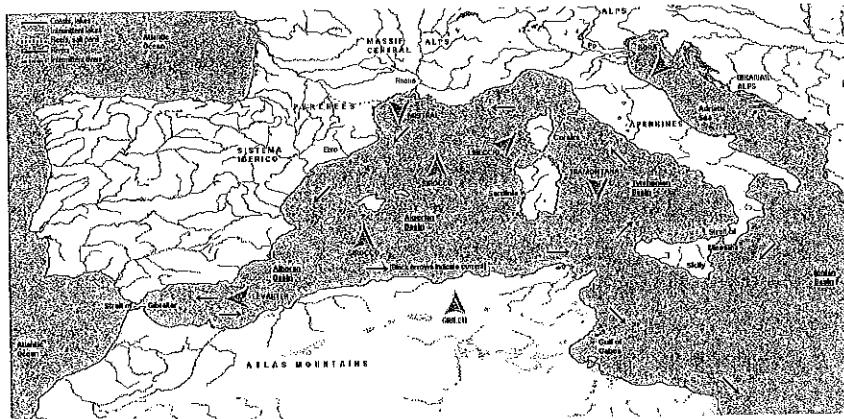


図2：地中海の自然環境：海流と風向き⁽⁴⁾

ところで、それに当時の港での荷揚げ作業は、今のように電動のクレーンもコンテナもなかったので、動力はほぼすべて人力に依存していたという、筆者にとっての常識を加味するとどうなるであろうか。確かにこの労働には最下層の無産平民も混じっていたかもしれないが、おそらくその大半は男子の奴隸たちであったはずではないか。これが第三の着眼点となる。

ここから筆者の論は飛躍する。前段のプローデルと後段の古代ローマの奴隸制を接合するなら、冬期すなわち雨期にオステイアでは港湾労働者の大半が不要となつたはずではないか。奴隸たちのご主人様はきっと彼らに無駄飯は食わさなかつたはずで、彼らを有効活用すべく別の肉体労働に投入したに違いない⁽⁵⁾。結果的にオステイア人口は毎年冬には激減、同時に都市機能も大幅に縮小したはずではないか…。ちょうど現代の Lido di Ostia が夏だけヴァカンツアの人々で賑わいさんざめき、他の時期は人影もなく閑散としているように。その時期、住民不在のコンドミニオはもとよりスーパーや多くの店舗が実質的に休業状態となっているのだ（気のきいた経営者であれば、今も昔も、たとえば首都ローマにもう一つ活動拠点を持っているのでは。否、事実は逆でオステイアが出店だったというべきか）。

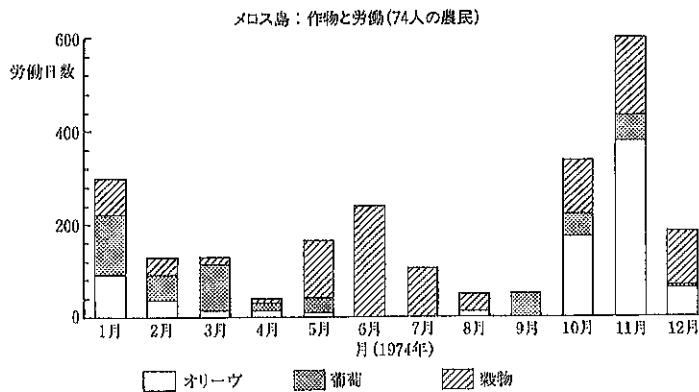


図3：地中海世界の農業労働の季節性⁽⁵⁾

この前段と後段は、それぞれの分野ではこれまで常識的に述べられてきたことだったのだが、なぜか先行研究者たちは両者を結びつけて考えてこなかったように思える。しかし筆者はこの事実はきわめて重要と考えざるを得ない。古代地中海沿岸都市の特性として、オステイアの隠れた主役が本当は奴隸たちだったのではないか、と考えるからである。

第四に、この20年間に遺跡調査に新たな研究手法が導入された。ある意味で堀教授の3D光学レーザー測量を凌いでいるようにさえ思える。それは深層ボーリング調査である。それと関連して地中レーダー、即ちGPRや、電気抵抗トモグラフィ、即ちERT、さらには放射性炭素年代測定、即ち14カーボンAMS、といった技術が惜しみなく投入されるようになり、オステイア研究においても画期的成果が現在陸續として目白押しの状況にあるといってよい。本稿では省略せざるをえないが、口頭発表のために選抜したビブリオの大半が実はそれ関係であり、しかも列挙したのは代表的なものにすぎない。理系論文はインターネットで即座に手軽に(ということは無料でという意味だが)入手可能なものが多く、今回の発表に際してこれは大変ありがたいことだった。ご存知のように残念ながら文系のほうはそうはない場合が多い。

筆者は考古学のみならず堀教授の3D光学レーザー測量にもまったく不案内で、今回触れる古地理学・地質学的手法に至っては、分析方法はいうまでもなく、解釈の仕方も多様で対応不能なのであるが、諸論文の最終的な結論部分のみをつまみ食いして紹介したい。というのは、その諸成果は多方面にわたって、しかもこれまでの通説をひっくり返すものであるからだ。

ここでは筆者に強烈な印象を与えた3つの事例を挙げたい。

Ostia 遺跡の特異性と、最近の研究成果（豊田）

第一が、かつてないほどティベリス川の川筋の変化や、それが土砂を沈殿させて拡大していった浜辺の様子が明らかになってきたことである⁽⁶⁾。まず図4だが、なんとティベリス川はかつて現在のフィウミチーノ空港あたりを主流と支流の2つの河口としていた。それは今から5000年前から2700年前まで、すなわち西暦前3000年ごろから前700年ごろまでのことだった。これは筆者には驚嘆モノの指摘で、濃い灰色の、フェーズ1でその時期の土砂堆積による三角州の成長を見てとることができる。この旧来の川筋が後世掘削された運河（複数）とどのように関わっていたのか、またこの流路変更の時期がローマ創建の伝説年代と微妙に重なっているのは偶然なのか、筆者の妄想は否応なくふくらんでいくのである⁽⁷⁾。

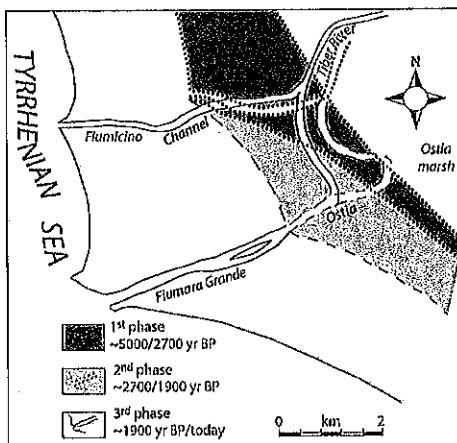


図4 : BP = Before Present⁽⁶⁾

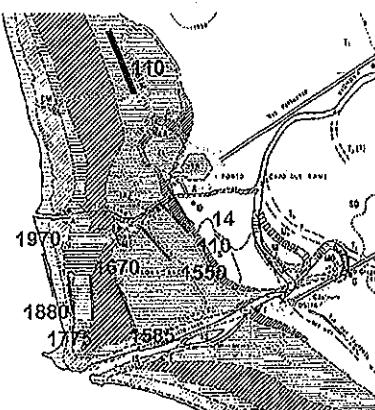


図5：その後の海岸線の前進詳細 数字は西暦年⁽⁶⁾

フェーズ2がやや薄い灰色で、前7世紀にティベリス川は川筋を突如大幅に変更して、南から西に走り出し、そこに新たな三角州を作り出す。これがおおむね今に通じるティベリス川の川筋である。図5はその後ティベリス川による土砂堆積を経年的に表示したものであるが、古代・中世にはさほどでもなかった土砂堆積が（それはその時期、海岸線の景観に著しい変化はなかったということを意味するはずだ）、なぜか16世紀以後急激に視認されて興味深い。これは上・中流域での人為的乱開発・自然破壊によるものであろうか。

植民都市 *colonia* オステイアとの絡みでティベリス川流路を示す図6の4つの連続図をご覧頂くと、16世紀までの間に東へ蛇行が伸びていたものが、1557年の大洪水をきっかけとして蛇行部分が切断されてしまったことがわかる。切断部分の川筋を、「死んだ川」*fiume morto* と称する。その干拓・農地化は20世紀までかかっている。

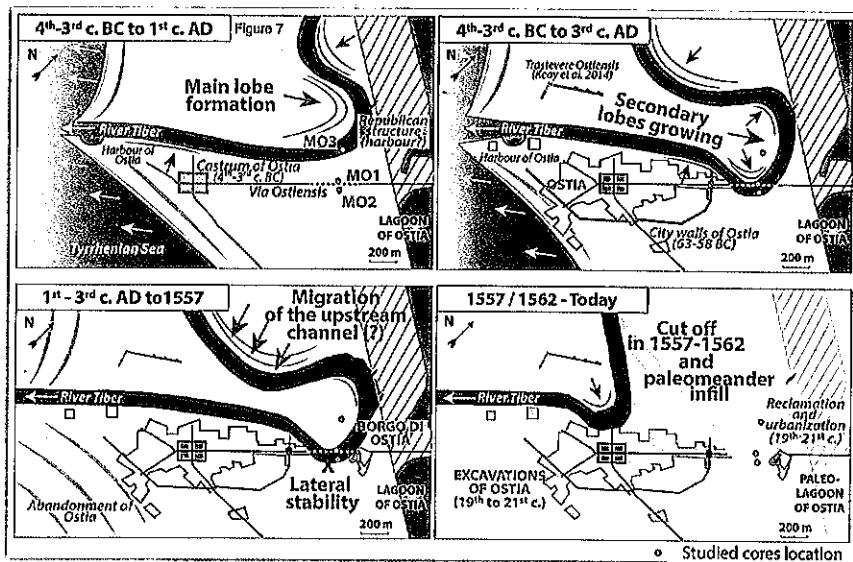


図6 植民都市オステイアとティベリス川流路⁽⁸⁾

こういったティベリス川の川筋の変化がらみで、古地質学的見地から注目しておきたいことがある。第一に、この地域には今と違って砂丘を挟んでティレニア海との間に広大な沼沢地があった。そこはもちろん淡水域であったが、前600年頃突然そこに海水が浸入し、汽水化してしまう。おそらく本格的な塩田化が企画されたのであろう。オステイアの東には塩田があり、青銅器時代中期・後期（紀元前1400～1000年）にはすでに塩が採取されていた。よっていずれにせよ、河口付近の景観は図4～6や、現在の実見からつい連想してしまい勝ちな単純な平地ではなく、図7

Ostia 遺跡の特異性と、最近の研究成果（豊田）

や8で示されるような沼沢地および塩田地帯で、この風景は基本的に19世紀まで変わらなかった⁽⁹⁾。その付近に近年まで塩の保存倉庫も残っていたほどで、長らく塩田業が営まれてきていたのだが、その後ようやく徐々に埋め立てられて、現在のようなひたすら平地の景観になったのである。こうして現在はおおむね耕作地となってしまい、かつての面影は残っていない。換言するなら、河口に位置する港湾都市オスティアの周辺景観は、古代このかたティベリス川が織りなす沼沢地と塩田風景であった。オスティアの立地を考えるとき、私見ではこの事実はどれほど強調してもしすぎではない。それが古代ローマ史研究で遺跡研究に固着するあまり見過ごされてきたのである。

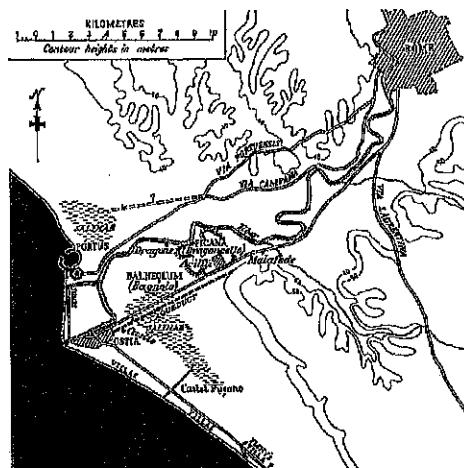


図7：波線部分が塩田区画⁽¹⁰⁾



図8：19世紀後半のオスティア近隣風景画⁽¹¹⁾

第二に、古代ローマ時代には、川筋の左岸（川上から川下をみて左側）に沿ってオスティアが位置しているのだが、往時ティベリス川が海に注ぐ河口に都市オス

ティアが接していたこと、さらに、最近の調査で、川の右岸側のいわゆる Isola Sacra = Insula Portus/Insula Portuensis 地区にも倉庫群を始め大型構造物の存在が判明しつつある⁽¹²⁾。こういう状況を加味するなら、かつて南から走ってきていた Via Severiana がティベリス川で行きつく、現在の Ponte della Scafa 付近の川幅はたかだか約85m であり、そのやや上流箇所に橋があっても不思議でないであろう。これまで碑文史料から 4 つの「渡し船」協同組合 *corpus traiectus* の存在が確認されているので、その文書史料に引きずられて、橋はなかった、人々は舟（はしけ）で川を渡っていたと主張されてきたのだが⁽¹³⁾、筆者からすると、渡し船協同組合があっても、それは橋の有無を決する根拠にはならないし（組合は他の渡河地点で活動していたと考えればいい）、どうやら1879年に橋脚の礎石が発見されていたことを匂わす文書が再発見されてもいる⁽¹⁴⁾。さらには、イゾラ・サクラを直線的に北上してポルトゥスに向かうローマ街道（幅10.5m：Via Flavia）の存在がポルトゥス手前の運河 Fossa Traiana に架かったもう一つの橋の存在を想起させざるをえないこともある。実は筆者はかつてイゾラ・サ克拉のネクロポリスから北に道を辿り、Basilica di S.Ippolito 遺跡の先を道を左手の Via Col Moschin にとって進み、行き止まりの私有地進入を避けて左側の当時柵もなくゴミ捨て場となっていた箇所から藪こぎをして進んでみた時に、眼前にいわゆる Terme di Matidia 遺跡が忽然と姿を現し驚かされた体験があるが、そこから運河に出た河岸でそれらしき石組み遺物を目撃もした。それがはたして古代のものか後世のものなのか、筆者には残念ながら判断できないのだが、その地点での河幅は対岸まで40m 足らず、そこからさらに直線で270m 北上すればトラヤヌス港に至る⁽¹⁵⁾。

そして第三に、これが今回のメイン・イベントなのだが、19世紀以来仮説的に河口港の存在が言及されてきたが、近年、当時のティベリス河口の手前左、河口最先端と想定されている Tor Bovacciana と遺跡公園北西端の Palazzo Imperiale の間の凹みに河口港の実在が、考古学的発掘とボーリング調査の検討から明確に特定された⁽¹⁶⁾。しかもこの港の水深は当初4.5m と大型の穀物輸送船も接岸できる深さがあつ

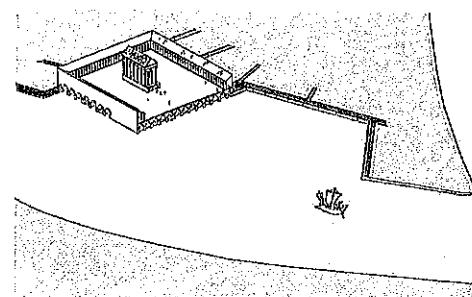


図9：神殿・船舶格納庫複合施設と河口港の復元図⁽¹⁶⁾

Ostia 遺跡の特異性と、最近の研究成果（豊田）

たこと、それが後4世紀にたとえ1.2mになっていたにしても、航路浚渫により平底船や河川用軍艦は十分活動可能だったこと、さらに、後1世紀の第1四半世紀に港に接して、ディオスクロイ神殿とその下に船舶〔通例は軍船〕格納庫 *navaia* が上下合体して構築され、セウェルス朝時代の修復を経て⁽¹⁷⁾、4世紀半ばまで使用されていた、とまで主張され出しているのである。

この河口港の終焉は、おそらく後355～363年かそれ以降（後365年7月21日のクレタ島地震と津波だった可能性が指摘されている）の津波の襲来によって、一挙に50cmの土砂の埋没が原因となり、この河口港が放棄されたと推定されている⁽¹⁸⁾。このような調査結果は、従来当然のごとく述べられてきた学説に、大幅な修正を余儀なくさせるだろう。いわく、オスティアには大型船は接岸できず、沖合で小型船に荷物を積み替えていたとか、その不便さ解消のため、オスティアの北方3kmに、1世紀半ばに皇帝クラウディウスが人工的な港を造り、それでも十分でなかったので、2世紀初頭にトラヤヌス帝がクラウディウス港の奥の陸地を掘って、六角形の内港を造った、この両者をポルトゥスというわけだが、その新港が成功したこと、オスティアは2世紀を頂点としてそれ以降衰微していった、といった内容がこれまで大手を振って主張してきたのだが、どうやら全面的見直しが必要となってきた

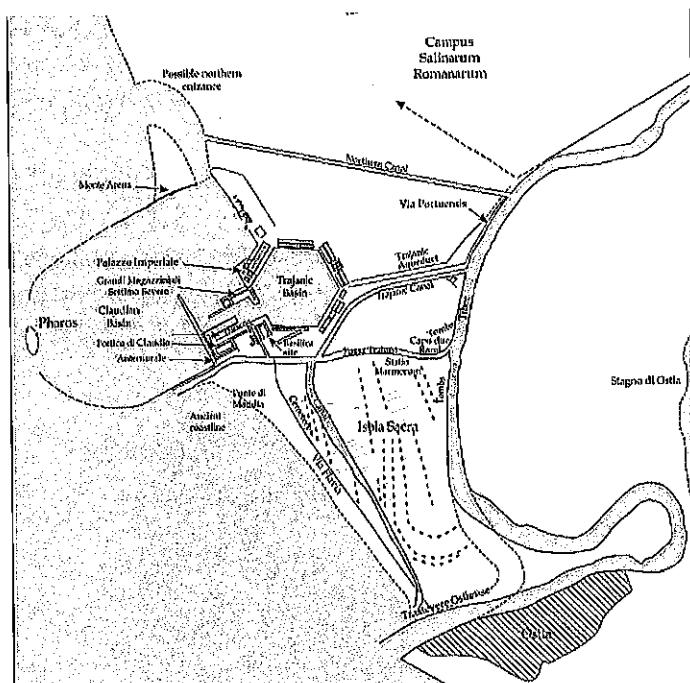


図10 イゾラ・サクラ地区の運河と街道：⁽¹⁹⁾参照

わけである。

私見では、オステイアとポルトゥスの関係をどう見直すのか、が今後問題となるはず。一方的な、かたや衰微、かたや隆盛といった関係でなかったことは、この2つの港を繋いでわざわざ運河や道路網が構築されていることからも明らかで⁽¹⁹⁾、筆者はこの2つの港を何らかの役割分担していた双子の港と考えるべきではと思っている。

このような諸考察に基づいて、略年表をまとめてみると、そこで改めて確認しておきたいのは、オステイアが形成される前、あの付近には塩田産業が先行していたこと、その利益を守るためにローマ最初の植民都市オステイアが建設されたこと、オステイアだけでは帝都ローマの需要をまかないきれなくなったので、ポルトゥスが造られたこと、そして両港とも古代末の帝都ローマの衰微に伴って、まずオステイアが、そして次にポルトゥスが放棄された、ということが言えるのではないだろうか。

そして本稿の最後に、上述したような事情をよく反映した都市オステイアの特徴、特にポンペイやヘルクラネウムとの相違点について簡単にまとめておきたい。

- ⑦ 物流の一大拠点：港湾都市特有の大規模倉庫群、多数の問屋街の存在
- ⑧ 多彩な人物流・宗教の結節点：東方密儀宗教（とりわけミトラス教）の多数の礼拝所・祠の存在：換言するなら、ローマ伝統宗教を例外として、帝国西方の神々の聖所は存在しない
- ⑨ 充実した都市インフラ：皇帝主導の堅固な公共建築物（神殿・円形劇場・大集合住宅等）による街造り：典型ローマ都市として存在しないのは競技場くらい（闘技場跡も最近指摘されている）
- ⑩ 多数の公共浴場の存在：少なくとも18（内、こじんまりしたもの3）もあった。一般市民専用と荷役労働者（＝奴隸）用の区別があった、かも
- ⑪ 奇妙なほど食堂・バール関係が少ない：あれば大規模なものが多い。奴隸には不要の存在だったから、ないしは都市最終段階での廢業のせい、かも
- ⑫ 大規模な製粉・製パン工房の存在：遺跡として7箇所確認されているが、若干の特殊事例（ユダヤ教シナゴーグ＝IV.xvii.1、等）を除いて高品質の小型パン焼き窯（現代のピザ窯クラス）が確認されず⁽²⁰⁾、低品質生産の大型ばかりなので、おそらく労働者（＝奴隸）配給用か⁽²⁰⁾

註

- (1) 印刷物の個別論稿や年度毎の調査報告書以外にも、その成果は隨時筆者のHP「西洋古代史実験工房」(<https://www.koji007.tokyo/atelier/>)に掲載しているが、一つの

Ostia 遺跡の特異性と、最近の研究成果（豊田）

集大成としては、坂口明・豊田編著『古代ローマの港町：オスティア・アンティカ研究の最前線』勉誠出版、2017、の他に、最近、堀賀貴編著の2編が公にされた：『古代ローマ人の危機管理』、『古代ローマ人の都市管理』九州大学出版会、2021。

- (2) Katia Schörle, Constructing Port Hierarchies : Harbours of the Central Tyrrhenian Coast, Ed. by Damian Robinson and Andrew Wilson, *Maritime Archaeology and Ancient Trade in the Mediterranean*, Oxford, 2011, 93-106；池口守「ローマ期ティレニア海沿岸の港湾インフラの発達と海上輸送費の低下」『久留米大学文学部紀要・国際文化学科編』第36号, 2019, 98(1)-88(13).
- (3) フェルナン・ブローデル（浜名優美訳）『地中海 I 環境の役割』藤原書店、1991、383-459 (Fernand Braudel, *La Méditerranée et le Monde Méditerranéen à l'époque de Philippe II*, T.I, Paris, 1949 [^1979], 211-252)。
- (4) 図2の典拠は以下：<http://www.ostia-antica.org/dict/topics/med/med.htm>
- (5) 労働力の移動については、地中海世界の季節労働を加味して、雨期におけるオリーブとブドウがらみの作業が想定可能であろう。ケヴィン・グリーン（池口守・井上秀太郎訳）『ローマ経済の考古学』平凡社、1999 (Kevin Greene, *The Archaeology of the Roman Economy*, London, 1986), 191, 図33。これは20世紀末のメロス島の事例であるが、ちなみに地中海の三大主要作物のうち「オリーブと葡萄に要する労働の大部分は冬期になされている。しかし穀物の刈り入れは、その間も中断されることなく続けられている」と述べている。
- (6) P.Bellotti et al., The Tiber River Delta Plain (Central Italy) : Coastal Evolution and Implications for the Ancient Ostia Roman Settlement, *The Holocene* (2011), 1-12 ; Antonia (Tonnie) Arnoldus-Huijzendveld, Roman Port : How the Coastline of Ostia Changed over the Centuries, 2016/2/18 (<https://www.romaports.org/en/articles/human-interest/41-how-the-coastline-of-ostia-changed-over-the-centuries.html>) . cf. 筆者ブログ2021/9/19. なお、ラツィオ州 Frosione 在住の藤井氏から、義父の話として、かつては12月までオリーブの実が樹上で干からびるまで待ち、寒い12-1月にかけて凍える手を持参した炭火コンロで温め温めしながら一ヶ月以上かけて収穫していたそうで、それは乾燥した実の方が圧縮の費用を抑えられたからで（重量での値段になるので）、早めに収穫した場合でもオリーブを広げて乾かしていた、ブドウはもっと手間がかって大変だった、との証言が寄せられているので紹介しておく。
- (7) 口頭発表時には気付かなかったが決定的に重要な以下の見解は看過しがたい。Carlo Giraudi et al., Carotaggi e studi geologici a Portu: Il delta del Tevere dai tempi di Ostia Tiberina alia costruzione dei porti Claudio e Traiano, *The Journal of Fasti Online*, 2007, 1-11. 本稿は古地質学的調査によって、先行諸仮説の不整合性を指摘して葬り去り、驚異的新説を提示している。これまで疑問視されていた前620年頃の第4代 Ancus Marcius 王による同盟都市オスティア創設 (*CIL XIV*, Suppl. 4338 ; *Ennius, Ann.* II,

- ff.22) を、以前ティベリス川河床が位置していたフィウミチーノ地区でのことと断定して、歴史的事実の反映と評価するとともに、Fossa Traiana と北側運河をティベリス古河床の本流と支流に同定してはばからない。図10参照。
- (8) F.Salomon et al., Long-Term Interactions between the Roman City of Ostia and Its Paleomeander, Tiber Delta, Italy, *Geoarchaeology* 32-2 (2017), 215-229.
 - (9) Roberto Mazza, et al., MT3 Coastal Hydrogeology of the Tiber River, *42nd International Association of Hydrogeologists: Hydrogeology : Back to the Future! Rome, Italy 13th -18th September 2015, Aqua 2015*, 1-9.
 - (10) Russell Meiggs, *Roman Ostia*, 2.ed., Oxford, 1973, 112, Fig.1.
 - (11) Jean-Baptiste-Adolphe Gibert (1803 – 1889) 作, The Salt Marshes, Ostia : <https://www.mutualart.com/Artwork/The-Salt-Marshes--Ostia/10F6F91FA905EDB6>. 絵画の右上に見えるのは沼沢地に自生していた葦で葺いた地元の家屋 2軒 (以下参照 : <https://www.ostia-antica.org/dict/topics/excavations/excavations12.htm>)。
 - (12) Paola Germoni et al., Ostia beyond the Tiber : Recent Archaeological Discoveries in the Isola Sacra, *Ricerche su Ostia e il suo territorio : Atti dei Terzo Seminario Ostense (Roma, École française de Rome, 21–22 ottobre 2015)*, 2018 = <https://books.openedition.org/efr/3734>
 - (13) オステイアとイゾラ・サクラの渡し船組合 corpus lenuncularii traiectus Luculli らについては、cf., Lionel Casson, Harbour and River of Ancient Rome, *The Journal of Roman Studies*, 55, 1965, 34 and n.29 ; Russell Meiggs, *op.cit.*, 297, 559.
 - (14) Paola Germoni et al., The Isola Sacra : Deconstructing the Roman Landscape, Ed. by Simon Keay & Lidia Paroli, *Portus and Its Hinterland : Recent Archaeological Research, Archaeological Monograph of the British School at Rome*, 18, 2011, 255, SITE 50 ; Paola Germoni, Gazetteer of Sites, Ed. by Simon Keay, et al., *The Isola Sacra Survey : Ostia, Portus and the Port System of Imperial Rome, McDonald Institute Monographs*, Cambridge, 2020, 182, G 50 : Bridge across the Tiber between Ostia and the Isola Sacra. cf., Figure 2.10.
 - (15) 以下ではすでに 'Ponte di Matidia' として街道の北端で命名されている。Keay, et al., Results of the Survey, Ed. by Keay et al., *The Isola Sacra Survey*, Figure 4.4. 同図には Fossa Traiana の対岸に橋脚の痕跡らしきものも描かれている。ネクロポリスから運河にいたる位置図については、以下参照、http://www.ostia-antica.org/valkvisuals/html/canal tomb_01.htm。教会の付近に statio もあり、橋の通行料業務にも携わっていた、との記述があり興味深い。<https://www.romanoimpero.com/2018/12/insula-portuensis-isola-sacra-lazio.html>
 - (16) Michael Heinzelmann, *Ostia I. Forma Urbis Ostiae: Untersuchungen zur Entwicklung der Hafenstadt Roms von der Zeit der Republik bis ins frühe Mittelalter*, Deutsches

Ostia 遺跡の特異性と、最近の研究成果（豊田）

- Archäologisches Institut. Abteilung Rom, Sonderschriften, 25, Wiesbaden, 2020, Untersuchungen in der Regio III, 191-280, Abbildungen 337-342; Heinzelmann and Archer Martin, River Port , *navalia* and Harbour Temple at Ostia : New Results of a DAI-AAR Project, *Journal of Roman Archaeology*, 15, 2002, 5-19.* 以下の簡明な叙述も参照のこと。ostia-antica.org/regiol/navalia/navalia.htm
- (17) *CIL*, XIV.376. cf., Mary Jane Cuyler, Legend and Archaeology at Ostia : P.Lucilius Gamala and the Quattro Tempietti, *BABESCH* 94, 2019, 142.
- (18) A.Vött et al., Geoarchaeological Evidence of Ostia's River Harbour Operating until the Fourth Century AD, *Archaeological and Anthropological Sciences*, 12-88, 2020, 27 pp. なお、Jean-Philippe Goiran et al., Geoarchaeology Confirms Location of the Ancient Harbour Basin of Ostia (Italy), *Journal of Archaeological Science*, 41, 2014, 389-398では、最新の上記説とは異なり、この河川港の当初の最大深度は当時の海面より 6 m あつたが、遅くとも後 1 世紀初頭には深度 50 cm 以下となり、よってボルトウス立ち上げ以前にすでに放棄されていた、としている。点ポイント的なポーリング調査につきもののデータのばらつきによる差異と思われる。
- (19) とりわけ以下の報告により、磁気探査 magnetometry survey と電気抵抗トモグラフィ Electrical Resistivity Tomography (ERT)、及びポーリング調査によってその存在が確認された、フラウイウス街道とともにイゾラ・サクラを南北に継続する運河の存在が、Fig.1 / Fig.5.1 に示されていて、重要。Ferréol Salomon et al., Connecting Portus with Ostia : Preliminary Results of a Geoarchaeological Study of the Navigable Canal on the Isola Sacra, Sous la direction de Corinne Sanchez et Marie-Pierre Jézégou, *Les Ports dans l'espace Méditerranéen antique: Narbonne et les systèmes portuaires fluvio-lagunaires. Actes du colloque international tenu à Montpellier du 22 au 24 mai 2014, Revue Archéologique de Narbonnaise, Supplément 44*, Montpellier, 2016, 293-304 ; Ed. By Keay et al., *The Isola Sacra Survey*, Chapter 5 The Portus to Ostia Canal, 2020, 123-139.
- (20) Cf., 筆者ブログ 2021/12/9 「小型パン焼き窯の所在」

(上智大学名誉教授)

呪われた女美容師たち —オステイア出土呪詛板の研究—

前野 弘志

はじめに

ローマ市の外港都市オステイアからは、管見の限り、現在までに4枚の呪詛板が出土している。小論ではこれらのうちローマ門の前に展開するローマ門ネクロポリスにある墓所 A2-I から1910年に出土した呪詛板を中心に考察する。これは縦10.5cm 横10.5cm の鉛の板であり、真ん中で縦に折られて閉じられた状態で発見された。開けると内面に9人の呪詛の標的(ターゲット、つまり被呪詛者)の名前が刻まれていた。名前は1行ごとほぼ一律に、標的の名前、女主人の名前、女奴隸 *ser(va)*、女美容師 *ornatrix* の順に書かれ、呪文や呪詛の理由などは一切書かれていない。この呪詛板に関する研究は少なく、これまで家名に着目した研究や同職組合に着目した研究はあるが、彼女たちを呪詛した人物の心の内を扱った研究は見当たらぬ。そこで小論では、この呪詛板を手がかりとして、古代ローマ時代の庶民の声無き声に耳を澄ませてみたい⁽¹⁾。

仮称	呪詛板情報
TDO.1	発見場所：ローマ門ネクロポリス（墓所 A2-I） 発見年：1910年 保管場所：不明（失われた） 標的：9人の女美容師たち 年代：前75-50年より後 言語：ラテン語
TDO.2	発見場所：ローマ門ネクロポリス（墓所 A2-II） 発見年：1910-1912年 保管場所：不明 標的：不明 年代：後14-37年以降 言語：不明（開かれたが解読されず）
TDO.3	発見場所：ローマ門ネクロポリス（墓所 A18a） 発見年：1954年 保管場所：オステイア新保管所 (Inv. 17044) 標的：約30人の女性たちと男性たち／釘付き 年代：後2世紀後半以降 言語：ラテン語
TDO.4	発見場所：消防隊宿舎の中（階段5の下の墓） 発見年：1911-1912年 保管場所：不明 標的：不明／釘付き 年代：後3世紀後半よりずっと後 言語：不明（おそらく開かれずじまい）

表1：オステイア出土呪詛板の一覧

1. オステイア出土呪詛板の概要

オステイア出土呪詛板をここでは *TDO* (*Tabula Defixionis Ostiensis*) と仮称し、年代の古い順に番号を振って並べ、呪詛板情報を一覧した（表1）⁽²⁾。

1-1. *TDO.1* :

これは表題の呪詛板であり、後に詳しく述じるので、ここでは触れない。

1-2. *TDO.2* :

これは Vagliari が1910-1913年にかけてローマ門ネクロポリスを調査した際に発見された呪詛板である。1912年の彼の報告書によれば「細工された骨が近ごろ再び発見された墓のそばで、茶色いニスが塗られた三つの小さな壺と多くの断片に分かれた鉛の薄板がまとめて発見された。その碑文は読むのが困難なので別の機会に報告しよう。これは明らかに一つの呪詛板 *una tabula defixonis* である」とある⁽³⁾。オステイアの遺跡は1938-1942年にかけて大々的に発掘され、報告書は戦後になってようやく出版されたが、その一つ *Scavi di Ostia III-1 [1958]* は、それまでに発掘された全ての墓所に番号を振り、*TDO.2*が発見された場所を「この墓のそば」Presso questa tomba と記すのみで墓所番号を明記していないが、文脈から考えて墓所2（前1世紀中頃）のそばを指すと読める⁽⁴⁾。またその場所からの出土物について、上記の Vagliari の報告書を引用しつつ、茶色のニスが塗られた三つの小さな壺、象牙の副葬品、おそらく一つの呪詛板 *una tabula defixonis* の残存と思われる鉛の薄板の断片をあげている⁽⁵⁾。しかしこの呪詛板に関する新しい情報はない。

記述の順序が前後したが、実は表題の呪詛板 *TDO.1*が発見された墓は *Scavi di Ostia III-1 [1958]* における墓所1（前1世紀前半）の中であり、墓所1の後ろの壁と接して墓所2が位置する⁽⁶⁾。「墓所1の後ろの壁に接続して、もう一つ別の墓所（墓所2）があり、（それは）部分的に西 *occidentale* の側壁が見られるグリッドの中にあり、それ（西の側壁）は墓所1のそれ（西の側壁）に続く」⁽⁷⁾。そもそもどの視点に立つかによって東西南北は変わってくるので表記が難しいが、*Scavi di Ostia III-1 [1958]* の二つの図版を参考にしつつ⁽⁸⁾、上記の引用文に従えば、墓所1から墓所2に連続して伸びる西壁を基準とするならば、墓所1と墓所2を隔てる壁は、西壁と直角につながっているので、墓所1から見れば南壁（後ろの壁、なぜならば墓所1の玄関はオステイア街道に向かって開いていたから）となり、墓所2から見れば北壁となる。しかし墓所1と墓所2の軸線（西壁）は南北ではなく、北西から南東へ伸びているので、南北より西に45度傾いていることになる。従って墓所1を北とすれば、墓所2は東に位置すると表現した方がより正確であると思う。

墓所2からの出土物として、陶製の土器と青銅の一片がそれぞれ入った二つの骨

壺と潰れた一つの骨壺が報告されているが、呪詛板は言及されていないので⁽⁹⁾、呪詛板が発見された場所は墓所2の中ではないことが分かる。上述したように「この墓のそば」とは墓所2のそばを指すと読める一方、その同じ墓を指しているはずの「細工された骨 *ossi lavorati* が近ごろ再び発見された墓のそば」(Vagliari [1912] p.22) がどの墓を指すのかは判然としない。というのも Vagliari のこの文章には (*Notizie*, 1911, pag.248) いう註があり、この墓を明確に同定しているはずなのに、当該箇所を見るとオスティアではなくトレヴィニャーノ・ローマーノのことが書かれており、細工された骨についても報告がない。同巻でオスティア出土の細工された骨が報告されているのは p.43である。そこにはヘルモゲネスの墓（後述）の下には、共和政期の円形の墓があり（おそらく *Scavi di Ostia III-1* [1958] の墓所3のこと）、その後ろに墓所の痕跡が確認され（おそらく *Scavi di Ostia III-1* [1958] の地点Eのこと）、「ここにも同様な細工された骨 *ossi lavorati* が集中して発見され、それらの内の一つは女性の頭が美しく表現されている」と書かれている。*Scavi di Ostia III-1* [1958] にも、地点Eで出土したものとして、女性の頭を表現した三つの細工された骨 *ossi lavorati* のことが述べられているので、両者の記述は一致している。つまり *Notizie*, 1911, pag.248は *Notizie*, 1911, pag.43の誤植だったのだろう。そうだとすると、「細工された骨が近ごろ再び発見された墓のそば」とは墓所2のそばにある地点Eを指していると考えて間違いない。従って TDO.2の発見場所は、墓所2のそば、かつ地点Eのそば、ということになる。

では「細工された骨が近ごろ recentemente 再び発見された ha ridato」とあるので、TDO.2の発見の少し前に、同様に細工された骨 *ossi lavorati* が発見された墓があるはずであるが、それはどの墓所だろうか。後述するように、TDO.1が発見された墓所 A2-I からも細工された骨の断片が発見されており、墓所 A2-I と墓所 A2-II は隣接しているので、先に細工された骨が出土した墓とは、どうやら墓所 A2-I のことを指しているようである。

Scavi di Ostia III-1 [1958] は、互いに隣接する北の墓所1（前1世紀前半）と東の墓所2（前1世紀中頃）を二つ墓所として区別して登録したが、オスティアのローマ門ネクロポリスとラウレンティウム街道ネクロポリスに関するそれまでの膨大な研究の包括的な編集を目指した Heinzelmann [2000] は、両者を一つの墓所 A2として登録し、その代わりに時代相で二つに区別して、北の古い施設を I 期（前1世紀の第二四半世紀から中頃、つまり前75-50年）、東の新しい施設を II 期（ティベリウス帝期、在位：後14-37年、つまり後1世紀前半）とした⁽¹⁰⁾。

Heinzelmann [2000] の A2の II 期の解説には、もはや TDO.2の記述が見られなくなっている。Vagliari はどうやらこの呪詛板を解読できず、報告されずじまいになったようである。保管場所についても記述が見当たらない。従って、これ以上この呪詛板について議論することは不可能である。

1-3. TDO.3：

これは1954年にローマ門ネクロポリスから出土した呪詛板である⁽¹¹⁾。この呪詛板の初出文献は Solin [1968] である。この本が出版された時点で、オスティアから出土した呪詛板は TDO.1 と TDO.2 のみと明記されている⁽¹²⁾。このローマ門ネクロポリスから発見された第三の呪詛板の発見場所は、*Scavi di Ostia III-1* [1958] の番号に従えば墓所11、Heinzelmann [2000] の番号に従えば A18a である。この墓所は TDO.1 が発見された地点（墓所1 = 墓所 A2-I）と同じ並びにあり、そこから北北東に向けて約87m 離れた場所、つまりローマ門からは約105m 離れた場所にある⁽¹³⁾。この墓所はそれ以前 Vagliari によっても Squarciapino によっても調査されたにもかかわらず呪詛板に関する報告がなかったので⁽¹⁴⁾、彼らはそれを見落としたようである⁽¹⁵⁾。というのも「それ（この呪詛板）は、あるカブチ墓、つまり貧民のための墓の中にあり、屋根の形に組まれた屋根瓦に覆われていた・・・このカブチ墓は攪乱されていたように思われる、つまりこの墓は陥没し、そのことによつて呪詛板が中に紛れ込んでしまっていた可能性がある」からである⁽¹⁶⁾。この呪詛板は2世紀、早くとも2世紀後半あるいはそれ以後に年代づけられる⁽¹⁷⁾。

この横長の長方形の呪詛板には表裏両面にラテン語でテキストが刻まれ、大きさは幅0.235m 高0.11m 厚0.002m で、縦の六つの断裂線によって七つの断片に分かれている⁽¹⁸⁾。巻かれた状態で発見された時には、この呪詛板から飛び出している棒状の金属が確認されたが、これは釘と考えられ、一般的に行われるよう呪詛板を貫通させたものではなく、おそらく呪詛板が折り畳まれる前に釘を包み込んだか、あるいは折り畳まれた後に釘を差し込んだものと考えられる（釘は今では失われている）⁽¹⁹⁾。

テキストの解説は呪詛板の保存状態が悪いためかなり困難であるが、分かることは、テキストは外面から始まり、まず標的を神靈に引き渡す定型文が書かれ、残りの判読可能な部分はほとんど標的の人名であり、[ligo] 「私は縛る」（外面1行）、peri(ant) (=pereant) 「彼女らが死にますように」（外面5行）、ocida(nt) (=occidant) 「彼女らが破滅しますように」（外面6行）、tabes(cant) 「彼女らが衰弱しますように」（外面9行）など呪いの定型句も見られ⁽²⁰⁾、内面は三つのコラムに分けて書かれた人名のみで、これは外面で書き切れなかつた標的の人名を書き続けたものである⁽²¹⁾。

呪詛の理由は不明であるが、呪詛の標的は約30名、大多数は女性で男性も4名おり（女性の多くは自由市民 Freie、男性はみな奴隸 Sklaven で彼女らの従僕 Diener）、Solin は一人の恋敵による恋愛呪詛であるように見えると推測している⁽²²⁾。Solin [1968] に続く本格的な研究はなく、その研究成果を Descoeuilles [2001] や Karivieri [2020] が踏襲して簡潔にまとめ、不明瞭な小さな写真を添えているだけである⁽²³⁾。それにしても一人の女性が一人の男性をめぐって30人近くの恋敵を呪つたとしたら、その男性はどれだけ男前だったのだろうか!? という疑問は残るが、

テキストの残存状況からして、これ以上の探究は望みが薄い。

1-4. TDO.4 :

これは消防隊宿舎で Vagliari が発見した呪詛板である。彼の1912年の報告書によると、消防隊宿舎の北側 Sul lato settentrionale、北東角 l'angolo nord-est の階段下の空間で土葬された二つの墓が発見され、その墓標としてそれぞれ1枚の瓦と遊戯用テーブルが再利用されていたが、「これらの墓の一つの中に、一つの呪詛板 una tabula defixionis があり、それは手紙の封筒のように折られ、釘が打ち付けられていた。それを無傷に保ったまま開けることは不可能な状態であった」とある⁽²⁴⁾。

消防隊宿舎の位置と年代について、オステイアに関する学術的なウェブサイト Ostia Harbour City of Ancient Rome に従って、以下にまとめた⁽²⁵⁾。消防隊宿舎 Caserma dei Vigili は Regio II - Insula 5に区画される。消防隊宿舎の発掘は Vagliari によって1911-1912年にかけて完了された。現在見られる遺構は、ハドリアヌス帝治世末期の132-137年に建設された。正面玄関は東側 east side に向かって消防隊通りに開いている。正面玄関から敷地に入ると奥に伸びる長方形の中庭があり、その奥に皇帝神殿 Augusteum があり、そこで最後の奉納物はゴルディアヌス3世（治世：238-244年）とその妃に対して捧げられたものであるので、244年にそこでの皇帝礼拝が終わったと見られる。中庭と皇帝神殿を取り囲むように敷地の外壁に沿って多数の小部屋が並んでおり、二階に上がる階段が四つある。この建物の最も新しい部分は北東角のわずかな部分 (fig.4の緑色の部分) であり、年代は第IV期の250年以降である。従って3世紀後半には消防隊はこの宿舎を去ったと思われるが⁽²⁶⁾、この建物で発見された最も新しいコインは355-363年のものであり、北東側 north-east の部屋52-54（第IV期の建て回し部分）では小さな竈が備え付けられており、また同じく北側隅の階段5の下の空間では後の時代の二つの墓が発見されている⁽²⁷⁾。

つまり北側隅の階段5の下の空間が TDO.4 の発見場所であると判明した。しかし呪詛板の年代については特定できない。常識的に考えて、消防団員が住んでいる宿舎の階段下に墓を作ることはあり得ないので、この墓は消防隊宿舎が放棄された3世紀後半よりもずっと後の時代とするのが妥当だろう。またこの呪詛板に Solin [1968] が言及しなかったことからすると、どうやらこの呪詛板も開かれずじまい、所在不明になったようである。従ってこの呪詛板についても、これ以上の考察は断念せざるを得ない。

* * *

以上、管見の限り知り得た4枚のオステイア出土呪詛板のうち、TDO.2とTDO.4は報告もなく所在不明、TDO.3は詳細な研究はあるものの断片すぎてこれ以上の探究は困難、残る TDO.1は、今では所在不明となっているとはいえ、精密なスケッチ

呪われた女美容師たち—オスティア出土呪詛板の研究—（前野）

が残されており、テキストもほぼ問題なく読めるので、以下ではこの呪詛板についてのみ再考を試みる。

2. 発見場所

冒頭で述べたように、TDO.1はオスティアのローマ門の前に展開するローマ門ネクロポリスの墓所 A2-I で発見された。それらの位置と歴史について概観することは、同呪詛板の年代を決定する上で不可欠な作業である。

2-1. ローマ門ネクロポリスの位置：

この公共墓地は、辺 A：ローマのオスティア門から出てオスティアのローマ門に至るオスティア街道、辺 B：この街道から途中で枝別れて並行に走りオスティアのセコンダリア門に至る墓地通り、辺 C：ローマ門とセコンダリア門の間の市壁、これら辺 A・辺 B・辺 C によって囲まれた鉛筆型の細長い区画である。ローマから陸路でオスティアに向かう旅人たちは、陸の玄関へと誘うアプローチをなすこの墓域を横目に眺めながら、門をくぐって市内に入って行った⁽²⁸⁾。

2-2. ローマ門ネクロポリスの歴史：

ローマ門ネクロポリスの歴史は、以下、八つの要素の組み合わせによって説明される。[1] 市壁：オスティアに市壁が築かれた時期は、前100-50年頃である⁽²⁹⁾。[2] ローマ門：市壁にローマ門が設置された時期は、かつては市壁の建設との関連においてスッラ時代の前100-75年頃とされたが、近年の調査によって前75-50年頃に修正された。これがローマ門の考古学的な第Ⅰ期であり、第Ⅱ期はドミティアヌス帝期（在位：81-96年）ないしトラヤヌス帝期（在位：98-117年）の後100年頃とされる（第Ⅱ期については後述）⁽³⁰⁾。[3] オスティア街道：ローマ門に入る手前のオスティア街道は考古学的に5期に区分される。第Ⅰ期は市壁およびローマ門の建設と同時期の前75-50年頃、まだ砂利道で、レベルは0.80-0.90m であった。第Ⅱ期はアウグストゥス帝期（在位：前27—後14年）後半からティベリウス帝期（在位：14-37年）、レベルが1.50m に嵩上げされた。これは後15年に起こったと文献に記録されているティベリス川の氾濫と関係があるのかもしれない。第Ⅲ期はクラウディウス帝期（在位：41-54年）、レベルが1.60m に嵩上げされた。第Ⅳ期はトラヤヌス帝期（在位：98-117年）、レベルが2.00-2.20m にさらに嵩上げされた。またこの時はじめて舗装道路となり、これに応じてローマ門も刷新されて、100年頃に大理石の化粧板で覆われた（ローマ門の第Ⅱ期）。この状態が2世紀いっぱい続いた後、第Ⅴ期はセウェルス帝期（在位：193-211年）、この時に新しい舗装と取り替えられ、これが今日見られる路面である⁽³¹⁾。[4] ローマ門ネクロポリス：ローマ門ネクロ

ポリスは考古学的に4期に区分される。第Ⅰ期は共和政末期の前2—1世紀、まだ墓所も少なく閑散としていた。第Ⅱ期は初期帝政期、墓域がオスティア街道の南南東側に沿って2列になって並び始めた。第Ⅲ期は後2世紀前半、墓域が密になった。第Ⅳ期は2世紀後半から3世紀、墓域がさらに密になった⁽³²⁾。[5] 墓地通り：この公共墓地を挟んでオスティア街道と反対側には、明らかにセコンダリア門の設置以前、既に舗装されていない道が存在していた。この道はこの公共墓地における2列目の墓所の並びが発生してはじめて敷設されたものである。その最初期の、おそらくアウグストゥス帝期（在位：前27—後14年）のレベルは1.35mであったが、その後何度も嵩上げされ、クラウディウス帝期（在位：41-54年）には1.65mとなった。この路面の上に盛り土がなされて最初の墓地通りが敷設され、最初の舗装が施された⁽³³⁾。[6] セコンダリア門：墓地通りが至るセコンダリア門は明らかにローマ門より高いレベルに立っており、後から設置された門であることは疑いない。その時期については従来、特に理由もなく、ローマ門の刷新（100年頃）と関連づけられていたが、近年の調査によってハドリアヌス帝期（在位：117-138年）になってからの設置と訂正された⁽³⁴⁾。[7] ヘルモゲネス通り：セコンダリア門の設置と同じ時期（つまり2世紀前半）に、オスティア街道と墓地通りをつなぐヘルモゲネス通りが、既にあった墓所群を破壊してその上に敷設された。そのため既にあった墓所群は、この道によって蓋をされた形で地下に埋もれることとなった⁽³⁵⁾。[8] ヘルモゲネスの墓：そして2世紀後半には、この通りの上に、道にせり出すような形でヘルモゲネスの墓が建設された⁽³⁶⁾。この立派な墓の主ドミティウス・ファビウス・ヘルモゲネスは、彼の墓碑銘によれば、都市から馬を与えられた者であり、貴族造営官の書記、都市参事会員、神君ハドリアヌス帝の神官を務め、彼の葬儀に際しては都市参事会員から公的な葬送行列によって名誉を与えられたオスティアの名士である⁽³⁷⁾。（時代が前後するが、ヘルモゲネス通りという名前は、通りより後に建てられたヘルモゲネスの立派な墓に因んで、現代の学者が付けた名前である⁽³⁸⁾）。このような過程をへて、TDO.1が出土した墓所A2-Iは、ヘルモゲネスの墓のほぼ真下に埋もれることになった。

2-3. 墓所A2-Iの歴史：

この場所の歴史はローマ門ネクロポリスの第Ⅰ期から始まる。ローマ門に入る手前の左手にある一角（逆にローマ門から出て右手の東に約14mの地点）に⁽³⁹⁾、前150年頃に年代づけられる最古の土地利用の痕跡Z9が確認され、ここでは簡単な火葬が行われていた⁽⁴⁰⁾。同じ場所に、ローマ門の建設と同じ時期（前75-50年）、墓所A2-Iが作られた⁽⁴¹⁾。これは長方形の簡素な囲い地（7.70m×5.10m）で、おそらく屋根はなく、オスティア街道に向かって玄関が開き、凝灰岩でできた立派なファサードがあった⁽⁴²⁾。（30の骨壺が砂の中の様々な深さに埋納されていたのが発見された。

時期区分（年代）	出来事
第Ⅰ期（前150年頃）	簡単な火葬場Z9
第Ⅱ期（前75-50年頃）	墓所A2-Iが建設（この中にTDO.1が発見）
第Ⅲ期（後14-37年）	墓所A2-IIが増設（このそばでTDO.2が発見）
第Ⅳ期（後2世紀前半）	オスティア街道と墓地通りをつなぐ道りが墓所A2-Iと墓所A2-IIを埋め立てて建設
第Ⅴ期（後2世紀後半）	その通りの上に道にせり出すようにヘルモゲネスの墓が建設

表2：墓所A2-Iと墓所A2-IIの歴史

どれが古い墓所に属しどれが新しい墓所に属していたのかを決定することはほとんど不可能である。骨壺群の上にある砂の中には *nella sabbia che stava sulle olla*、帝政期の壺や土器も発見された。骨壺aの中に骨の破片多数、骨壺cの中に共和政期の1アス貨（重さ10.5g）、骨壺bの中に紡錘形の土器と目の形の彫り込みがある細工された骨 *ossi lavorati* の断片、骨壺dの中に共和政期の1アス貨（重さ29.5g）と青銅の指輪、骨壺eの中に細工された骨の断片、骨壺eのそばに鉄の槍先、小さな皿、座った女性の土偶）があった⁽⁴³⁾。また骨壺fのそばで *Presso l'olla f*、文字が書かれた一つの鉛の薄板 *una lamina di piombo iscritta* (m. 0,105×0,105) が発見された（図版の所在は註を参照）⁽⁴⁴⁾。これが表題の呪詛板 TDO.1である。この墓所は前1世紀中頃に南東に向かって拡張されたので、現在では北西の古い墓所を A2-I、南東の新しい墓所を A2-II と呼んで区別している⁽⁴⁵⁾。その後の歴史もまとめて年表にまとめたものが表2である。

2-4. 呪詛板の年代：

以上の考古学的文脈から判断すると、TDO.1の年代は、墓所A2-Iが作られた前75-50年より後、同墓所がヘルモゲネス通りに蓋をされて地下に埋もれる後2世紀前半より前、ということは確定した。しかしこの呪詛板が発見された砂地には共和政末期から帝政期にかけての遺物が混在しており、どの骨壺がどの時代層に属するか見極めることは困難である。

これまでの研究史を振り返って見ても、やはり同様に、呪詛板の年代は自明でないことが判明する。小論で依拠した研究 (Vaglieri [1911]; CIL.XIV Suppl. [1930] 5306; Scavi di Ostia III-1 [1958]; CIL.I² [1986] 3036; Heinzelmann [2000]; Zevi [2004.1]; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010]) のほとんどは、考古学的な証拠に基づくものであり、この呪詛板が発見された墓の年代には言及するものの、呪詛板の年代には言及していない。特に CIL. I² [1986] 3036は「(この呪詛) 板が墓と同じ年代なのか、それともその墓が造られたずっと後に置かれたのか、我々には分からぬ」

と書いている。一方、プロソポグラフィックな研究に基づく Zevi [2004.1] p.23のみが「共和政末期の一つの呪詛板」*a late Republican tabella defixionis* と明記している。Zevi のプロソポグラフィックな研究については後述するが、それとて決定的な証拠とは言えないようと思われる。従ってこの呪詛板の年代は、帝政期に至る可能性も否定せず、幅を持たせて「前75-50年より後」と表記することとする。

3. テキストの解読

以下では、テキストの解読を試みるが、その前に呪詛板そのものの観察が必要である。呪詛板の外見はテキストの作成手順を示唆しているからである。

3-1. 材質とサイズ：

呪詛板の材質は鉛⁽⁴⁶⁾、サイズは縦10.5cm 横10.5cm⁽⁴⁷⁾、もともと写真はないが精巧なスケッチが残されている（スケッチの掲載場所は註を参照）⁽⁴⁸⁾。この呪詛板は早くも1930年までに所在不明となったようだ⁽⁴⁹⁾。

3-2. 穴：

まず注目すべきは、呪詛板に見られるいくつかの穴である。これらの穴について Vagliari [1911] p.87は次のように解説している。「それ（呪詛板）は二つ折りの書板のように畳まれていた。五つの穴を呈し、紐が通されることによって、それ（紐）がそれ（呪詛板）を閉じていた *la quale era piegata a guisa di un dittico. Presenta cinque fori per il passaggio del filo che la chiudeva.*」。また CIL.XIV Suppl. [1930] 5306 は上の解釈を踏襲して、「鉛の板 (0,105×0,105)、二つ折りの書板のように畳まれていた。1本の紐があって、それによってかつては（呪詛板が）結び付けられていたが、（その紐は）失われてしまった。五つの穴があり、それらを通って1本の紐が通されていた *tabella plumbea (0,105×0,105), in modum diptychi plicata; filum, quo olim colligata erat, periiit, foramina quinque, per quae filum ductum erat, exstant*」と解説している。さらに Cébeillas-Gervasoni et al. [2010] p.128も同様に、「二つに折り畳まれた薄板で、1本の紐によって閉じられていた、（その紐は）今でも見える五つの穴を通っていたに違いない *Laminetta piegata in due e chiusa da un filo che doveva passare attraverso i cinque fori ancora visibili*」と解説している。このように、二つ折りの書板のように畳まれた状態で発見されたこの呪詛板は、〈五つの穴に1本の紐が通されて封印されていた〉と伝統的に解釈されて来た。しかし筆者（前野）はまずこの解釈に首を傾げたくなる。

筆者（前野）は Vagliari [1911] fig.6をコピー機でコピーし、穴の部分をくり抜いて実際に穴を開け、呪詛板中央に見える少し斜めの縦の折り目に沿って内側に折っ

てみた。すると予想通り、重なり合う穴は一組もなかった。従ってこの小実験により、五つの穴に紐を通して呪詛板を封印したという解釈は成り立たないことが証明された。

次に、そもそも穴の数も数えようによつては八つにも数えられるが、さらによく観察すると、これらの穴には、呪詛板が作成される前からあった穴と、作成された後に生じた穴の2種類に分類することが可能だと判明した。つまり一方で、テキストの一部を欠損させている穴は作成後の腐食による穴であり、また他方で、文字が避けている穴は作成以前からあった穴ということである。まず腐食による穴を探すと、後に示したテキストの復元箇所を見れば明らかのように、左端2行目と3行目にかけての穴①、右端1行目の穴②、中央付近4行目と5行目にかけての穴③が、それに該当する。右端下端の穴④は余白にあり、文字を欠損させていないが、呪詛板の右辺を欠損させているので、腐食によるものと判断した。一方、右端3行目の下の穴⑤に着目すると、3行目の末尾のserに続くornatrixは、明らかにこの穴を避けて少し上方に書かれている。従つて、この穴はテキストが書かれる以前からあつた穴であると考えられる。

そしてこの穴には特徴がある。それはこの穴を囲むように、より大きな円形の筋が見られることである。同様にこの円形の筋を持つ穴は、下辺に水平に等間隔に並んで三つ認められる。これらの穴を右から左へ⑥、⑦、⑧とすると、穴⑤は穴⑥の真上に位置しており、これら四つの穴には明らかな規則性が伺える。従つて、穴⑤、⑥、⑦、⑧は意図的に開けられたものであり、おそらく釘穴であろう。そして釘穴の周辺にある、より大きな円形の筋は、打ち込まれた釘の釘頭による圧迫痕だと推測される。

そうならば、この鉛板は元々、何らかの部材に釘で固定されていたものであり、それを意図的に引き剥がして、あるいは既に引き剥がされていたものを再利用して、呪詛板を作ったと考えられるのである。そしてこの解釈が正しいならば、上に見た五つの穴に関する従来の解釈は、この呪詛板が書板のような形態をしており、なおかつ複数の穴を持っていたことから、本物の書板のように紐で閉じられたのだろうという直感的な類推に基づく解釈であり、さらにそれは100年以上にわたって無批判に引き写しされて來た記述に過ぎなかつたと言わざるを得ないだろう。

もちろん、その部材が何であったかは不明であるが、木材の可能性が考えられる。また呪詛板がしばしば冷たい水を通す鉛の水道管から作られたことを考慮するならば⁽⁶⁰⁾、水との関連性が推測でき、例えば、木材に打ち付けられた防水用の鉛板!? だったのかもしれない。

3-3. 文字：

次に文字に着目すると、丁寧に書かれ、大きさの粒も揃つており、線も伸びやか

で、行もほぼ真っ直ぐである。ただし1行目の末尾は少しだけ下がり、3行目の末尾は釘穴を避けるために少し上にずれている。また单語と单語の間には、不規則的ではあるが、読点が付されており、読点には短い縦線2本、短い縦線1本、点の3種類がある。これらの特徴からして、このテキストは文字を書き慣れた人物の手によると思われる。ただしこのテキストが呪詛者本人によって書かれたのか、その道のプロに依頼して書いてもらったのかは分からぬ。

3-4. テキストと試訳：

	Agathermeris Manliae · se[r(va)]	アガテメリス、マンリアの女奴隸
	[...]lea Fabiae ser(va) ornatrix	[...]レア、ファビアの女奴隸、女美容師
	[Ca]lethvche · Vergililae ser(va) ornatrix	カレテュケ、ウェルギリアの女奴隸、女美容師
	Hillara · Liciniae [ser(va) orn]atrix	ヒララ、リキニアの女奴隸、女美容師
5	Crheste Corn[eliae] ser(va) ornatrix	クレステ、コルネリアの女奴隸、女美容師
	Hillara · Selae · ser(va) ornatrix	ヒララ、セイアの女奴隸、女美容師
	Moscis · ornatrix	モスキス、女美容師
	Rvfa Apeliae · ser(va) ornatrix	ルファ、アペイリアの女奴隸、女美容師
	Chilla ornatrix	キラ、女美容師

3-5. 呪詛テキストのタイプ：

この呪詛板は呪詛の標的の名前しか書かれていない非常にシンプルなものであり、scripta et demandata（書かれて神靈に委ねられた名前）と呼ばれるタイプの呪詛テキストである⁽⁵¹⁾。従ってこの板が呪詛板であることは疑い得ない。またたとえ呪文などが書かれていないとしても、呪詛者は呪詛板を墓地に置く時、プロのコンサルタントから受けた指示通りに何らかの儀式を行い、呪文を唱えたであろう。呪詛板の発展過程として、初期のアッティカやシチリアの呪詛板は名前だけのタイプ name-only types に属し、標的の名前を知りそれを使うこと自体、疑いなく名前の主に対する力の行使であり、おそらく名前というものはある意味、標的の化身であったと見られていたのだろう (pars pro toto 魔術)。この基本的なタイプの呪詛板は次第と減少し、後1世紀までには完全に消滅した⁽⁵²⁾。一般に呪詛板のコンテンツが冗長・複雑かつシンクレティックになるのは2世紀以降のことである⁽⁵³⁾。

3-6. 読み：

まず問題になるのは2行目の人名 [...]lea である。かつては [Ac?]hulea⁽⁵⁴⁾、[Ac]-hillaea⁽⁵⁵⁾、Hylea (?)⁽⁵⁶⁾と様々な読みがあったが、近年では [...]lea⁽⁵⁷⁾として残し、復元が断念された⁽⁵⁸⁾。また小さなことではあるが、4行目の Liciniae をそのまま読むものと⁽⁵⁹⁾、Licini[a]e と復元するものがある⁽⁶⁰⁾。さらに細かなことではあるが、Vagliari [1911] p.87の6行目には scr(va) とあり、ser(va) の e が c になって

いる（おそらく誤植であろう）。また CIL XIV Suppl. 5306 [1930] のみが、1行目 ser の r を se[r] と補いとして記載しているが、これは正しい。また3行目の人名 [C] alethuche には (sic)⁽⁶¹⁾ あるいは (!)⁽⁶²⁾ が、5行目の人名 Crheste には (sic)⁽⁶³⁾ あるいは (sic!)⁽⁶⁴⁾ あるいは (!)⁽⁶⁵⁾ が、7行目の人名 Moscis には (sic)⁽⁶⁶⁾ が付されており、名前の綴りに問題があることを示唆している。さらに、読みには問題がないが、2行目の人名は [C]alethuche と補われているが⁽⁶⁷⁾、Vagliieri [1911] p.87, fig.6 の精巧な模写を見る限り、[Ca]lethuche と補った方が良さそうである。その他、どの読みも ser を ser(va) と補っているにもかかわらず、人名においては v を u と表記しており整合性がない。そこで小論では u を v で統一することとした。また読みには問題ないが、8行目の Apeiliae は Afilia のことかと見る疑問もある⁽⁶⁸⁾。

3-7. 女奴隸たる女美容師たちの名前：

この呪詛板に書かれた名前は2種類に分類される。①呪詛の標的である女奴隸たる女美容師たちの名前（各行の第1の要素）と、②彼女らの女主人の名前（各行の第2の要素）である。

まず①の名前について見ると、復元不可能な2行目「[---] レア」[---]lea を除いて、全てギリシア人の女性名である。1行目「アガテメリス」Agathemeris (希 Αγαθημερίς / 罗 Agathemeris)⁽⁶⁹⁾、3行目「カレテュケ」[Ca]lethvche (希 Καλλιτύκη, Καλιτύκη / 罗 Calityche, Caletyche, Callityche, Callitic(e))⁽⁷⁰⁾、4行目と6行目「ヒララ」Hilara (希 Ἰλάρα / 罗 Ilara, Hilara)⁽⁷¹⁾、5行目「クレステ」Crheste (希 Χρήστη / 罗 Chreste, Chresta, Cresta, Creste, Criste)⁽⁷²⁾、7行目「モスキス」Moscis (希 Μοσχίς / 罗 Moschis)⁽⁷³⁾、8行目「ルファ」Rvfa (希 Ροῦφα / ラテン名の事例なし)⁽⁷⁴⁾、9行目「キラ」Chila (希 Χίλα / 罗 Chila)⁽⁷⁵⁾。当時に正書法はなく、耳で聴いた音を頼りにラテン文字に置き換えたに違いないので、綴り方にはいくつかのバリエーションがあり、綴り間違いとは言えないだろう。碑文における奴隸の名前は一つだけの名前、とりわけギリシア名を持つことが多かった⁽⁷⁶⁾。

3-8. 女主人たちの名前：

次に②の名前について見ると、女性名詞の属格形は、女奴隸たる女美容師の所有者たる女主人の名前を示している。ローマの女性市民の名前は原則、父親の氏族名 nomen の女性形であり、家族名 cognomen の女性形もあったが、その名前は結婚しても変わらない⁽⁷⁷⁾。従って、女主人の名前は彼女の父親の家名を名乗っているのであって、既婚女性の場合でも、嫁ぎ先の家名を名乗っているのではない。それ故、この呪詛板に見られる女主人の名前の属格形は、彼女が既婚女性であっても、女奴隸たる女美容師が嫁ぎ先の家の所有ではなく、女主人自身の所有であることを表している。

3-9. エリートの家名：

女主人の名前は彼女の名前であると同時に、父親の氏族名 nomen ないし家族名 cognomen に由来する家名でもある。この呪詛板に見られる家名はいずれも、8行目の Apelia (Afilia のこと?) を除いて、オステイアの碑文に残された名門である。特に、ファビウス家とコルネリウス家はオステイアにおける共和政後期のエリートに属した。オステイアにおいてお抱え女美容師を所有することが出来た家はそう多くはなかったので⁽⁷⁸⁾、呪詛板の家名と碑文の家名は一致する可能性が低くないと考えられる。

特に興味深いのは女主人セイアが属する家である。この家は間違いなく certamente 裕福な騎士のマルクス・セイウスの家と考えられている。マルクス・セイウスはキケロがウアッロとアッティクスに当たる書簡にしばしば言及されており、前46年11月にはおそらく既に死亡していただろう。彼は、大ブリニウスによれば、ガチョウのフォアグラを考案した人物の一人と目され (Plin. *HN*. 10.52)⁽⁷⁹⁾、ウアッロによれば、オステイアの海のそばに農場を所有し (*Varro. rust.* 3.2.7)、そこでガチョウの群れを作るために、孵化、交尾、卵、雛、肥育という飼育の5段階に注意を払ったと言われている (*Varro. rust.* 3.10.1)。その他、耕作、養蜂、孔雀の飼育によって大きな利益をあげ、またデロス島とアフリカに商業的関心を持っていた人物として知られている⁽⁸⁰⁾。

またクラウディウス帝期（在位：41-54年）に、セイウス家の何人かの解放自由人 liberti が、皇帝の守護神 Lares Augusti の首位監督官 magistri primi たちの中にいて、彼らが大理石製の小さな円形の建物を奉獻したことから、セイウス家が皇帝礼拝を促進することによって、自らの皇帝家支持の意志を表明したと考えられており、このような彼らのオステイアにおける存在感は、それ以前からあったに違いなく、このことは共和政末期の一つの呪詛板 a late Republican *tabella defixionis* (TDO.1) の6行目「ヒララ、セイアの女奴隸、女美容師」が証明していると Zevi は考えているが⁽⁸¹⁾、Cébeillac-Gervasoni et al. は懷疑的である⁽⁸²⁾。

セイウスの同定は TDO.1 の年代にも関わってくる重要な問題ではあるが、決定的な証拠はない。いずれにせよ、小論の目的はオステイアの庶民の声に耳を傾けることにあるので、オステイアの名門の問題についてこれ以上立ち入ることは控える。

4. 女美容師たちの人間模様

4-1. 女性の職業：

古代ローマ社会において女性が就いた仕事は、墓碑銘の分析から103種類ほどが知られており、統計的に見て、職業を持った女性の大半は奴隸ないし解放自由人であり、自由人は稀であった⁽⁸³⁾。その中に女美容師 ornatrix も含まれる⁽⁸⁴⁾。彼女たち

呪われた女美容師たち—オステイア出土呪詛板の研究—（前野）

の中には、裕福な家に雇われたお抱え女美容師もいたし⁽⁸⁵⁾、仲間といっしょに街の店で働く女美容師もいた⁽⁸⁶⁾。

4-2. 女美容師の仕事：

髪を切ることはもちろん、染める、ブリーチする、洗髪する、フケを止める、結う、カールさせる、薄毛治療、ウィッグを作る、エクステを作る、その他、化粧する、爪を切る、アクセサリーを付ける、着付けするまで含まれた⁽⁸⁷⁾。毛染め剤にはクルミ、イカスミ、胆汁、腐敗したヒルが使われた。漂白剤には鳩の糞と灰を混ぜたものが、リンスには尿が、フケ止めや薄毛治療には牛や馬の糞が使われた。これらの強烈な匂いをごまかすために強い香水が使われた。また北方で捕虜にされた女性の髪から金髪のエクステやウィッグを作った。これら一連の作業には何時間も要した⁽⁸⁸⁾。また流行のヘアスタイルは、帝政期においては、皇妃のものが上流階級の女性たちに真似されて広まった。帝政期には髪を高々と盛り上げるのが流行ったが、TDO.1に書かれた女美容師たちが働いていたであろう共和政末期には、わりとシンプルなのが好まれたようである⁽⁸⁹⁾。

4-3. 女主人との人間関係：

女主人とお抱え美容師との人間関係は常に緊張を孕んでいた。気難しい女主人に小言を言われるくらいならマシな方だが、巻き毛の巻き方を間違ったり、ヘアピンが一つ外れただけでも、すぐに痴癡をおこして女美容師をヘアピンで刺したり、鞭で叩いたりといった体罰は稀ではなかった。逆に気に入られる仕事ができれば、チップを弾んでもらえることもあった⁽⁹⁰⁾。しかし TDO.1の標的はこのような暴君的な女主人たちではなかった。

4-4. 同業者たちとの人間関係：

TDO.1に書かれた女美容師たちのグループを女性たちの同職組合 collegium の一事例と捉える研究がある⁽⁹¹⁾。報告者もその解釈に賛同する。そこで同職組合の機能について考察する必要がある。

帝政期のローマ帝国には、至る所に様々な手工業者による何百もの同職組合があった。同職組合なので、同業者間の情報交換や仕事の調整も行われたであろうが、何よりも重要な機能は社交にあった。入会は個人の自由意志であり、たいてい月に一度は集会が行われ、会員は自分の組合の集会所 schola に集い、あるいは貧しい組合は居酒屋を集会所として、まず自分たちの職業の守護神に捧げ物をし、背で飲食を共にしながら互いの誕生日を祝ったり、談笑・冗談・噂話を楽しんだ。楽しい場の雰囲気を乱さないように、異議申し立ての類を議論する場としては別途、定期的に開かれる業務会が用意されていた。また集会の場で不適切に騒ぐ者、他人を侮辱

する者、規律を乱す者に対しては、定められた罰金が課された。さらに積み立て金を支払うことによって、将来の自分の墓所と埋葬の準備もした。このような機能を持った同職組合は、身よりのない奴隸たちにとっては“家族”のような存在であり、社会的な圧力から非難するための“家”でもあった⁽⁹²⁾。

4-5. TDO.1のテキストに見られる人間関係：

ここでもう一度 TDO.1のテキストを振り返ってみよう。9人の標的はほぼ一律に「標的の名前、女主人の名前、奴隸、女美容師」と書かれているが、不規則な点もある。つまり1行目のアガテメリスだけには「女美容師」がなく、7行目のモスキスと9行目のキラには「女主人の名前」がない。これを単なる書き忘れ、記憶忘れ、知らなかった、スペース不足に帰すこともできるが、もし素直に読むならば、アガテメリスは女美容師ではなかった、またモスキスとキラは女奴隸ではなかったことになる。もし全員が女奴隸であったなら、あるいは全員が女美容師であったなら、冒頭に女奴隸たち *ser(vae)*、女美容師たち *ornatrices* と書くことも出来たはずである。しかしそうなっていないのは、やはり一律に同じではなかったからではないだろうか。

まずモスキスとキラについて考えると、彼女たちが女奴隸と書かれなかった理由は、彼女たちが女奴隸ではなく、解放自由人あるいはその子孫であったからだと考えられる。彼女たちはお抱えの女美容師ではなく、街の店で働く女美容師たちだったのだろう。

次にアガテメリスは、素直な読みに従うと、女美容師ではなかったことになるが、これもまた考えにくい。この呪詛板に書かれたのは女美容師の同職組合のメンバーと見なされているし、事実それ以外の職業名は書かれていないので、皆が女美容師であったと考えるのが自然である。だとすればアガテメリスは元女美容師であったと解釈してはどうだろうか。彼女が年配の女性であり、既に女美容師を引退していたと考えれば、若い現役の女美容師たちと並んで名前が書かれていたとしても不思議ではない。また彼女の名前が書かれた場所は1行目、すなわち彼女は標的の筆頭であった。呪詛者が最も憎んだ人物の名前を筆頭に書いたことは当然である。彼女は引退してもなお、自分の率いる派閥に強い影響力を持ち続けていた人物だったのではないだろうか。

最後にこの呪詛板をローマ門ネクロポリスの墓所 A2-I に置いた呪詛者もまた、女美容師であったに違いない。そしてこの同じ同職組合のメンバーであったに違いない。しかし何らかの理由で冷遇され、同職組合から追放されたのではないだろうか。その追放を主導したのがアガテメリスの率いる派閥であったのかも知れない。全て推測ではあるが。

おわりに

もし何らかのトラブルによって、同職組合から追放された女美容師がいたとしたら、彼女の孤立感や焦喪感はいかほどだっただろうか。現世においても居場所がなく、来世における供養も約束されない。呪詛に至った原因は知りようがないが、筆者（前野）の耳には、この呪詛板からそうした者の慟哭の声が漏れ聞こえてくるような気がしてならない。

参考文献

- Borgia [2019] = Emanuela Borgia, Una *Tabella Defixionis* dalla Necropoli dell'Isola Sacra, Mireille Cébeillas-Gervasoni, Nicolas Laubry, Fausto Zevi (a cura di), *Ricerche su Ostia e il suo Territorio*, Atti del Terzo Seminario Ostiense (Roma, École Française de Rome, 21-22 Ottobre 2015), École Française de Rome (2019) p.125-138.
- Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] = Mireille Cébeillac-Gervasoni, Maria Letizia Caldelli, Fausto Zevi, *Epigrafia Latina, Ostia: Cento Iscrizioni in Contesto*, Edizioni QUASAR, Roma [2010], traduzione dell'edizione originale, Épigraphie latine, Armand Colin, [2006].
- CIL.I²* [1986] = *CIL.I²*, Pars II, Fasc. IV: Addenda tertia. 1: Textus 2: Tabulae. cura A. Degrassi, [1986].
- CIL.XIV* [1887] = *CIL.XIV, Inscriptiones Latii veteris Latinae*, cura H. Dessau, [1887].
- CIL.XIV Suppl.* [1930] = *CIL.XIV, Supplementum Ostiense*, cura Lothar Wickert, [1930].
- Descoeudres [2001] = J.-P. Descoeudres (ed.), *Ostia, port et porte de la Rome antique, musée Rath Genève*, Genève, Georg Edituer - Musée d'art et d'histoire, [2001].
- DNP = *Der Neue Pauly*.
- DT [1904] = Augustus Audollent, *Defixionum Tabellae: Quotquot Innotuerunt Tam in Graecis Orientis Quam in Totius Occidentis Partibus Praeter Atticas in Corpore Inscriptionum Atticarum Editas*, Paris [1904].
- Heinzelmann [2000] = Michael Heinzelmann, *Die Nekropolen von Ostia. Untersuchungen zu den Gräberstraßen vor der Porta Romana und an der via Laurentina*, München [2000].
- Karivieri [2020] = Arja Karivieri (ed.), *Life and Death in a Multicultural Harbour City: Ostia Antica from the Republic through Late Antiquity*, Acta Instituti Romani Finlandiae, vol.47, Roma [2020].
- Karivieri [2020] = Arja Karivieri, New Trends in Late Antique Religions, Beliefs and Ideas: Christianity, Judaism, Philosophy and Magic in Ostia, Arja Karivieri (ed.), *Life and Death in a Multicultural Harbour City: Ostia Antica from the Republic through Late Antiquity*, Acta Instituti Romani Finlandiae, vol.47, Roma [2020] p.371-385.
- Kolb / Campedelli [2005] = Anne Kolb / Camilla Campedelli, I collegi delle donne: L'esempio

delle mulieres, *Donna e Vita Cittadina della Documentazione Epigrafica: Atti del II Seminario sulla condizione femminile nella documentazione epigrafica*, Verona, 25-27 marzo 2004, a cura di Alfredo Buonopane e Francesca Cenerini, Fratelli Lega Editori, Faenza, [2005], p.135-142.

LGPN III.A = P. M. Fraser / E. Matthews (eds.), *A Lexicon of Greek Personal Names: Peloponnese, Western Greece, Sicily, and Magna Graecia*, Oxford University Press [1997].

OCD³ [1996] = Simon Hornblower / Antony Spawforth (eds.), *The Oxford Classical Dictionary*, Oxford / New York [1996].

Ogden [1999] = Daniel Ogden, Binding Spells: Curse Tablets and Voodoo Dolls in the Greek and Roman Worlds, Valerie Flint / Richard Gordon / Georg Luck / Daniel Ogden (eds.), Witchcraft and Magic in Europe, Ancient Greece and Rome, The Athlone Press, London [1999] p.3-90.

Ruggiero [1895-1922] = Ettore de Ruggiero (a cura di), *Dizionario Epigrafico di Antichità Romane* (A-H), [1895-1922], Vol.II, Part 2 (Consularis-Dinomogetimarus).

Scavi di Ostia III-1 [1958] = Maria Floriani Squarciapino / Italo Gismondi / Guido Barbieri / Herbert Bloch / Raissa. Calza (a cura di), *Scavi di Ostia: Vol. 3, Le necropoli, parte I: Le tombe di età repubblicana e augustea*, Istituto Poligrafico dello Stato, Libreria dello Stato, Roma [1958].

Solin [1968] = Heikki Solin, *Eine neue Fluchtafel aus Ostia* (Commentationes Humanarum Litterarum, 42), Societas Scientiarum Fennica, Helsinki [1968].

Vagliari [1911] = *Atti della R. Accademia dei Lincei anno CCCIC, serie quinta, Notizie deglie Scavi di Antichità*, vol.VIII, Roma [1911], p.84-87.

Vagliari [1912] = *Atti della R. Accademia dei Lincei anno CCCVIII, serie quinta, Notizie deglie Scavi di Antichità*, vol.IX, Roma [1912], p.51-52.

Varro, rust. = Marcus Porcius Cato on Agriculture, Marcus Terentius Varro on Agriculture, with an English Translation by William Davis Hooper, Revised by Harrison Boyd Ash, Loeb Classical Library, Harvard University Press [1935].

Zevi [2004.1] = Fausto Zevi, Cicero and Ostia, F. Zevi, Ostia, Cicero, Gamala, Feasts & the Economy. Papers in memory of John H. D'Arms, a cura di A. Gallina Zevi e J.H. Humphrey, JRA (Journal of Roman Archaeology) Suppl.57, [2004], p.15-31.

Zevi [2004.2] = Fausto Zevi, P. Lucilio Gamala senior : un riepilogo trent'anni dopo, F. Zevi, Ostia, Cicero, Gamala, Feasts & the Economy. Papers in memory of John H. D'Arms, a cura di A. Gallina Zevi e J.H. Humphrey, JRA (Journal of Roman Archaeology) Suppl.57, [2004], p.47-67.

青柳 [1990] = 青柳正規『古代都市ローマ』中央公論美術出版 [1990]。

ヴェーバー [2011] = カール=ヴィルヘルム・ヴェーバー『古代ローマ生活事典』小林澄栄訳、みすず書房 [2011／原書1995]。

呪われた女美容師たち—オスティア出土呪詛板の研究—（前野）

ケッピー [2006] = ローレンス・ケッピー『碑文から見た古代ローマ生活誌』小林雅夫／梶田知志訳、原書房 [2006/原書1991]。

坂口明／豊田浩志編『古代ローマの港町オスティア・アンティカ研究の最前線』、勉誠出版 [2017]。

サンジョルジオ [2017] = マルコ・サンジョルジオ「河と海の間の港町オスティア」、坂口明／豊田浩志編『古代ローマの港町オスティア・アンティカ研究の最前線』、勉誠出版 [2017] 21-32頁。

中野『プリニウスの博物誌』= 中野定雄／中野里美／中野美代訳、第六版、雄山閣 [2001]。

ペッレグリーノ [2017] = アンジェロ・ペッレグリーノ「オスティア 歴史的—考古学的プロフィール」、坂口明／豊田浩志編『古代ローマの港町オスティア・アンティカ研究の最前線』、勉誠出版 [2017] 3-13頁。

水谷『羅和辞典』= 水谷智洋編『羅和辞典』改訂版、研究社 [2009]。

レオン [2009] = ヴィッキー・レオン『図説 古代仕事大全』本村凌二監修、原書房 [2009／原書2007]。

註

- (1) 小論は2021年10月31日にオンラインで開催された2021年度広島史学研究会大会西洋史部会において、小シンポジウムの形で報告された4つの報告のうち、前野弘志「オスティア・アンティカ出土呪詛板に書かれた美容師たち」に加筆修正を加えて論文化したものである。
- (2) オスティアからティベリス川を超えて北西に広がるイゾラ・サクラ（オスティアとそれに替わる新港ポルトゥスの間に広がる海岸平野）のネクロポリスから1枚の呪詛板が出土しているが（Borgia [2019] p.125-138）、ここではオスティア出土に限定するのでこれについては考察しない。
- (3) Vagliari [1912] p.22。
- (4) *Scavi di Ostia III-1* [1958] p.13。
- (5) *Scavi di Ostia III-1* [1958] p.13-14, p.54のn.15, p.239。ここでp.14、茶色のニスが塗られた三つの小さな壺が発見された位置として、「象牙の埋納品のそばで」“nei pressi,¹⁵⁾ della deposizione degli avori”と強調されている理由が分からぬ。引用符で囲まれた部分には註15が付けられ、そこには出典としてVagliari [1922] p.22と書かれているが、そこには「細工された骨 ossi lavorati が近ごろ再び発見された墓のそばで」と書かれているだけで、象牙 avori の埋納品が発見されたとは書かれていない。細工された骨と象牙を混同したのだろうか。
- (6) *Scavi di Ostia III-1* [1958] p.20-22, p.239。
- (7) *Scavi di Ostia III-1* [1958] p.22。

- (8) *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.21, fig.2: pianta delle tombe 1 e 2 (方位マークがない)、fig.1: pianta generale (方位マークがある)。
- (9) *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.23.
- (10) Heinzelmann [2000] S.124-126, S.125, Abb.41.PR A2 (I. Phase) (方位マークがあり、これら二つの墓所が北と東に並んでいることがはっきりと分かる)。
- (11) Solin [1968] S.3。
- (12) Solin [1968] S.4, Anm.2; S.30。
- (13) 距離は *Scavi di Ostia* III-1 [1958] の fig.1 - Pianta Generale の縮尺に基づいて筆者（前野）が計算した結果である。この計算に従えば、ローマ門と墓所 A2-1との距離は 18m となる。
- (14) 墓所11の記述は *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.29-30。
- (15) Solin [1968] S.4, Anm.4。
- (16) Solin [1968] S.4。
- (17) Solin [1968] S.5。
- (18) Solin [1968] S.5。
- (19) Solin [1968] S.5。図版は Solin [1968] S.11-12、写真は Tafel I-III を参照。
- (20) テキストは Solin [1968] S.10, S.13。
- (21) Solin [1968] S.13。
- (22) Solin [1968] S.13-14。
- (23) Descoedres [2001] p.448; Karivieri [2020] p.384, p.506。後者は「約30人の奴隸 slaves あるいは解放奴隸 freed slaves を標的にしている」と解説しているが (p.506)、それは Solin [1968] が一般論を言っている文章 (S.14, Z.16-21) の引き写しではないだろうか。ちなみに筆者（前野）は、日本の学界で一般に使用されている「解放奴隸」ではなく、同じ意味で「解放自由人」という語を使用する。英語 freed slaves／ドイツ語 Freigelassene と訳されるラテン語は liberti であり、制約があるとは言えもはや「奴隸」ではなく「自由人」だからである。
- (24) Vagliari [1912] p.52。
- (25) <https://www.ostia-antica.org/regio2/5/5-1.htm> (最終閲覧日：2022年6月21日)。
- (26) オスティアの衰退は3世紀半ばから始まったとされ、その原因は帝国規模の政治的経済的危機と商業活動の重心がポルトゥスに移動したことによると考えられている（ペッレグリーノ [2017] 10頁）。
- (27) 以上の文章における方位は Vagliari の報告書および上記ウェブサイトの記述に従ったが、他の地図と比較すると、東は北東に、北は北西に、西は南西に、南は南東にと、反時計回りに45度回転させた方がより正確であるように思った。
- (28) オスティアには、陸の玄関であるローマ門とセコンダリア門に加えて、海の玄関ともいるべき海岸門があり、さらにラウレンティウム地方へと向かうラウレンティウム

呪われた女美容師たち—オスティア出土呪詛板の研究—（前野）

ム門があるが、呼び名はいずれも現代のものである（ペッレグリーノ [2017] 7頁）。

オスティアのネクロポリスは、ローマ門の前に展開するローマ門ネクロポリスの他に、ラウレンティウム街道に沿って展開するラウレンティウム街道ネクロポリスがある。

- (29) ペッレグリーノ [2017] 6頁。
- (30) 以上、ローマ門について、Heinzelmann [2000] S.32。
- (31) 以上、オスティア街道について、Heinzelmann [2000] S.31-32。
- (32) 以上、ローマ門ネクロポリスについて、Heinzelmann [2000] S.36-37, Abb.15-18（方位マークがない）。
- (33) 以上、墓地通りについて、Heinzelmann [2000] S.33。
- (34) 以上、セコンダリア門について、Heinzelmann [2000] S.32-33。
- (35) 以上、ヘルモゲネス通りについて、*Scavi di Ostia III-1* [1958] p.20; Heinzelmann [2000] S.33, S.37, Abb.17。
- (36) Heinzelmann [2000] S.37, Abb.18。
- (37) *CIL.*XIV Suppl. [1930] 5306, 4642; cf. *CIL.*XIV [1887] 353。
- (38) *Scavi di Ostia III-1* [1958] p.20。
- (39) *Scavi di Ostia III-1* [1958] p.20; Heinzelmann [2000] S.125。小論の註13の計算（18m）と少し合わない。
- (40) Heinzelmann [2000] S.34, S.36, Abb.15, S.125。
- (41) *Scavi di Ostia III-1* [1958] p.239（墓所1、前1世紀前半）; Heinzelmann [2000] S.126（墓所AZ-I、前1世紀第二四半世紀から中頃）。
- (42) Heinzelmann [2000] S.125。
- (43) Vagliari [1911] p.85-87の要約；cf. *Scavi di Ostia III-1* [1958] p.21; Heinzelmann [2000] S.125-126。
- (44) Vagliari [1911] p.85; *Scavi di Ostia III-1* [1958] p.21; Heinzelmann [2000] S.125。
- (45) Heinzelmann [2000] S.126, S.36, Abb.16。
- (46) Vagliari [1911] p.87; *CIL.*XIV Suppl. [1930] 5306; *Scavi di Ostia III-1* [1958] p.137; *CIL.*I² [1986] 3036; Heinzelmann [2000] S.125; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。
- (47) Vagliari [1911] p.87; *CIL.*XIV Suppl. [1930] 5306; *CIL.*I².[1986] 3036; Heinzelmann [2000] S.125; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。
- (48) Vagliari [1911] p.87, fig.6; *CIL.*I² [1986] 3036; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128; cf. *CIL.*XIV Suppl. [1930] 5306（図式的なもの）。
- (49) *CIL.*XIV Suppl. [1930] 5306; *Scavi di Ostia III-1* [1958] p.137; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。
- (50) Ogden [1999] p.12-13。
- (51) Vagliari [1911] p.87; *CIL.*XIV Suppl. [1930] 5306。同様のものとしてDT.215（2世紀末

あるいは3世紀初め)などがある(DT [1904] p.290)。Ruggiero [1895-1922], Vol.II, Part 2, s.v., Defixioにscripta et demandataの解説があるらしいが、入手できなかったので未読。

- (52) 以上、呪詛板の発展過程について、Ogden [1999] p.6。
- (53) Ogden [1999] p.4。
- (54) Vagliieri [1911] p.87。
- (55) CIL.XIV Suppl. [1930] 5306。
- (56) Scavi di Ostia III-1 [1958] p.137; Heinzelmann [2000] S.125。
- (57) CIL.I² [1986] 3036; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。
- (58) 復元された名前 Achulea, Achillea, Hylea はいずれも LGPN III.A [1997] には掲載されていない。
- (59) Vagliieri [1911] p.87; CIL.I² [1986] 3036; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。
- (60) CIL. XIV Suppl. [1930] 5306; Scavi di Ostia III-1 [1958] p.137; Heinzelmann [2000] S.125。
- (61) Vagliieri [1911] p.87。
- (62) Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。
- (63) Vagliieri [1911] p.87; Heinzelmann [2000] S.125。
- (64) Scavi di Ostia III-1 [1958] p.137。
- (65) CIL.I² [1986] 3036; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。
- (66) Vagliieri [1911] p.87。
- (67) Vagliieri [1911] p.87; CIL.XIV Suppl. [1930] 5306; Scavi di Ostia III-1 [1958] p.137; Heinzelmann [2000] S.125; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。
- (68) Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.129。
- (69) LGPN, III.A, Αγαθημερίς, [1997] p.2。
- (70) LGPN, III.A, Καλλιτύκη, [1997] p.235。
- (71) LGPN, III.A, Ἰλάρα, [1997] p.218。
- (72) LGPN, III.A, Χρήστη, [1997] p.478。
- (73) LGPN, III.A, Μοοχής, [1997] p.305。
- (74) LGPN, III.A, Ροῦφα, [1997] p.385。
- (75) LGPN, III.A, Χιλα, [1997] p.476。
- (76) OCD³ [1996], names, personal, Roman, 9. Names of foreigners, slaves, and freedmen, p.1025。
- (77) OCD³ [1996], names, personal, Roman, 7. Women's names, p.1025; ケッピー [2006] 25頁。
- (78) 以上、オステイアの名門について、Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.129。
- (79) 中野『プリニウス博物誌』1巻、444頁。
- (80) 以上、セイウス家について、Zevi [2004.1] p.19, n.20; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.129。

呪われた女美容師たち—オスティア出土呪詛板の研究—（前野）

- (81) Zevi [2004.1] p.22-23。
- (82) Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.129。
- (83) ヴェーバー [2011]、女性の仕事、294頁。
- (84) ヴェーバー [2011]、女性の仕事、291頁。
- (85) レオン [2009]、美容師 Ornatrix、38頁；ヴェーバー [2011]、髪型、112頁；ヴェーバー [2011]、理髪師、540頁。
- (86) レオン [2009]、美容師 Ornatrix、39頁。
- (87) レオン [2009]、美容師 Ornatrix、38-39頁；水谷『縦和辞典』、ornatrix 「着付けや化粧を手伝う女奴隸」、443頁。
- (88) 以上、毛染め剤、漂白剤、リンス、香水、フケ止め、薄毛治療、エクステ、ウィッグ、爪を切る、仕事時間について、レオン [2009]、美容師 Ornatrix、38-39頁；ヴェーバー [2011]、理髪師、540頁。
- (89) 以上、髪型について、レオン [2009]、美容師 Ornatrix、38頁；ヴェーバー [2011]、髪型、112-113頁。
- (90) 以上、体罰、チップについて、レオン [2009]、美容師 Ornatrix、39頁；ヴェーバー [2011]、髪型、112-113頁。
- (91) Kolb / Campedelli [2005] p.136-137。
- (92) 以上、同職組合について、DNP, Bd.3 [1997], Collegium, K.67；ヴェーバー [2011]、職人、288-289頁。

（広島大学大学院人間社会科学研究科）

オスティアの「性的」グラフィッティ

—Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)—

奥山 広規

はじめに

グラフィッティ (graffiti) といえば、「引っ搔かれたもの」を意味し、即興的に、そして一時的な気まぐれで自発的になされるものである⁽¹⁾。それがなされる場所、媒体は問われず、引っ搔くための道具も、ローマ人がしばしば持ち歩いていた鉄筆 (stylus) や鍵をはじめ、その辺の石など、丈夫でとがったものならば何でもよく⁽²⁾、誰でも作成できた。そうして記されたのはとりとめのない出来事や思い、伝言、メモなどの豊富なテキスト⁽³⁾、様々な図像⁽⁴⁾であるが、意味のない、あるいは意味を(我々が)理解できないものも多く、全体として大した内容ではない。ところがそれを日常性が故と捉えるならば、当時の人口の大半を占めていながらも研究の対象とすることが難しい「庶民層」、その実態に迫る可能性をもつ稀有な研究資料へと変わる。ポンペイに代表されるウェスウィウス関連遺跡での研究がよく知られているが⁽⁵⁾、本稿の舞台となるのは「オスティア」である。

オスティアは、紀元前4世紀創建のローマの植民都市である。ティベリス川河口に位置する首都ローマの外港でもあり、東西の人や物が行きかう極めて重要な舞台であった。遺跡となってからも稀有な存在で、良好に当時の町並みを残している。当然ながら世界中の研究者の注目を集めしており、日本調査隊も2008年以来、建築、経済、社会、宗教、美術、住環境といった様々な観点から、都市オスティアの構造と人々の活動の解明に取り組んできている⁽⁶⁾。その一環として筆者は、グラフィッティに注目し、その手始めとして2017年から悉皆調査を行ってきたが⁽⁷⁾、ようやく調査に日途がつき、オスティア・グラフィッティの全体的な傾向を論じるに足るものとなった。そこで本稿では、オスティア・グラフィッティの中でも、「性的なもの」を扱う。「性的」グラフィッティは、まさに生々しい肉声を体現しており、庶民や日常へのまなざしとして論じるにふさわしい。さらには、ポンペイの事例があまりにも有名であるため⁽⁸⁾、時空間的に異なるオスティアの事例を検討することは、オスティア研究のみならず、グラフィッティ自体の研究に寄与するものとなる。

1 オスティアの「性的」グラフィッティ

オスティアのグラフィッティの総数は、データベース (Ostia-Harbour City of Ancient Rome (<http://www.ostia-antica.org/>)) の情報と筆者による調査成果を踏まえれば、62遺構から844点（文字グラフィッティ516点、図像グラフィッティ263点、どちらとも分類できないその他65点）⁽⁹⁾である。「性的」グラフィッティは、性的な要素を含むカテゴリー、いわゆる「エロティカ (Erotica)」であり、テキストとしては、とりわけ異性、同性間を問わず、性愛、性愛を種にした侮辱など、図像では、まさに性行為そのものを表現したものや性器のモチーフからなり、オスティアでは5遺構から19点を数える（表1）。

表1 オスティアの「性的」グラフィッティ

遺構番号	遺構名	総数 (文字 : 図像)
I. iv. 2	Domus di Giove e Ganimede (ユピテルとガニメデの邸宅)	7 (5 : 2)
I. xii. 6	Terme di Foro (フォルム浴場)	1 (0 : 1)
II. v. 1	Caserma dei Vigili (消防隊の宿舎)	1 (1 : 0)
III. viii. 2	Terme Marittime (海岸浴場)	2 (2 : 0)
III. x. 1	Caseggiato degli Aurighi (戦車御者の集合住宅)	8 (8 : 0)
		19 (16 : 3)

5遺構19点は、他の遺跡と比べると非常に少ない。たとえばポンペイの有名な娼館 (VII. xii. 18-20) では、文字グラフィッティに限っても45点ほどあった⁽¹⁰⁾。オスティアではその長期性のために支持体が失われてしまったとも考えられるが、多くの漆喰とそのために多くのグラフィッティが残されているドゥラ・エウロボスで「性的」グラフィッティはまったくない（少なくとも記録されていない）ので⁽¹¹⁾、オスティアの「性的」グラフィッティの少なさは、何か別な理由がある可能性が高い⁽¹²⁾。

ともあれ、オスティアの「性的」グラフィッティを論じるにあたって、本稿では、Domus di Giove e Ganimede の事例に着目する。事例点数が多く、文字も図像もあり、そして何よりも、この遺構は文献史料、碑文こそ欠いているが、建築学的に着目されており、コンテクスト把握が可能となっている。コンテクストを把握できないとグラフィッティは分析できない。これらのグラフィッティを分析することで、グラフィッティから Domus di Giove e Ganimede 自体を検討し、ローマ時代の当地に生きていた人々の実態の一端も明らかにできるであろう。

2 Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)

Domus di Giove e Ganimede⁽¹³⁾、すなわち「ユピテルとガニメデの邸宅」は、オス

ティア＝アンティカ遺跡の第1区域第4街区の一角を占めている。130年代建造の非常に大規模な複合住宅であり、インスラの一部でありながら中庭を有していた。1階部分は、庭を除いて約750 m²（約227坪）の広さを持ち、玄関ホール（28、図1の番号に対応、以下同じ）、廊下（29）、廊下の拡張部（30：the extension や the ala）、廊下からつながる部屋（オステイア最大の部屋（6.75×8.75×6 m（吹き抜け））として知られている27（the main reception room）、the small salonと呼ばれる33、主人のプライベートな空間とされる24、24の控えの間であり、アトリウム型住宅のタブリヌムと同種の空間と想定されている25（24/25：the masters suite）⁽¹⁴⁾、トイレ、キッチン、バスルームを備えている34/35（the service area））から構成され、中庭（26）を介して街区の庭（11/21）と、裏口（37）を介して附属タベルナ（36）ともつながっていた。2階（あるいは中二階）の大部分も所有していたようで、そこには41（40と共にthe service area）の内部階段から登ることになる。建物自体は最大5階建てと考えられており、3階以上には外部階段（38）が入り口となった。

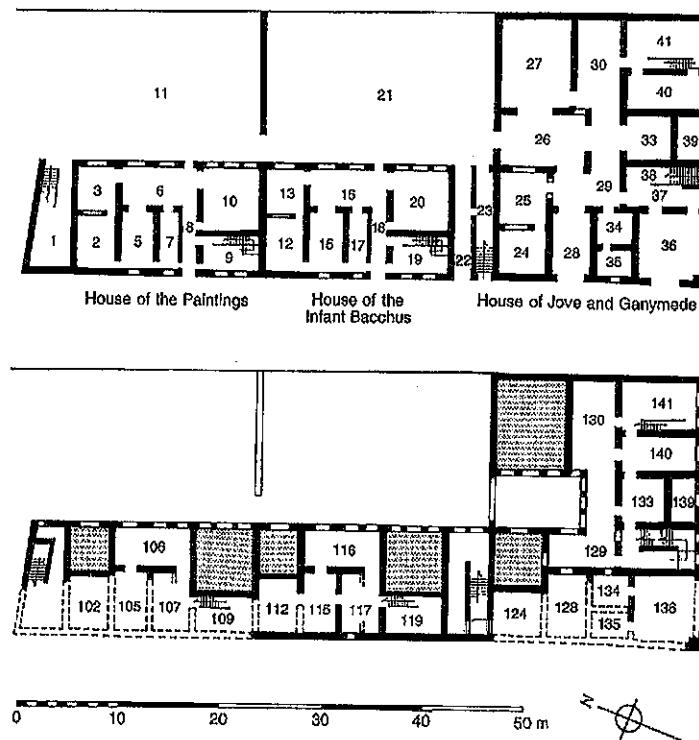


図1 Regio I. Insula iv. 2-4の平面プラン（ハドリアヌス時代、上：1階、下：2階）
(DeLaine (1995), fig. 5, 2から転載)

オスティアの「性的」グラフィッティ—Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)—（奥山）

この邸宅の、少なくとも建造段階の所有者は、オスティアで財政的・社会的に重要な人物と考えるべきであろう。大きな邸宅であることに加え(ポンペイでいえば、上位4分の1グループの高級住宅に分類)⁽¹⁵⁾、それが都市中心部(カピトリウム、クリアなどの付近)に立地していた。壮大な玄関ホールは、多くの来訪者を示唆しているし⁽¹⁶⁾、装飾は高品質である⁽¹⁷⁾。都市周辺に土地を所有するオスティアのエリート層や、時期的には、商業や遠方との交易で財を成した人の可能性が高い⁽¹⁸⁾。

所有者について、先ほど「建造段階の」と限定したが、それはこの邸宅が約150年間機能し、その期間内に構造、装飾、配置、用途などの各種変更があったためである(図2)。変更年代を細かく示すことはできないが、大体、3つのフェーズに分けられている⁽¹⁹⁾。

まずは、I 「2世紀後半(～コンモドゥス帝暗殺(192年)以前)」。これは2世紀の後半、その中でもコンモドゥス帝が改名し、その死後廃止された月 Commodus

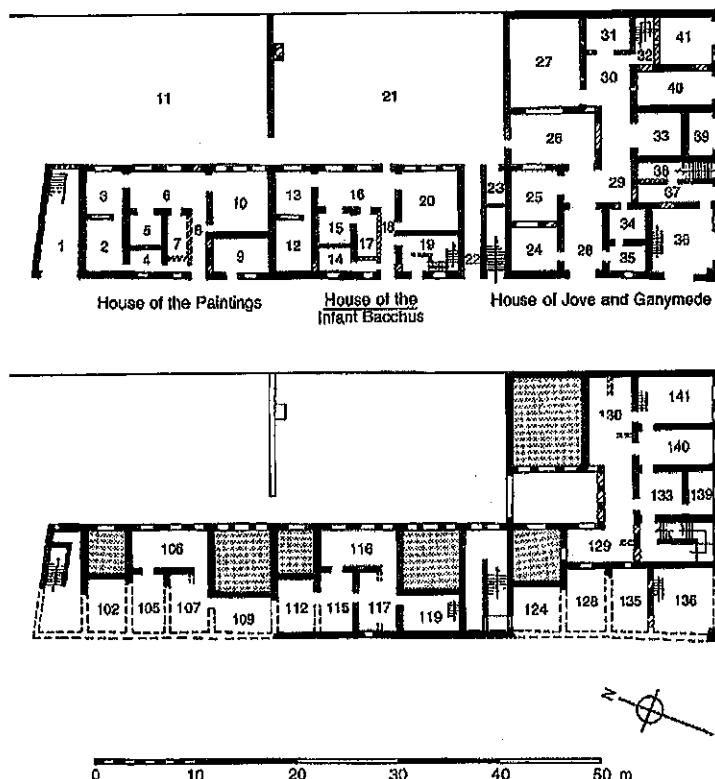


図2 Regio I. Insula iv. 2-4の平面図(セウェルス時代、上：1階、下：2階)
(DeLaine (1995), fig. 5, から転載) ※壁の斜線部は封鎖部分

が廊下（29）の南壁に引っ掻かれた以前の邸宅の状態である⁽²⁰⁾。この時に、部屋27の天井が引き上げられて吹き抜けになり、この邸宅の名のもとになったユピテルとガニメデの壁画が描かれた。裏口（37）が封鎖されることで、附属タベルナ（36）が独立し、また、40/41も独立することで、41にあった内部階段が32に移動した。中庭（26）はドアが設置されることで庭から半封鎖され、33に面する開口部も封鎖された。グラフィッティに関して重要なのは、廊下端に部屋31が新たに追加されたこと、33の装飾が変更され壁の地が「黄色い」部屋になったことである。

続く変更の段階は、Ⅱ「3世紀後半」。この時に、建造段階時のモザイクの修復、壁の封鎖による中庭と庭の分離、中庭への噴水の設置（封鎖部の正面）があり、そして白色の薄い漆喰が多くの壁画に塗布されて、新しい装飾段階の基礎となった。

最終段階は、Ⅲ「4世紀半ば以前」。この時までに、街区全体が放棄され、2～5mの瓦礫に覆われていた。ただ、人間の生活は継続し、瓦礫の上を新たなフロアレベルとして下層の人々が居住していたようである。

この邸宅の「性的」グラフィッティは、7点で、文字が5点、図像が2点である。この邸宅には「性的な」もの以外にも多くのグラフィッティが残存しているけれども（総計51点で、62遺構中4番目に多い。内訳は文字32点（数字15点、性的5点、日付3点、名前1点、人物関係1点、奴隸関係1点）、図像19点（人物5点、船5点、動物3点、性的2点、幾何学・植物モチーフ2点、競技関係1点、複合1点））、カテゴリー的には2番目に多い。「数字」はオスティアで最大の点数を擁するカテゴリーであるが、それに次ぐ「性的な」点数は、オスティア全体としても、遺構に限っても、特徴的なものである。通し番号を付けて、以下に提示しておく⁽²¹⁾。なお、提示されるグラフィットの識別について、便宜上、データベースのもの（G・・・）を援用している。

① G0030、部屋31南壁

：Hermadion cinaedus⁽²²⁾

「ヘルマディオンは稚児」



（Calza (1920), pp. 370-372, fig. 12から転載）

② G0033 [1]、部屋31東壁、次の [2] と重複

：Hic ad Callinicum futui | orem anum amicom mare ... | nolite in aede...⁽²³⁾

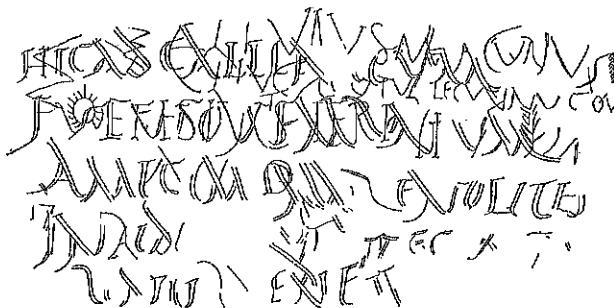
「ここカリニクスの場所で、友人のお口とお尻でやった・・・」

オスティアの「性的」グラフィッティ—Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)—（奥山）

③ G0033 [2]、部屋31東壁、前の〔1〕と重複

: Livius me cunus | lincet Tertulle cunus... | Efesius Terisium amat⁽²⁴⁾

「リウイウスがわたしのあそこをなめる・・・、テルトゥッレがあそこを・・・、エフェシウスはテリシウスを愛している」

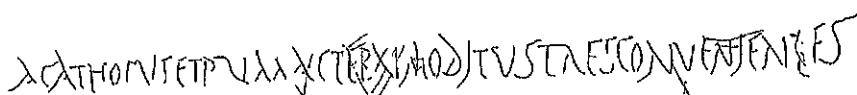


(Calza (1920), pp. 370-372, fig. 13から転載)

④ G0034、部屋31東壁（筆者未確認）

: Agathopus et Primiu(s) et Epaphroditus tres convenientes⁽²⁵⁾

「アガトプスとプリムスとエラフロディトゥスが3人でまぐわった」

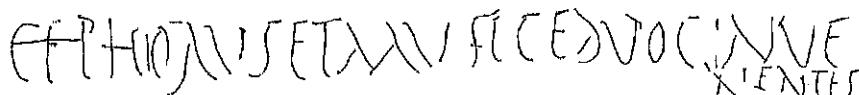


(Calza (1920), pp. 372-374, fig. 14から転載)

⑤ G0035、部屋31南壁（筆者未確認）

: Nicephorus et Musice duo convenientes⁽²⁶⁾

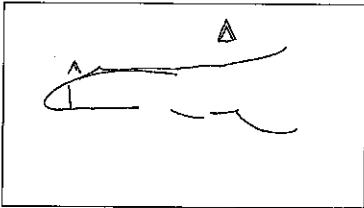
「ニケフォルスとムシケが2人でまぐわった」



(Calza (1920), pp. 372-374, fig. 15から転載)⁽²⁷⁾

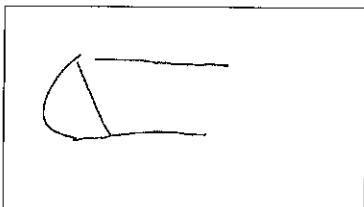
⑥ R33①（奥山（2019）²）、部屋33東壁

: 性器（ファルスとヴァギナ？）のモチーフ⁽²⁸⁾



(奥山 (2019)²、89頁から転載)

⑦ R33⑥ (奥山 (2019)²)、部屋33北壁
：性器（ファルス）のモチーフ⁽²⁹⁾



(奥山 (2019)²、91頁から転載)

全体として、直接的な、つまり、はっきりと性愛的なものとなっている。直接的でない「恋愛的」事例は見受けられない。たとえば、①ではヘルマディオンを「稚児」、つまり男色家の受け身側と罵倒し、④では、「アガトプスとプリムスとエラフロディトゥスが3人でまぐわった」とある。図像も性器そのものを刻んでいる。分布でいえば、部屋31と33に集中しており、文字が31、図像は33に限定されている。そのため、31と33の両部屋に注目することになる。

31はI「2世紀後半」時の改裝時に廊下端に追加された部分で、装飾が白地に赤色の二重水平線、様式化されたエディクラのみの非常に簡素な部屋である（図3）。30との仕切り壁は貧弱で粗く、発掘者であるCalzaによれば入り口にドアではなく、カーテンがぶら下がっているに過ぎない⁽³⁰⁾。機密性の低く、重要性の低い部屋と見なせよう。II「3世紀後半」までに改裝され、白色の薄い漆喰の塗布を受けたので、グラフィッティもIとIIの間のものとなる。グラフィッティは23点で、「性的な」5点（上の①～⑤）のほか、文字4点（人物関係1点、不明3点）⁽³¹⁾、図像14点（人物5点、船4点、動物3点、競技関係1点、植物モチーフ1点）⁽³²⁾である。「性的な」ものは明瞭に男性同性愛的であり、これは極めて特徴的であるものの、それ以外は極めて一般的な題材ばかりで、他の遺構と比べて注目すべきものはない。しかしながら、図像グラフィッティが密集している部分があり、非常に印象的ではある（図4）。

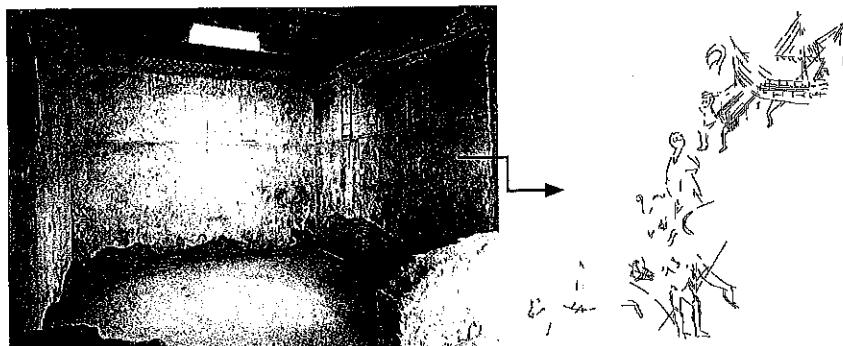


図3（左）部屋31 (ICCD (Italy's Central Institute for Cataloguing and Documentation), E040952)

図4（右）図像グラフィッティの密集（筆者作成）

33は壁の地が「黄色い」部屋である。これもⅠ時の改装によるものであるが、先述の31とは違って、地の黄色もさることながら、様式化された建築モチーフ、小さな風景画、植物モチーフ、悲劇マスクなどきちんと装飾されている（図5）。部屋25、27と並ぶ主要レセプションルームの1つであるので不思議ではない。しかしながら、この改装時に、唯一の光源である中庭からの光が遮断され、それとともに庭の風景を見ることができなくなったので、重要性は低下したと考えられる⁽³³⁾（図6）。グラフィッティも18点（性的な図像2点のほか、文字14点（数字9点、日付2点、奴隸関係1点、不明2点）⁽³⁴⁾、図像2点（船1点、複合1点）⁽³⁵⁾あるが、他の遺構と比べて注目すべきものはない。「性的な」モチーフも単純で目立つものではなく、厄払いなどの深い意味はなさそうであり⁽³⁶⁾、オスティアにおいて珍しいということしかできない。ここでもグラフィッティは、31のものと同様、白色の薄い漆喰の塗布の痕跡から、ⅠとⅡの間に年代づけられる。

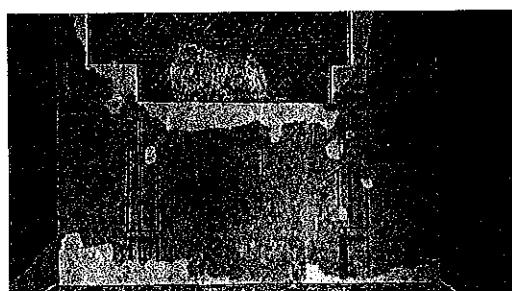


図5 部屋33（「黄色い」部屋）（筆者撮影）

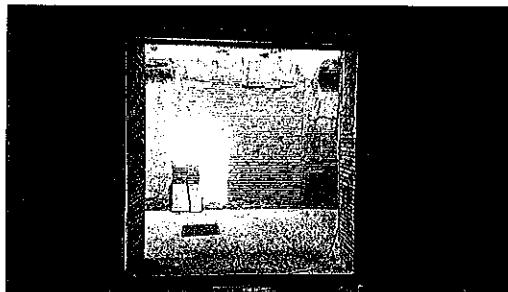


図6 部屋33から中庭（26）への眺望の封鎖（筆者撮影）

3 Domus di Giove e Ganimede と「性的」グラフィッティ

以上のコンテクストを踏まえて、この遺構に「性的」グラフィッティが刻まれた意味や果たしていた機能を考えていくことになる。そこでまず考えるべきことは、このグラフィッティが刻まれた時期のこの邸宅の用途であろう。というのも、この邸宅が「性的」サービスを受けられる高級ホテルと見なされてきたためである。これは発掘者である Calza によるもので、男性同性愛を特徴とする部屋31の文字グラフィッティに基づき、とくに男性同性愛者向けとされた。これは、部屋27のユピテルとガニメデの絵画分析による追認を受けており⁽³⁷⁾、「かもしれない」との留保付きながら、データベースの項目の見解ともなっている。上述の②の「ここカリニクスの場所で(hic ad Callinicum)」によってカリニクスをこの管理人とする向きもある。

しかし、ホテル案については、DeLaine がすでに建築学的分析から否定している⁽³⁸⁾。DeLaine は「性的」グラフィッティを強調しすぎていることにも言及しており、実際、総数から言えばそれ以外が多数である。また、Calza による刊行の数年後には、判読修正によって女性の存在が指摘されており（④:Primu(s) → Prima、⑤: Musice = Musica、Musicē ? ）⁽³⁹⁾、さらに、近年、Solin が②と③の精査による修正を公表したこと（②修正：Hic ad Callinicum | futui orem, anum | amice mi, amari[=e] noli ter | inde n[on] v[=b]ene [...] | donor [...] 「ここカリニコスの場所で、下の口とお尻でやった、わが友人よ、やりすぎるといいことないぞ・・・」（図7）、③修正：Livius Mercurius (palm) | lincet Tertulle cunnu quam 「リウイウス・メルクリウスがテルトゥッラのあそこをなめる・・・」⁽⁴⁰⁾）（図8）、より女性の存在が浮き彫りになっている。つまり、この部屋で性行為はあったんだろうが、男性同性愛に限定する必要はないのである。

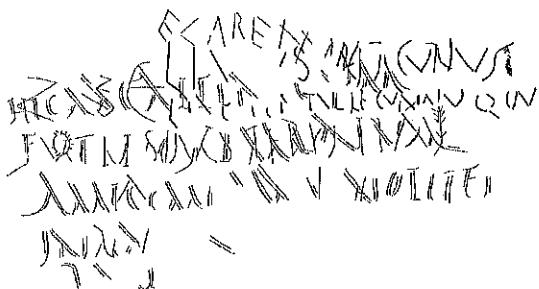


図7 ②の現状に基づいた修正図（筆者作成）

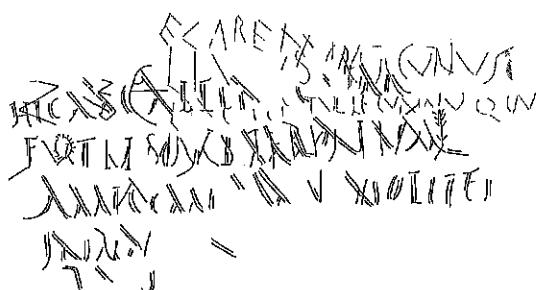


図8 ③の現状に基づいた修正図（筆者作成）

さらに、筆者は「ここ Callinicus の場所で (hic ad Callinicum)」を「Callinicusの寝床」として理解できると考えている。そうなれば、これが刻まれた部屋 31は、少なくとも夜間は男奴隸部屋であったであろう。当該時期の Domus di Giove e Ganimede は、裕福な人物の家であり、複数人の室内奴隸が想定できる。ところが改装によって、37 (裏口) の封鎖と附属タベルナ (36) の独立、40/41の独立によって、家のスペースが小さくなつたことで、奴隸用の部屋が不足したのではなかろうか。これが部屋 31 の追加の理由であり、その低い重要性と防犯意識の低さがそれを裏付けていると思われる。ちなみに、主人一家が寝ていたのは 2 階であり、女奴隸は 1 階の別の部屋であろう。女奴隸による男部屋との行き来は可能であり、性行為は不思議ではない。日中については、質素な部屋であるので、室内奴隸、訪問者の奴隸などの待機場所であったかもしれない。となれば、部屋 31 のグラフィックティの書き手は、奴隸の可能性が高くなる。

他方、部屋33は、グラフィッティこそ多いが、文字も図像もほぼオステイアで一般的なもののみで、発見以来注目されることはなかった。これは発掘者のCalzaが

男性同性愛関係に注目しすぎたことに起因している。「性的」図像は、筆者による発見のためこれまで論じられていないが、単純な線刻であり、目立つものではなく、現時点で特記することはない。DeLaine が言及するように⁽⁴¹⁾、だらだらと過ごす場所での、単なる気晴らしの可能性が高いように思われる。その場合、部屋33は、訪問客の待機・対応場所にふさわしい。グラフィッティは訪問者を中心に、随伴奴隸、家内奴隸、さらには主人家族の手によるものとなろう。

おわりに

本稿では、オステイアの「性的」グラフィッティを、Domus di Giove e Ganimede の事例から検討してきた。それは Domus di Giove e Ganimede をグラフィッティの観点から分析することでもあり、その結果、Domus di Giove e Ganimede は、「性的」グラフィッティが刻まれた時期において、「性的」、とくに「男性同性愛的」サービスの受けられるホテルではなく、建造時から引き続き裕福な人物の住居であったといえる。そこには主人一家のほか、複数人の家内奴隸も同居しており、彼らは簡易的な部屋で寝起きしていた。その一人がカリニクスであり、寝起きする彼らこそが「性的」グラフィッティの書き手の主要グループであったであろう。もしかすると他のグラフィッティの登場人物も、この邸宅の奴隸であろうか。そうであれば、各行為の時期的なスパンが問題となるものの、相當に性に乱れた部屋であつただろう。そのように意味深い「性的」グラフィッティであるが、ただそれは当事者たちにとって、単なる気晴らし、暇つぶしに過ぎない。「性的」以外のグラフィッティも同様であろう。これはグラフィッティを日常的行為とする場合であるが、もし、日常的に自由に書けなかつたとすれば、可能性として、奴隸にも特別の自由が許され、楽しく陽気に祝われたサートゥルナーリア祭の自由さの証とできるかもしれない。奴隸部屋ではなく、訪問者などの待機場所である部屋33の事例であるけれども、マトロナへの揶揄は、その傍証と考えられる⁽⁴²⁾。

最後に、以上の結論は Domus di Giove e Ganimede の「性的」グラフィッティのものであり、オステイア全体のものではない。オステイアの「性的」グラフィッティ全体を論じるには、Domus di Giove e Ganimede と並ぶ点数を持つ Caseggiato degli Aurighi の事例分析が欠かせない。実際、Domus di Giove e Ganimede にはなかつた直接的でない「恋愛」事例も多く、「性的」といえども内容の質が異なっている⁽⁴³⁾。しかしながら、分析の前提となるコンテキスト、とりわけ建築的情報が少なく、建築学と連携した現地調査から始めなければならない。今後の課題である。

参考・引用文献

- ・ Baird (2011): Baird, J. A., "The Graffiti of Dura-Europos:A Contextual Approach", Baird, J. A., Taylor, C. (eds.), *Ancient Graffiti in Context*, London, pp. 49-68.
- ・ Baird (2012): Baird, J. A., "Dura Deserta:The Death and Afterlife of Dura-Europos", Augenti, A., Christie, N. (eds.), *Vrbes Extinctae:Archaeologies of Abandoned Classical Towns*, Routledge, 2012, pp. 307-329.
- ・ Baird (2016): Baird, J. A., "Private Graffiti? Scratching the Walls of Houses at Dura-Europos", Benefiel, R., Keegan, P. (eds.), *Inscriptions in the Private Sphere in the Greco-Roman World*, Leiden, Brill, 2016, pp. 11-31.
- ・ Berg (2017): Berg R., "Toiletries and Taverns. Cosmetic Sets in Small Houses, Hospitia and Lupanaria at Pompeii", *Arctos* 51, 2017, pp. 13-39.
- ・ Berg (2018): Berg R., "Furnishing the courtesan's house. Material culture and elite prostitution in Pompeii", Berg, R., Neudecker, R. (eds.), *The Roman Courtesan. Archaeological Reflections of a Literary Topos* (Acta Instituti Romani Finlandiae 46), pp. 193-220.
- ・ Berg (2020): Berg R., "Hic Amor Habitat. Sex and the Harbour City", Karivieri, A. (ed.), *Life and death in a multicultural harbour city:Ostia Antica from the Republic through Late Antiquity* (Acta Instituti Romani Finlandiae 47), Rome, pp. 313-318.
- ・ Buonopane (2018): Buonopane, A., "Bullismo omofobico sui muri di Pompei?", Giuffrida, C., Cassia, M., e Gaetano Aren, G. (a cura di), *Roma e i 'diversi'. Confini geografici, barriere culturali, distinzioni di genere nelle fonti letterarie ed epigrafiche fra età repubblicanae Tarda Antichità*, Le Monnier Università, 2018, pp. 282-298.
- ・ Calza (1920): Calza G., "Gli scavi recenti nell'abitato di Ostia", *Monumenti Antichi* 26, 1920, coll. 322-430.
- ・ Clarke (1991): Clarke, J. R., "The decor of the House of Jupiter and Ganymede at Ostia Antica. Private residence turned gay hotel?", *Roman art in the private sphere*, Ann Arbor, 1991, pp. 89-104.
- ・ Cooley and Cooley (2013): Cooley, A., Cooley, M. G., *Pompeii and Herculaneum:A Sourcebook*, London, 2013 (2nd ed.).
- ・ DeLaine (1995): DeLaine, J., "The Insula of the Paintings at Ostia 1.4.2-4. Paradigm for a city in flux", Cornell, T. J., Lomas, K. (ed.), *Urban Life in Roman Italy*, London, pp. 79-106.
- ・ DeLaine(1999): DeLaine J., "High Status Insula Apartments in Early Imperial Ostia - a Reading", *Mededeelingen van het Nederlands Historisch Instituut te Rome* 58, 175-189.
- ・ DeLaine (2012): DeLaine, J., "Housing in Roman Ostia", Balch, D. L., Weissenrieder, A. (eds.), *Contested Spaces. Houses and Temples in Roman Antiquity and the New Testament*, Tuebingen, 2012, pp. 327-354.
- ・ Falzone(2004): Falzone, S., *Le pitture delle Insulae(180-250 circa d.C.)* (Scavi di Ostia 14),

Roma, 2004.

- Falzone (2007): Falzone, S., *Ornata aedificia. Pitture parietali delle case ostiensi*, Roma, 2007.
- Falzone (2010): Falzone, S., Zimmermann N., "Stratigrafia orizzontale delle pitture delle case a giardino. Modello della fase originaria dei blocchi centrali del complesso ostiense", *Anzeiger: Österreichische Akademie der Wissenschaften* 145-1, 2010, pp. 107-160.
- Hermansen (1982): Hermansen, G., *Ostia. Aspects of Roman City Life*, Alberta, 1982.
- Langner (2001): Langner, M., *Antike Graffitiziechnungen: Motive, Gestaltung und Bedeutung*, Dr. Ludwig Reichert Verlag Wiesbaden, 2001.
- Leach(1997): Leach, E. W., "Oecus on Ibycus:Investigating the Vocabulary of the Roman House", in: Bon, S. E., Jones, R. (ed.), *Sequence and Space in Pompeii*, Oxford, pp. 50-72.
- Lohmann (2018): Lohmann, P., *Graffiti als Interaktionsform. Geritzte Inschriften in den Wohnhäusern Pompejis*, De Gruyter, 2018.
- Meiggs (1973): Meiggs, R., *Roman Ostia*, Oxford, 1973(2nd).
- McGinn(2002): McGinn, T. A. J., "Pompeian Brothels and Social History", McGinn, T., Carafa, P., de Grummond, N., Bergmann, B., and Najbjerg, T., *Pompeian Brothels, Pompeii's Ancient History, Mirrors and Mysteries Art und Nature at Oplontis, and the Herculaneum 'Basilica'* (Journal of Roman Archaeology Supplement 47), pp. 7-46.
- Paulo and Funari (1995): Paulo, P., Funari, A., "Apotropaic symbolism at Pompeii:a reading of the graffiti evidence", *Revista de História* 132, 1995, pp. 9-17.
- Solin (1967): Solin, H., "Graffiti di Roma e di Ostia", *Archivio paleografico italiano* fasc. 66 (= vol.5), Roma, 1967, tavv. 42-59.
- Solin (2020): Solin, H., "The Wall Inscriptions of Ostia", Karivieri, A. (ed.), *Life and death in a multicultural harbour city:Ostia Antica from the Republic through Late Antiquity* (Acta Instituti Romani Finlandiae 47), Rome, pp. 319-332.
- van Buren(1923): van Buren, A. W., "Graffiti at Ostia", *Classical Review* 37, pp. 163-164.
- van der Meer (2012): van der Meer, L. B., *Ostia speaks:Inscriptions, buildings and spaces in Rome's main port*, Peeters, 2012.
- Varone (1994): Varone, A., *Erotica pompeiana:iscrizioni d'amore sui muri di Pompei*, "Erma" di Bretschneider, 1994(アントニオ・ヴァローネ著、本村凌二監修、廣瀬三矢子訳、『ポンペイ・エロチカ ローマ人の愛の落書き』、PARCO 出版、1999年).
- Varone (2003): Varone, A., "Organizzazione e sfruttamento della prostituzione servile:l'esempio del lupanare di Pompei", Buonopane, A., Cenerini, E. (a cura di), *Donna e lavoro nella documentazione epigrafica. Acci del i Seminario sulla condizione femminile nella documentazione epigrafica*, Faenza, 2003, pp. 193-216.
- Varone (2005): Varone, A., "Nella Pompei a luci rosse. Castrensis e l'organizzazione della prostituzione e dei suoi spazi", *Rivista di studi pompeiani* 16, 2005, pp. 93-109.

オスティアの「性的」グラフィッティ—Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)—（奥山）

- ・Wallace-Hadrill (1994): Wallace-Hadrill, A., *Houses and Society in Pompeii and Herculaneum*, Princeton, 1994.
- ・Wallace-Hadrill (1995): Wallace-Hadrill, A., "Public honour and private shame:the urban texture of Pompeii", Cornell, T. J., Lomas, K. (ed.), *Urban Life in Roman Italy*, London, pp. 39-62.
- ・青柳 (2004)：青柳正規、NHK「ローマ帝国」プロジェクト、『NHKスペシャル ローマ帝国2 ポンペイの落書き』、NHK出版、2004年。
- ・奥山 (2018)：奥山広規、「史料紹介 オスティア・グラフィッティ」、『西洋史学報』44、111-126頁、2018年。
- ・奥山 (2019)¹：奥山広規、「2017年度オスティア・アンティカ遺跡グラフィッティ調査報告」、『西洋史学報』45、79-102頁、2019年。
- ・奥山 (2019)²：奥山広規、「2018年度オスティア・アンティカ遺跡グラフィッティ調査報告」、『西洋史学報』46、79-104頁、2019年。
- ・奥山 (2020)：奥山広規、「2019年度オスティア・アンティカ遺跡グラフィッティ調査報告」、『西洋史学報』47、119-147頁、2020年。
- ・奥山 (2021)：奥山広規、「史料紹介 オスティア・グラフィッティ（改訂版）」、『西洋史学報』48、111-126頁、2021年。
- ・坂口・豊田 (2017)：坂口明・豊田浩志編、『古代ローマの港町：オスティア・アンティカ研究の最前線』、勉誠出版、2017年。
- ・堀 (2021)¹：堀賀貴編、『古代ローマ人の危機管理』、九州大学出版会、2021年。
- ・堀 (2021)²：堀賀貴編、『古代ローマ人の都市管理』、九州大学出版会、2021年。
- ・本村 (1996)：本村凌二、『ポンペイ・グラフィティ：落書きに刻むローマ人の素顔』、中公新書、1996年。
- ・本村 (2004)：本村凌二、『優雅でみだらなポンペイ：古代ローマ人とグラフィティの世界』、講談社、2004年。

後注

- (1) グラフィッティの概要については、*Brill's New Pauly*, s. v., Graffiti や Langner (2001), pp. 12-15などを参照。
- (2) グラフィッティの筆記具の実際については、実験考古学的な成果である Lohmann (2018), pp. 243-259が詳しい。
- (3) 具体的な内容は、ポンペイの事例であるが、本村 (1996) やその増補・改訂版である本村 (2004) のほか、青柳 (2004) において豊富に知ることができる。
- (4) 図像については、2500点もの事例を掲載し、分析を試みている Langner (2001) を参照。
- (5) 註3を参照。

- (6) 日本隊によるオスティア・アンティカ調査は、これまでに①科学研究費補助金基盤研究（B）「古代ローマ都市オスティア・アンティカの総合的研究」（代表：坂口明（日本大学教授）、2008年度～2010年度）、②科学研究費補助金基盤研究（B）「古代イタリア半島港湾都市の地政学的研究」（代表：豊田浩志（上智大学教授）、2010年度～2012年度）、③科学研究費補助金基盤研究（B）「リバースエンジニアリングとしての建築史学、古代ローマ遺跡のソースコードを読み解く」（代表：堀賀貴（九州大学教授）、2013年度～2015年度）、④科学研究費補助金基盤研究（B）「先端光学機器によるオスティア・アンティカ遺跡・遺物の文字情報調査」（代表：豊田浩志（上智大学名誉教授）、2017年度～2019年度）、⑤科学研究費補助金基盤研究（A）「ポンペイとオスティア：古代ローマにみる建築術の総体としての都市と技術の大衆化」（代表：堀賀貴（九州大学教授）、2018年度～2020年度）があり、その成果は、坂口・豊田（2017）、堀（2021)¹、堀（2021)²として刊行している。
- (7) 筆者によるこれまでのオスティア・グラフィッティ調査については、奥山（2018）、奥山（2019)¹、奥山（2019)²を参照。
- (8) Varone (1994), Cooley and Cooley (2013). 我が国でも本村（2004）がある。
- (9) データベースを含めたオスティア・グラフィッティの全体像については、奥山（2018）と奥山（2021）を参照。
- (10) Varone (2003), Varone (2005).
- (11) ドゥラ・ユーロポスとそのグラフィッティについては、Baird (2011)、Baird (2012)、Baird (2016) を参照。
- (12) この理由としては、オスティアで商業的な性的活動があったに違いないけれども、その詳細が不明であることと連関しているかもしれない。これはその建築的な特徴である石積みのベッドのシングルルーム (*cellae meretriciae*) の欠如のためであり（ある場所を娼館と識別する基準については、Wallace-Hadrill (1995), pp. 51-55や McGinn (2002), pp. 8-11を参照。また、宝飾品、化粧用具、ランプ（性的なもの）などの物質的指標で性的活動の場の特定を試みる Berg (2017) と Berg (2018) も興味深い）、飲食店（酒場、レストラン）、ホテル、浴場などでの活動が推定されるばかりである（Berg (2020), pp. 314-316；飲食店 = *Caupona di Alexander e Helix* (IV. vii.4)、3世紀に年代づけられる白黒モザイクの題材（2人の裸の男性ダンサー、鏡を持ったウェヌスと花輪やガードルを持ったクビドの隣接）から、ホテル = *Casa delle Volte Dipinte* (III.v.1)、廊下に面したシングルルームの列、*symplegma*（まぐわい）の絵から、浴場 = *Terme della Trinacria* (III.xvi.7)、性的なモザイク神文（「*statio cunnulingiorum*」（舐めやさん事務所）から）。しかしながら、建築物として見出されないのは、1世紀のポンペイと2～3世紀のオスティアの間の性的慣習の変化の結果である可能性がある（Meiggs (1973), pp. 229-230；Berg (2020), pp. 314-316）。
- (13) この邸宅の詳細については、Calza (1920), pp. 354-375、DeLaine (1995) や DeLaine

- オスティアの「性的」グラフィッティ—Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)—（奥山）
(1999), pp. 176-179を参照。遺跡における位置については、データベースのプラン
(<https://www.ostia-antica.org/dict/l-plan.htm>) を参照。
- (14) DeLaine (2012), pp. 332-333. 家屋の部屋については、Hermansen (1982), pp. 17-24
を参照。
- (15) Wallace-Hadrill (1994), pp. 72-82.
- (16) 玄関ホール (*vestibulum*) とその重要性については、Leach (1997), pp. 54-55を参照。
- (17) DeLaine (2012), pp. 332-334 ; Falzone (2010), pp. 132-134. 装飾については、Falzone
(2004), pp. 61-74 ; Falzone (2007), pp. 107-110が詳しい。
- (18) オスティアのエリート層については、Meiggs (1973), pp. 189-211を参照。
- (19) DeLaine (1995), pp. 88-99とその情報源である発掘報告書 Calza (1920) を参照。I
については、Clarke (1995), pp. 91-92も参照。
- (20) G0027 : VII KAL COMMODAS (7月、あるいは8月26日)。このグラフィットについては、van Buren (1923), pp. 163-164を参照。
- (21) Domus di Giove e Ganimede 以外の事例について、ここで簡単に示しておく。遺構や
その部屋の詳細、参考文献については、データベースのそれぞれの項を参照されたい。
(1) Terme di Foro (I. xii. 6) : ① G0078 (部屋 18の床面、筆者未確認) : 性器 (ファ
ルスとヴァギナ) のモチーフ?。現在データベースには図像の解釈について何の言
及もされていないが、リニューアル以前は「Erotica」に分類されており、ここでも
それを踏襲している。データベースのリニューアルについては奥山(2021)を参照。
(2) Caserma dei Vigili (II. v. 1) : ① G0122 (廊下 41西壁) : Perfixi 「突っ込んだ」。
Terme Maritime (III. viii. 2) : ① G0445 (部屋 5南東壁、筆者未確認) : Cinedus
pedicatur | CESAR ECROTA PV 「女々しいやつ、犯され男・・・」、② G0853 (部屋
5南東壁、筆者未確認) : Κεκυώνδα + οιφ[--] | K A T 「セクンダはセックスした(?)」。
(4) Caseggiato degli Aurighi (III. x. 1) : ① G0313 (中庭 (部屋 11) 北側廊下南壁、
下にファルス図像?) : Colonio | lingit, set quit | lingit, nesscio, cunnu[m sc. lingit?] 「コ
ロニオはなめる、彼は何をなめるのか、知らない [、あそこだよ?]」、② G0280 (部
屋 17西 壁) : [--] Ianuaria nugas es | vidus scripsit | [--] IMISS [-] VIISTI NI
ΠΙΟVS | C R O VIIST | AMATOR | [--] ΑΙ ΝΙΙΒΑ [-] ΙΙΣ | [-] AC | [-] Ν 「イア
ヌアリアは軽薄だ、捨てられ男が書いた・・・」、③ G0293 (部屋 17、筆者未確認) :
Cruseros amas adama | Apelia Cruside . Iustus Ianuar...us | plurima 「クリュシスよ、
君はクリュセロスを愛しているが、しかし彼はアペッラに夢中。ユストゥス・イア
ヌアリウスからごきげんよう、ごきげんよう」、④ G0299 (部屋 17、筆者未確認) :
Pupa v(ale) sal(utem) 「かわいこちゃん、こんにちは、ごきげんよう」、⑤ G0302 (部
屋 17、筆者未確認) : Mulus amet paticam 「オスラバがメス豚を愛すべし」、⑥
G0253 (部屋 28北壁) : Hic Amor | (h)abitat 「ここにアモールは住んでいる」、⑦
G0854 (部屋 28北壁、報告者未確認) : Quinque irru[matores?] 「5人の喉済者 (?)」、

- ⑧ G0855 (不明: 収蔵庫保管、報告者未確認)、同じ壁に 5 回の繰り返し: recte futui 「正しくセックスした」、5 点中 1 点のみ recte futui ✕ V [...] 「・・・、5 デナリウス」。
- (22) Calza (1920), pp. 370-372 と Clarke (1991), p. 93 は「Ti Eermadion」と判読しているが、名前と cinaedus の組み合わせが一般的で、代名詞はつけないので (Buonopane (2018), pp. 285-286)、1 文字目と 2 文字目を併せて H とし、筆者は Hermodion と判読している。Solin (1967), TAV. 57a も留保付きで Hermadion としている。
- (23) Calza(1920), pp. 370-372.
- (24) Calza(1920), pp. 370-372.
- (25) Calza(1920), pp. 372-374.
- (26) Calza(1920), pp. 372-374.
- (27) Calza の図において冒頭の NI は欠けているが、データベースの Taylor の図では表現されている。
- (28) 奥山 (2019)²、89頁。
- (29) 奥山 (2019)²、91頁。
- (30) Calza(1920), pp. 373-374 ; Clarke(1991), pp. 93-94.
- (31) 人物関係: G0845、不明: G0032 (旧データベース、現在は削除)、G0846、G0847。
- (32) 人物: G0036c、G0036f、G0036g、G0036i、R31① (奥山 (2019)²)、船: G0036d、G0036e、G0706、G0712、動物: G0036a、G0036b、G0036h、競技関係: G0029、植物モチーフ: G0031 (旧データベース、現在は削除)。
- (33) DeLaine(1995), pp. 90-91 ; DeLaine(1999), p. 183.
- (34) 数字: G0031、G0032、G0707、G0708、G0709、G0710、G0711、R33③ (奥山 (2019)²)、R33⑤ (奥山 (2019)²)、日付: G0025、G0487 (奥山 (2019)²、奴隸関係: G0023、不明: G0024、G0484② (奥山 (2019)²)。
- (35) 船: G0024 (船の情報について現在は削除)、複合: G0026 (人物と船)。
- (36) グラフィッティにおけるファルス図像の厄払い機能については、Paulo and Funari (1995) を参照。オステイアのグラフィッティ以外のファルス全般については、Berg (2020), pp. 313-314 が詳しい。
- (37) Clarke (1991).
- (38) DeLaine (1995), pp. 104-105 (n. 42).
- (39) van Buren (1923), p. 164.
- (40) Solin(2020), pp. 326-327. 図 7 で表現しているように筆者は 2 行目末の am、ひいては quam 自体の判読に疑惑を持っているが、このグラフィットの解釈に影響はない。なお、van der Meer (2012), p. 53 は、②を HIC AD CALLIN[I]CUM | FUTUI OREM ANUM AMICOM [...] RE NOLITER IN AEDI [...] (ここカリニクス (の家) で私は友人のお口 (と) お尻でやった。この家にもう来てはならぬ (?))、③を

オスティアの「性的」グラフィッティ—Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)—（奥山）

LIVIUS ME CUNNUS | LINCET TERTULLLE CUNNU OV [---] | EFESIUS TERPSILLA
AMAT (リウィウスが私のあそこをなめる、テルトゥラのあそこをなめる;エフェシウスはテルプシッラを愛している)と修正し、刊行している。

(41) DeLaine (1995), pp. 104-105(n. 42).

(42) G0023 (部屋33東壁) : 'H | ματρώνα | περίψη | μά cou (奥様は卑しい僕)。

(43) 註21を参照。

(徳山工業高等専門学校一般科目・准教授)

オスティアーポルトゥス出土の 後期ローマのカット・ガラス浅碗断片： 初期キリスト教的事例3点を中心に

藤井 慎子

はじめに

都ローマの2つの港町オスティアとポルトゥスでは、筆者が知る限り10点の4世紀後半のカット・ガラス碗断片が出土している。それらは、ガラスの色や質、器形、カット技法ならびに出土状況に基づき、帝政後期に活動していたローマの2つの工房の製品であることが、Lucia Saguiによって示されている。その10点の装飾主題は、伝統的なギリシアーローマの神々から英雄、牧歌的な羊飼い、そしてキリストや使徒、殉教聖人たちまでと、当時の人々の幅広い関心を物語っている。本稿では、ローマとその港町で使用されていたガラス製品および製造にかかる近年の研究成果を概観した後、先の10点の内、キリスト教的3点に注目する。

1. 都ローマおよび港町オスティアーポルトゥス出土のガラス製品とガラス製造

都ローマおよびその港町で普及していたガラス製品およびガラス製造については、Lucia SaguiとBarbar Lepriライタリア考古学者の発掘資料に基づく研究成果により、今世紀に入って急速にその全貌が明らかになりつつある。たとえば、Sagui-Lepriが、国や調査隊の枠を超えたオスティアーポルトゥス出土のガラス調査を行い⁽¹⁾、未発表の事例も含めて網羅的に検討した成果は、2018年の「オスティアとポルトゥスにおけるガラスとガラス製造の示唆」にまとめられている（Sagui-Lepri 2018）⁽²⁾：両港で出土した紀元前1世紀から紀元後6世紀までの7世紀間にわたるガラスの器形や装飾の変遷は図版3枚に集約され（figs. 5-7）⁽³⁾、少なくとも2世紀後半から3世紀頃の両港町におけるガラス製品製造（二次工房）⁽⁴⁾を示唆する窯址

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス残破断片：初期キリスト教的事例3点を中心に（藤井）(figs. 2-3の*印)、原料塊 (fig.16) ならびに成形過程で生じる「colletti (吹き竿に残ったガラスが取れた際にできる孔のある断片)」(fig. 14)などの屑が確認され、出土した原料塊の組成分析からは、それがリサイクル・ガラスではなく、シリアーパレスティナ地域やエジプトのガラス原料塊製造（一次工房）からの輸入品だったこと等が明らかにされた (Verità et al. 2017)。

さらに2021年に Lepri が上梓した『2～3世紀のガラス：ローマ～オスティア一帯の製造と流通』では、総論として、帝国各地で発見された一次工房址と二次工房址74箇所の一覧表と、それらの分布にガラス積載難破船の分布も示した地図 (Lepri 2021, 28, fig.6) によって、ローマ・ガラスの製造と流通が一目で理解できるようにしている。また各論では、都ローマやオスティアーポルトゥスで発見されたガラス製造の示唆、ガラス製品および装飾の変遷、ならびに香油瓶や方形瓶などに型吹きされた印 Bolli について、1960年代から現在まで都ローマとその周辺で行われた19の発掘で出土したガラス製品や製造関連の遺物に基づき、帝政中期の状況を詳細に論じている。なお、同書には、Sagui による未発表のオスティアの「泳ぎ手の浴場 Terme del nuotatore (V. x. 3)」のガラス遺物も収録されている。

Sagui-Lepri らの研究は、都ローマとオスティアーポルトゥスで同じようなガラス器が普及していたことを物語っているが、以下、年代ごとの特徴を彼女らの3枚の器形図の変遷を元に概観する。まず、吹き技法が開発されて間もない1世紀には、目新しさも手伝ってか、それ以前の鋳造製による碗や皿など開口型の容器とは比べ物にならない程、一気に様々な器形が花開いた (Sagui-Lepri 2018, fig. 5)：口のすぼまつた頸の長い香油瓶 *unguentarium*、球状の胴部に頑丈な両把手が付いた浴場に持参する香油瓶 *aryballos*、運搬・収納に適した方形瓶や片把手水差し、オスティアに相応しい穀物計量容器 *modius*、貯蔵に適した大型の壺や埋葬用の骨壺などに加え、アレクサンドリア製といわれる、水晶を模した無色透明の切子装飾付き杯などの高級品もみられる。その後、2世紀には引き続き *unguentarium* や *aryballos*、メルクリウス瓶（細い方形瓶の底部にメルクリウスが型押しされた瓶）などの瓶類は使用され続けるが、再び開口型の容器が主流になる：高台付きの口の広がった碗や皿類または円筒形の杯類である。2世紀末から3世紀にかけては、口のすぼまつた、背の高い、足付きゴブレットや筒形の杯、半球状の碗などの飲料容器が流行した。南フランスの Embiez 島 1 で発見された難破船の積み荷は、2世紀末～3世紀のガラス製品であった。オスティアーポルトゥス出土と類似する器形は、それらがローマの港町で積載された可能性も示唆する (Lepri 2021, 41, fig.7)。

この時代の飲料容器には、ホットワークによる凝った紐装飾や貼付装飾、つまみ装飾などが施されている (Sagui-Lepri 2018, fig. 6, 8)。これらの装飾は、その美しさだけでなく、フォークもナイフもなかった当時、食べ物をつまむ同じ手で持つ杯を滑りにくくする機能も持ち合っていたと思われるが、職人たちの卓越した技を

示している。特に紐と貼付装飾は、一人は本体のガラスが冷えすぎないように熱コントロールをしながら、もう一人は別の竿に巻き取ったガラスを紐状や小さな塊に落とし切り、さらにそれが冷めて固くならない内に器具で押して（ピンサーで挟んで）模様を出し、最後に足台までつけるという、少なくとも二人以上の職人が息を合わせて手早く造らなければできない、高度な技が用いられている。石灰ソーダガラスという、特に冷えやすいローマ・ガラスでは、なおさらのことである。同様な紐装飾は都ローマでも、動植物や海の生物を図案化したものから陶器のスリップ模様のようなものまで、Lepri が分類したいくつものタイプが確認されている他、円盤型の貼付け文にも貝やロゼッタ、男性や女性の胸像まで幅広くみられる（Lepri 2021, 102-128）。つまり装飾の中には、Lepri が注目する独特な魚のヒレのような痕ができるものがある。これらの紐装飾や貼付装飾を有するガラス器は、ドイツやシリアでも出土しており、その製造地がどこかで議論が分かれる中、ローマ工房製の特徴を提示する新しい発見が一石を投じることになるだろう。一方で、2世紀末から3世紀にかけては、コールドワークによるカット装飾が施された碗類も登場する。1つは、「Contour grooves」グループで、意匠の輪郭線が深く彫られた特徴を持つ。神話的場面や海の生き物の主題が多く、アレクサンドリア製と考えられている。この事例は、オステイアの「泳ぎ手の浴場」からも3断片が出土している（Lepri 2021, 100-101, fig.55 no.1-3）。もう1つは、「Linceo」グループで、ギリシア神話の主題がギリシア語の記銘と共に刻まれている。このグループもエジプト製とみなされている（Lepri 2021, 100-101, fig.55 no.4-5）

これらのガラス器が製造された2世紀末から3世紀、オステイアでも二次工房を示唆する遺物が発見されている：第三地区の倉庫 Horrea (III. ii. 6) や第四地区的ショーウィンドウのあるタベルナの家 Caseggiato delle taberne finestrate (IV.v.18) の原料塊やガラス成形過程で生じる屑ガラスである（Lepri 2021, 25-26）。前者では、1キロ近くに相当する70断片あまりが発見され、わずかに青緑や青色のガラスも含まれるが、ほとんどが無色透明のガラスで、碗類や杯、香油瓶などが製造されていたと考えられている。また、ポルトゥスでは、皇帝宮殿区域にあるトラヤヌス帝時代の柱廊付き中庭部分が、3世紀頃にはガラス工房として使用されていたことを示す円形の窯址、原料塊や成形途中で生じる屑や紐状のガラス、杯や円筒形杯の不良品等が発掘された。これらは全て無色透明のガラスで、アンチモンで消色されたことが分析で判明しており、帝政中期に都ローマやその港町で、無色透明なガラスが引き続き好まれたことを物語っている（Gliozzo et al. 2017; Verità et al. 2017）。帝政中期は、Horti Lamiani, Circo Variano, Via XX Settembreなど、都ローマのエスクイリヌス丘やウェミナリス丘でも二次工房を示唆す成形途中の屑、不良品などが確認され、アッピア街道沿いでは、Villa dei Quintilli の浴場内部でリサイクル・ガラス用と目される珍しい二つの燃焼室を有する方形の窯も発見されている（Paris et al.

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片：初期キリスト教的事例3点を中心に（藤井）
2015, 198-200)。

3世紀末から4世紀前半にかけては、「Baia-Puteoli」グループとも呼ばれる、プテオリ⁽⁵⁾の象徴的大埠頭や近隣のバイアエも含む景観が、時にPVTEOLIやBAIAという記銘と共に、浅い研磨と刻線でフラスコ瓶にカットされたグループがある(Fujii 2003; Fujii 2009; 藤井2009, 179-231; 藤井2020)。その年代は、独特の器形（切り離し口縁、先細りの円筒形の頸部、頸部付け根の括れ、直径10cmほどの球状胴部を有する瓶=Isings 103型）、景観の中に含まれる地区名が刻まれたプテオリ出土の碑文の年代、ローマのHorti Lamiani発掘での出土層でも一致している。なお、このグループの総数は、現在では断片を含め20点近くまで増えている。学術的発掘による出土品ではない初期の事例を含め、都ローマおよびその港町オスティアの出土は計9点を占める：伝ローマのカタコンベ出土のほぼ完形1点（現ワルシャワ国立博物館所蔵）、ゴルガ・コレクションの伝ローマ出土断片4点、ローマのCirco Variano出土断片1点、Horti Lamiani出土断片2点、オスティアのVia dei Vigili出土断片1点である(Lepri 2021, pp.101-102, fig. 55)。その出土分布は、イタリアを東端として、北はイギリス、南はチュニジア、西はポルトガルと、帝国西部に広がっていることから、プテオリや近隣のバイアエに商用もしくは観光あるいは湯治で訪れた人々が土産物として持ち帰ったとみなされている。このうち、プテオリ出土は1点もないが、同地で「ガラス職人坂街区地区」なる地区名を記した碑文が、まさに「坂道」の現ラコニア通り付近で発見されており、その坂道の浴場址で、1999年に3世紀頃に活動した円形の二次工房の窯址も報告されていることから(Gianella 1999; Lepri 2021 p.33, no.51)、装飾の主題となったプテオリで製造されたとみなされている。

また、3世紀半ばから4世紀半ばにかけては、円錐形や円筒形のシンプルな杯や半球状碗、または片把手水差しといった飲料容器がみられる。このような杯を手にした饗宴場面は、ヴァチカン博物館所蔵のオスティアのラウレンティウス門のネクロポリス（墓31）出土壁画にみられる他、オスティアのディアナ通りの飲食店、テルモポリウムの家 Caseggiato del Termopolio (I. ii. 5) 一階の壁画には、赤い葡萄酒が入った杯や、卵（?）の入った杯が描かれている。

3世紀末から4世紀にかけては、杯や碗の高台部分—ガラスとガラスの間一に装飾がサンドイッチされた、コールドワークとホットワークを融合させたサンドイッチ・ガラス技法が新たな形で復活する。吹き技法を使ったローマ時代のこのゴールド・サンドイッチ・ガラスは、ローマのカタコンベで墓（棚上墓）の正面に目印かお守りか記念のために貼り付けられた。このため、杯や容器の高台部分というよりも、周囲がギザギザに欠けた円盤型をしており、Charles Rufus Moreyのカタログでは460点近くが収録されている(Morey 1959)。そして、ヘレニズム時代のゴールド・サンドイッチ・ガラスと区別する意味で、これらの帝政後期のタイプは、イタリア

語の金の底 *fondi d'oro* や金箔ガラス *vetri dorati* が併記されることが多い（藤井 2009、65–159）。オステイアからは、その出土地の詳細は記されていないが、*IVLIA / FRVCTA / BIBE* 「ユリア・フルクタよ、飲め！」などの銘文が刻まれた金箔ガラスのタイプが 4 点と、筆者も初見の猛獸狩り *venatio* 場面や銘文 *ZESES*（生きよ！）が彩色されてサンドイッチされた、彩色ガラスのタイプも 1 点報告されている（Sagui-Lepri 2018, fig. 10）。

4 世紀後半から 5 世紀初頭にかけては、高台付きの碗、底が丸い高台のない浅碗、筒形や円錐形の杯、片把手水差しなど食卓を飾る容器に加え、教会を照らす天井から吊るすランプが登場する。このうち、底の丸い浅碗が本稿で注目するカット装飾が施された器形だが、その装飾の中には、皇帝の飾り *missorium* を模した主題もみられる。たとえば、コンスタンティノポリスで 388–393 年頃に製造された、直径 74cm もの銀製大皿の上三分の二には宮廷場面が、下三分の一の *eserugum*（貨幣などにもみられる「作品の外側」と呼ばれる区域）には大地の女神テッルスが描かれている（Grazzigli 2004）。宮廷場面は、ディオクレティアヌス帝時代以降の権力の象徴である三角破風とセルリアーナ（中央のアーチと左右の水平材から成る三連開口部）の中央に坐す皇帝が高官に巻物を渡し、両側のアーチの下にはそれぞれ共同統治の副帝が盾を手にした兵士たちに守られて座している。この大皿は、テオドシウスの治世十周年もしくは十五周年を記念して製造されたことが、金箔の痕跡のある銘文から読み取れる。そして、ローマのフォールム（ウェスタ神殿近く）から出土したガラスの小断片（Antiquarium Comunale del Celio, Rom. Inv. No.7233）に、この銀製の大皿とよく似た構図のカット装飾が施されている。直径 22cm の浅碗の右上部分だけが残っており、四本の柱に支えられた半月形破風の中央真下に座していたであろう皇帝とその左の副帝、そのまた左の馬を従えた兵士の正面向き頭部と、馬のたてがみの一部のみが残っている（La Rocca-Ensoli 2000, 559, no. 214; Nagel II, pp.22-23, no.7）。破風の中央には、2人のヴィクトリアが花輪を持ち、その中に *VOTA XX MULTA XXX* と記され、皇帝の左隣の人物の上には *SEBERUS* と記されている。その皇帝像をめぐっては未だ諸説あるが、*SEBERUS* (= Severus) を 326 年の都市ローマ長官で、コンスタンティヌス帝の在位二十周年記念を祝賀した *Acilius Severus* とみなす説もある。ただし、このセウェルスを碗の注文主とみなし、このようなガラス器は皇帝とは無関係とみなす研究者もいる（Bauer 2009, 49-50）。後述するように、このタイプのカット・ガラス付きの浅碗類は、その出土事例の多さから、工房址は発見されていないものの、ローマ製とみなされており、後述するように、様式や技法、出土年代に基づくグループ分けが試みられている。

同時期のガラス製造の痕跡は、ティベリス川沿いの Testaccio で発見されたガラス成形過程に生ずる屑ガラスのみである（Sternini 1989）。5 世紀半ば以降の窯址としては、ローマの Crypta Barbi のエクセドラで発見された円形の窯址（Sagui 2007）

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片：初期キリスト教的事例3点を中心（藤井）をはじめ、パラティヌス丘の北東斜面で工房の存在を示唆する原料塊や成形途中の屑や不成形品が出土しており（Sagui-Lepri 2017, 231, fig.5）、オスティアでも市場（IV. V.2）で円形の窯址など見つかっている⁽⁶⁾。

以上、帝政期のオスティアーポルトゥスのガラス製造と製品の流れを、時に都ローマの事例を引用しながら概観した。ガラスの温度コントールをしながら美しい紐装飾や貼付けならびにつまみ装飾を施したホットワークの容器、対照的にガラス製品が完成した後にカット装飾を施したコールドワークの容器、ホットとコールドを合わせて使うサンドイッチ・ガラスの容器、素朴でシンプルな食卓のガラス器など、様々な装飾を施したガラス器がローマの港町で暮らす人々に用いられていた。そしてその製造を行っていたと思われる、発掘で確認されたわずかな工房址や製造の痕跡は、Sagui-Lepri が指摘しているように、都市の中心にある場合は放棄された建物の中に造られ、中心から外れている場合は原材料の荷卸しや、燃料の確保、商品の搬出に適した船着き場の傍にあった。

2. オスティアーポルトゥス出土の帝政後期のカット・ガラス

オスティアとポルトゥスでは、筆者が知る限り、4世紀後半から末期にかけてのカット装飾付き浅碗断片が10点出土している。最初期の研究ではプテオリ製とみなされる場合もあったが、パラティヌス丘北東斜面やカエリウス丘をはじめ、ローマやオスティアーポルトゥスの出土品、ならびに博物館やコレクションの所蔵品を調査した Sagui によって、都ローマの2つの工房で造られたことが提唱された。すなわち、4世紀後半に活動した「刻線 + 研磨 intaglio e abrasione」工房（Sagui 1996）と、4世紀末に活動した「陰刻 a rilievo negativo」（Sagui 2009）工房の2つである⁽⁷⁾。「刻線 + 研磨」工房では、人や物の輪郭細部は細い破線の刻線によって括られ、その内部は浅く研磨されている。この研磨は、透明なガラス器に「すきガラスの効果」をもたらす。人物表現は、平面的でデフォルメされた味わいはあるが、自然主義的な忠実な模倣とは程遠いものである。人物の顔は常に横向きであり、細い線だけで描いた横顔のシルエットに、大きな菱形で強調して描かれた目が印象的である。これに対し、「陰刻」工房の人物像は、（碗の内側から見た時に）立体的に浮き上がるような、広く深い陰刻で彫られ、その効果を際立たせるかのように、幾重にも襞がよった衣服を着ている。人物の顔には、横顔と正面向きがあるが、いずれもまっすぐな鼻筋に、大きなアーモンド形の寄り目、短い二本線の口と短い楕円の陰刻線による髪が特徴的である。この他、楕円形の木の葉や石、（中央の装飾を囲む枠がある場合には）口縁下の数本の刻線による同心円文枠、波打つ薦の葉に交互に配された八花弁の枠、なども「陰刻」工房の特徴である。ガラス器自体をみると、いずれも素地は淡い緑がかった無色透明、器形は皿・浅碗・半球状碗など高台のない開口型の

容器である。ただし、「刻線+研磨」工房では、閉口型の杯や瓶などもみられる。Sagùi は、この 2 工房の出土分布に注目し、どちらもローマーオスティアに出土が集中していることをみた。とりわけ「陰刻」工房製品は、これまで知られている総数 120 点近くの約半分以上がローマおよびその近郊から出土している (Sagùi 2009, 215, fig.1)。

なお、上記の 2 工房については、1997 年に『イタリア北部およびラエティア出土の帝政中期～後期カット・ガラス』、2002 年に『4 世紀のローマにおけるカット・ガラス美術』を上梓し、カット技法や主題に基づき 5 つのグループ／工房に分類した Fabrizio Paolucci の研究もある。Paolucci は「刻線+研磨」工房については Sagùi グループとして同じ分類だが、「陰刻」工房については、先に言及した missorium と似た皇帝的な主題は「Vicennalia」グループ、キリスト教的主題は「Maestro di Daniele」グループと別々の工房にしている。さらに、後者についてはキリスト教に特化した工房とするが、Sagùi は同じ様式・技法・年代のものを主題別で違う工房とすることに疑問を呈している。この他、2020 年に『古代末期の具象的カット装飾ガラス製品 Die figürlich gravirten Gläser der Spätantike』二巻本—3 世紀半ばから 5 世紀にかけて帝国で製造・流通したカット・ガラス 373 点を対象とした初めての網羅的研究で、一巻目ではカット技法の精査、カット技法の特徴に基づく分類（グループ A～G）とその出土分布を、二巻目では 373 点のカタログ（第一巻目のグループごとではなく、主題別分類：世俗的、神話的、キリスト教的、特定できない断片という四項目別）を収録—を上梓した Stefanie Nagel も、この 2 工房を扱っており、「刻線+研磨」工房は「菱形の目グループ Rautenaugengruppe」のグループ B、「陰刻」工房は「彫刻的な人物像 plastisch wirkende Figuren」のグループ A としている。もともと、Nagel のグループ A は、おそらく報告者の年代に基づき、事例によって 4 世紀、4 世紀末から 5 世紀初頭、あるいは 4 世紀から 5 世紀と異なり、Sagùi の設定年代設定に即していない。

以下筆者は、オスティアーポルトウス出土の 10 点について、出土場所、サイズ、主題、Sagùi の説明に基づく筆者による 2 工房の分類、所蔵先と番号、また Nagel の第二巻のカタログ番号を併記する（一部 Nagel に収録されていない場合は空白とする）。また、オンラインで閲覧可能なものについては、URL を添付した。

- ① オスティア、プロティロの邸宅 (V. ii. 4-5) : 1938-1939 年の発掘で同邸宅の下水から出土。直径 18cm、高さ 5.6cm の浅碗断片（16 断片を接合、オリジナルの上三分の二近くが復元）。発掘者の Squarciapino はナツメヤシの木とパン籠の間で十字架を担ぐ勝利のキリストと同定し、pteオリ製と解釈。「陰刻」工房。オスティア収蔵庫 (inv.no.5201)、Nagel II no. 181。

<https://journals.openedition.org/mefra/6506> (fig. 11 上) ならびに図 1

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片：初期キリスト教的事例3点を中心に（藤井）

- ② オスティア、トラヤヌスの運河 (fossa Traiana) の左岸、解体された精錬所 (GIGOM/ SAROM)：1969年発掘。直径約23cm、高さ約2.4cmの浅碗断片（4断片を結合、オリジナルの碗の口縁は下半分以上が残っているが、中央部は左下のわずかな部分を除いて欠損）。Sagui の実測図には、下部には葉の生い茂った若木と、左下には小刀を持った右手部分などが残存し、口縁のすぐ下にある。キリスト教的図像ならば、アブラハムが短刀を振りかざした瞬間に神が代わりの子羊を示す「イサクの犠牲」の場面もありうるが、あまりに断片的で特定は不可能。「陰刻」工房。オスティア収蔵庫 (inv.no.12693)。

[https://journals.openedition.org/mefra/6506 \(fig. 12\)](https://journals.openedition.org/mefra/6506)

- ③ オスティアとポルトゥスを結ぶイゾラ・サクラ、聖ヒッポリュトスのバシリカ付近：1972年発掘。直径17.6cm、高さ17.4cm (16.8cm × 8.4cm ?) の半球状碗断片（15断片を結合、碗の口縁から底部の半分近くが残存）。トロイア戦争の悲劇的場面「ヘクトルの遺体引き渡し」（アキレス、アキレスの母テティス、ヘクトルの遺体、ヘクトルの父トロイア王ブリアモスの4人）。「刻線+研磨」工房。オスティア収蔵庫 (inv.no.18867)、Nagel II no. 113。

[https://journals.openedition.org/mefra/6506 \(fig. 13\)](https://journals.openedition.org/mefra/6506)

- ④ オスティア、出土場所詳細不明：直径約16cmの半球状碗の口縁から胴部にかけての一断片。口縁下には何かが盛られたような容器の一部と、左向きの人物像と右肩の一部が残存。人物像には、バシレイオンのような頭飾りがあることから、Sagui はイシス女神と想定。「刻線+研磨」工房。オスティア収蔵庫 (inv.no.562)。

[https://journals.openedition.org/mefra/6506 \(fig.11下\)](https://journals.openedition.org/mefra/6506)

- ⑤ ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土：1865年発掘。浅碗の右下部分の断片。長さ最大14.5cm、厚み0.3cm。口縁近くにはポディウムに立つ有翼のエロス（プッティ？）があり、そのすぐ隣に長い踝までの衣服を着た人物の一部が残存。エロスであれば、隣に立つののは母のアフロディーテかもしれない。「陰刻」工房。ヴァチカン博物館 (Museo Cristiano, inv. no. 60298)。Nagel II no. 236 (ただし Nagel は出土場所不明と記載)。

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60298.0.0>

- ⑥ ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土：1865年発掘。浅碗の左上部分の断片。長さ最大14.8cm。厚み0.3cm。一番上には、布を垂らした右手に豊穣の角を抱え持って立つ短髪で裸の小さな人物像、その右側から川が下へ向かって流れ、右手で杖を持ち左手を広げて玉座に座す人物の背後で二つの支流に分かれ、その下にはヴェールを被った右を向いた人物の頭部が残存。玉座の人物は短髪で、その頭の周りから草のようなものが生えている、あるいは放射状の光が放たれている。一番上の人物像について、女神フォルトゥーナとヴァ

チカン博物館では解説されているが、厚い胸板はむしろ男性的である（ゲニウス？）。また、玉座の人物は、アウグストゥス帝の平和の祭壇で東側の左パネルに描かれた大地の女神テッルスともみなされてきたが、むしろ同祭壇で右パネルに描かれた都ローマの擬人像の可能性もあるのではないだろうか。もしも後者であれば、流れる川はティベリス川で、二つの支流に分かれているのは、河口へと続くオステイアと、トラヤヌス帝時代の運河でつながるポルトゥスを象徴的に示しているのではと想像が膨らんでしまう。一番下の人物は、ヴェールを被っていることから、犠牲を捧げている人物の頭部と解釈されている。「陰刻」工房。ヴァチカン博物館（Museo Cristiano, inv. no. 60299）。Nagel II no. 235。

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60299.0.0>

- ⑦ ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土：1865年発掘。浅碗の下部の断片（二断片）。長さ最大9.1cm、厚み0.3cm。装飾が施された折りたたみ式椅子 *sella curulis* に座す男性の右足と、その右により小さく描かれた踝までの長い衣服を着た裸足の女性像の一部が残存。このような折りたたみ式椅子に座す人物は、コンスルなどの高官だが、聖人の可能性もある。そこで、傍らに立つ裸足の女性像を女神とみるか、オランス像や聖女とみるかで、異教とキリスト教に分かれるが、それを決定づける女性像の上半身が欠落している。「陰刻」工房。ヴァチカン博物館（Museo Cristiano, inv. no. 60301+60307）。Nagel II no. 278。ヴァチカン博物館のサイトでは別個の写真であるのに対し、Nagelは二断片接合した写真を掲載。Nagelはオステイア出土とし、ヴァチカンの所蔵番号も60301のみ記載。

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60301.0.0>

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60307.0.0>

- ⑧ ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土：1865年発掘。接合できない浅碗の二断片。より大きな断片の大きさは14.2cm×7cm。碗の下部四分の一ほどが残存。短いトゥニカと脛あてを付けた裸足の人物（羊飼い？）が地面に座り、わずかに残る上半身では、左腕を曲げて（おそらく右腕も同様にして）いる。人物の傍らには二つに割れた蹄（羊？）の後ろ脚がみえ、人物の先には、奇妙な動物の頭部像が付いた革袋のようなものが地面に転がっている。もう一方の断片にも、羊を示唆する動物の四肢の一部や羊飼いの脛あての一部が残っている。そこで、牧歌的場面であることは確かだが、キリスト教的と特定できる要素はみられない。「陰刻」工房。ヴァチカン博物館（Museo Cristiano, inv. no. 60302-60303）。

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60302.0.0>

- ⑨ ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土：1865年発掘。浅碗断片7.8cm×11cm、

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片：初期キリスト教的事例3点を中心に（藤井）

厚み0.3cm。後述する律法の授与図のキリストと巻物を受け取るペトロの部分が残存。「陰刻」工房。ヴァチカン博物館（Museo Cristiano, inv. no. 60313）、Nagel II no. 177（ただし、ここでもオスティア出土と表記）。

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60313.0.0> および図2

- ⑩ ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土：1865年発掘。浅碗の右半分と左下の二断片。長さは最長17cm×10.5cm。後述するキリストと聖人の一部が残存。律法の授与図とも解釈されるが、その決定的要素はかけている。「陰刻」工房。ヴァチカン博物館（Museo Cristiano, inv. no. 60314–60315）、Nagel II no. 176。

<https://catalogo.museivaticani.va/index.php/Detail/objects/MV.60315.0.0> 図3

この10点を出土地別にみると、オスティアから詳細不明な事例も含めて3点、両港を結ぶイゾラ・サクラから1点、ポルトゥスから6点出土している。なお、唯一住居址であるオスティアのプロティロの邸宅（V. ii. 4-5）は、オスティアの第五区のラウレンティウス門近くに位置する。その名の由来は、二本の柱に支えられた三角破風付きの記念的入口 *prothyrum* にある。この破風部分には所有者を示す銘文が彫られていたが、一部の文字を除きその大半が失われている。この邸宅は、オスティアの他の邸宅と同様に、既存の建物を利用しての改築により3世紀半ば頃にはニンフェウム（泉水盤）付きの中庭とその両側の部屋が付加された。この中庭からは壁龕付きの小部屋や井戸のある地下へ、また中庭の右隣の部屋からは二階へと上がることができた。なお、カット・ガラス碗断片が出土した同邸宅の下水の配管について、Johannes Sipko Boersmaは詳細な図を残しているが（Boersma 1985, fig.112）、最初の発掘者 Squarciapino の報告と同様（Squarciapino 1952）、そのどの箇所で発見されたかについては言及していない。また、同邸宅では、ディアナやアポロの彫像なども出土しており、キリスト教との関わりを示すものは、このカット・ガラス碗断片だけである。もっとも、17世紀に編纂された『聖人行伝 Acta Sanctorum』に記された、ガッリカヌスがオスティアでラウレンティウスに捧げたバシリカが南門の近くにあったことを想起すると（Acta Sanctorum, June, V）、同邸宅がラウレンティウス門の近くに位置することは示唆的である。Dugras Boinは、この史料がもしも信頼に足るものであるならば、オスティアにおいて、最初に城壁内に建てられたバシリカは、皇帝ではなく、地元の有力者主導によるものであったとする（Boin 2013, 176-178）。

一方、ポルトゥス出土の6点は、すべてポルトゥスのバシリカ Basilica Portuense (Maiorano-Paroli 2013) 出土である。1865年に、当時ポルトゥスの所有者であったトルロニア家が、コレクション目的で六角形のトラヤヌス帝港址周辺を発掘した結果

果、その南西角でバシリカ跡がみつかり、そこから有名なフィロカルス書体の碑文断片をはじめ、バシリカの創立年代の手がかりとなる貨幣がカット・ガラス断片と共に出土した。近代的な発掘ではなかったため、それ以上の詳細は不明だが、出土品はトルロニア家から教皇ピウス9世へ献上され、ラテラノ・ピウス・キリスト教博物館 Museo Cristiano Pio Lateranense を経て現在ヴァチカン博物館に所蔵されている。発掘当時、このバシリカはヒエロニムスが言及したローマの元老院パンマキウスが建てた巡礼宿とみなされた。そこで、今日でもこの名称がしばしば使用される (De Rossi 1868 pp.37-39)。

続いて10点の内訳を工房別にみると、「陰刻」工房製が8点、「刻線+研磨」工房製が2点と、前者の方が多いことがわかる。主題別にみると、「陰刻」工房では世俗的主題1点 (⑧) 神話的主題2点 (⑤、⑥)、キリスト教的主題3点 (①、⑨、⑩)、断片のため特定できない事例が2点 (②、⑦)、「刻線+研磨」工房では神話的主題(英雄)1点 (③)、異教的主題1点 (④) となる。なお、「刻線+研磨」工房でも「陰刻」工房同様にキリスト教的主題があり、完形品としてはシチリアの「キリスト教的」石棺に副葬されていた、現在メトロポリタン美術館所蔵のラザロの復活付き事例 (Nagel II no.173) がある。そこで、これらの2工房は、キリスト教など特定の集団に属していたのではなく、自由に注文を受け付けていたことがわかる。一つの工房でガラス碗の製造とカットの作業を行っていた可能性もあるが、帝政後期には、ガラス職人とカット職人が別個の職業であることを示唆する法的資料もある (Meredit 2015, 42-44)。たとえば、テオドシウス法典収録の337年の法律では、交易にかかる公的奉仕から免除された職人が列挙されているが、その中でガラス職人 *vitrearii* と彫物師 *diatretarii* は別々に言及されている (Cod. Th. XIII.4.2)。また、ユスティニアヌスの「学説彙纂」では、法学者ウルビアヌスが *Lex Aquilia* で挙げた、彫物師に渡されたガラス容器が壊れた際に、ガラス職人と彫物師のどちらの責任が問われるかの条件が記されている (Digest. 9.2. 27-29)。

3. オスティアーポルトゥス出土のカット・ガラス碗にみるキリスト教的主題

両港町から出土したガラス碗の内、キリスト教的主題と断定できるものは、わずか3点である。しかしながら、その3点は全て「陰刻」工房製であることから、4世紀末の、テオドシウス帝とその息子たちの時代、ローマ司教（現在では教皇）のダマスス1世（在位366-384年）やシルキウス（在位384-399）の治世にローマで製造されたものといえる。そこに刻まれた図像は、旧約聖書の救済場面や新約聖書の奇跡場面などの普遍的テーマとは別の、二大天使をはじめ多くの殉教者が葬られた聖都ローマと深く結びついた新しいレパートリーの誕生を物語っている。

オスティアーポルトウス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片：初期キリスト教的事例3点を中心に（藤井）

なお、本稿では Sagui の実測図を用いて図像の検討にあたる。そもそも1点目のオスティア出土の事例は、発掘当時の白黒の古写真を除き、カラー写真はない。しかしながら、カラー写真があったとしても、淡い緑色がかった無色透明なガラスのカット装飾を、写真に映し出すのは難しい。加えてこれらの碗類では、白い膜を張ったような銀化がしばしばみられ、その膜と共にカット装飾まで剥落し、そのカット部分が不鮮明な箇所については、角度や光を変えながら僅かな刻線の痕跡を識別する研究者の目が必要となる⁽⁹⁾。

3-1、柄の長い十字架を担ぐ人物立像：殉教聖人・助祭長ラウレンティウス（図1）

淡い緑色がかった透明の浅碗。直径18cmの碗の上三分の二近くが残っているが、中央右側の一部欠損。高さ5.6cm。口縁の下に三本の刻線。碗を内側からみると、その中央には、正面を向き、右手でキーロー・モノグラム付きの長い柄の十字架を肩に担ぎ、左手には開いた冊子本（または二枚折書字板 *diptych*）を持ち、頭に光背をいただいた長髪無鬚の人物が左足を一步前（向かって左）に進めている。その身体は長衣で覆われているが、右手首にかけたパリウム？の裾を右へ、左手首にかけた長衣の裾を左へと、それぞれ逆方向に引っ張っているため、ゆったりした衣服であるにも関わらず、「陰刻」工房が特異とする幾重にもよった襞がその華奢な身体のラインを示しつつ立体感を出している。人物の足元は欠損のため不明。人物の左側には、たわわに実をつけたナツメヤシの木が一本と、さらにその左に星のような印が、人物の右側には、二段の異なる編込み模様を見せる方形一または円筒形の

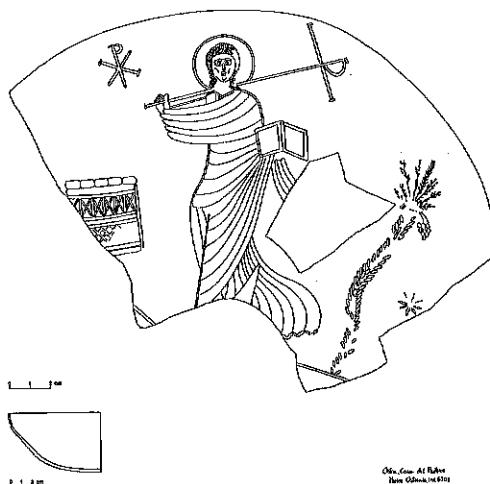


図1 「プロティロの邸宅出土、Museo Ostiense, Inv. no. 5201 ©L. Saguiによる実測図」

籠のようなものとその上に並ぶ5つの丸い物体が、そして人物の右手の斜め上にはキーロー・モノグラムが配されている。浅碗の下部には、*esergum* の区分線かと思われる線が、ナツメヤシの木の下と、人物像に向かって斜め左下の一部に残っている。

この主題がキリスト教的であることは、キリストの名前の最初の二文字を組み合わせたキーロー・モノグラムが二度も、人物が掲げる十字架の先と、人物と籠の中間上部に、それぞれ配されていることから明らかである。さらにこの人物が聖なる人であることは、頭部の光背が示している。

発掘者の Squarciapino は、この人物像をキリストと捉え、左脇の籠はパン籠とみなし、「勝利のキリスト像」と解釈した (Squarciapino 1952)。Lepri-Sagùi は、Squarciapino の説を継承している (Lepri-Sagùi 2018)。Paolucci は、5世紀初頭から半ばにかけて建設されたラヴェンナ、ガッラ・プラチディアのモザイクに描かれた聖ラウレンティウス像⁽¹⁰⁾を根拠に、キリストではなく、ラウレンティウスだとみなす (Paolucci 2002)。筆者は、この人物像の特定に関して、構図やポーズなどの図像的特徴から、Paolucci の説を支持する。本碗を先のモザイク画と比較すると、頭の光背、ほぼ正面向きの顔、長い十字架の手前を右手に持ち右肩に担ぐポーズ、左肩から右手首にかけてと右裾から開かれた冊子本を持つ左手首へとパリウムが強く引っ張られている様子、左足元の裾の動きなど、ほぼ同じである。このような、衣服の左右への動きや、裾の動きは、この人物像に動きを与えていた。オスティアの事例と異なるのは、人物像の髪型が短髪で短い顎鬚があること、担ぐ十字架にモノグラムがなく、冊子本にはリボンが付き、ナツメヤシの木がなく、ラウレンティウスが力強く歩みを進める先には彼の殉教を物語る燃え盛る炎と鉄格子があり、さらにその先に聖書を収めた書棚がある、などの6点だろう。なお、どのように殉教したかを物語る鉄格子がラウレンティウスのアトリビュートとして登場するのは、5世紀半ば以降に入ってからである。ラウレンティウスだけでなく、残酷さや苦痛を想起させる拷問器具や処刑道具などは、4世紀の殉教聖人たちには用いられない。むしろ彼らはすでに天にあげられ、他の聖人たちと喜びのうちにキリストを称える姿であらわされた。では、福音書の入った書棚はどうか。筆者には、先行研究で「パン籠」といわれるものは、実は福音書の入った書棚に先行する「巻物の入った容器 *capsa*」ではないか、と思われる。初期キリスト教美術では、パン籠は「パンの増加」の奇跡場面で繰り返し描かれているが、どんなに省略して描かれる時でも、丸いパンの上には十字の切り込みが入れられ、簡単にパンと見極めることができる。これに対し、本碗でパンに相当する5つは、丸ではなく短い円筒の形をしており、その上には十字の切り込みがない。そこで、把手や鍵の部分がないものの、下の方形一円筒形の網籠は *capsa*、その上の5つの円は、*capsa* から飛び出た巻物の頭の連なりだと推察する。同様な、巻物らしきものが入った網籠は、「陰刻」工房製と思わ

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片：初期キリスト教的事例3点を中心に（藤井）
れるキリスト教的事例（Nagel II, 265, no.215）にもみられる。開かれた冊子本と共に巻物が殉教聖人の傍に描かれた事例は、ドミティッラのカタコンベ、墓室15の聖女ペトロネッラと故人ウェネランダが描かれた4世紀後半の壁画でもみられ（山田2007、89）、後述するObernburg出土の碗でも聖人たちの傍に*capsa*に入った巻物がみられる。おそらく、巻子本は旧約を、冊子本は新約を示すのだろう。

筆者がラウレンティウス説を支持する根拠はもう1つある。ローマのカタコンベから出土したことで知られる円盤型の金箔ガラスの1つ、同聖人の記銘付き断片である⁽¹¹⁾。直径10.4cmの円盤は、11時から5時の方向に斜めに割れた右半分近くが残っている。残念ながら、切断部付近はガラスの銀化が進み、下からライトを当てた写真でかろうじて金箔装飾が確認できる程度であるが、円盤の中央には、ほぼ正面向きのラウレンティウスの胸像の一部が残っている。4分の3正面向きの、短髪巻毛で額鬚のある、まっすぐに通った鼻筋に大きな目と小さな口が特徴的な顔、頭の背後のキーロー・モノグラム、さらにその背後に向かって右上斜めに配された柄の長い十字架などが確認できる。十字架とラウレンティウスの左肩の間にその名LAVRENTIOが、さらにその下には、Ωの文字が配されている。Ωは、今は失われた反対側にAが配され、世のはじまりとおわりを示唆していたと思われる。さらに円盤の一番外側には、---ANE / VIV / AS IN CR[isto]の銘文がめぐり、最初の部分は不明だが、おそらく依頼主の名前で、「○○よ、キリストの内に生きよ！」というモットーであったと推察される。金箔ガラスでは、筆者が知る限り、記銘からラウレンティウスと特定できる事例が7点ある（藤井2009、261—266、292）⁽¹²⁾。ただし、柄の長い十字架を有する事例はこの1点のみで、残りは他の聖人と描き分けのされていない、哲学者のように描かれている。

ラウレンティウスは、ヴァレリアヌス帝が第二勅令で教会聖職者を対象に行った258年の迫害時（豊田1994、184-224；保坂2007）に、ローマの司教（現教皇）シクストゥス二世（藤井2009、287-295）に続いて殉教した助祭長である。4世紀半ばのローマ教会の祝日表「Depositio Martyrum（殉教者暦）」では、ティブルティナ街道で8月10日に単独でその祝日が祝われたことが記されており、先に触れた同聖人に捧げられたオスティアのバシリカの示唆もあり、ローマとその港町で崇敬を集めた聖人の一人である。同聖人について、Paola Maroneは、389—391年頃に書かれた聖アンブロシウスの『De officiis ministrorum（聖職について）』に、失われたラウレンティウスの殉教録や、聖職者のあるべき姿—「キリストの倣い」と「司教への献身」—が記されているとする（Marone 2009）。すなわちその殉教録は、殉教直前の出来事が中心に語られており、①殉教したシクストゥス二世とのカリストゥスの墓での対話、②帝国官吏が没収しようとした教会財産の貧しい者への分配、③燃え盛る鉄格子の上での拷問、そして④処刑人の前で放った「この部分はよく焼けているから回して食べなさい（assum est, versa manduca）」という皮肉な文言が、その基本

的要素だったとする。そして、①②では、司教に託された任務を助祭の筆頭として忠実に果たし、権力者にではなく貧しい人々への奉仕を貫き、③④では、キリストの死と復活に重なる「三日後」に司教に続いて殉教し、キリストが最後の晩餐で述べた「手にとって食べなさい (*acepite et comedite*)」と重なる言葉を残しているという。オステイア出土のこの十字架を担ぐ人物像が、勝利のキリスト像を髣髴とさせるのは、まさにラウレンティウスがキリストに倣って、重ねられて語られていることも影響しているかもしれない。

十字架を背中に担ぐポーズは、本事例の他に2点、カット・ガラス碗で報告されている。いずれも立像で、「陰刻」工房製と思われる。1点目は、フランスのナルボンヌ出土の断片で、Daniel Foyにより、本事例を参考にした想定復元図が提示されている (Foy-Nenna 2001, 228, no.441; Nagel II, 226, no.182)。その図によると、向かって右に歩を進める人物が、長い柄の、先にモノグラムが付いた十字架を左手で持ちあげ、下げた右手には冊子本を持っている。直径14cmとやや小ぶりな碗の左上部断片部分のみに注目すると、頭の光背、横に倒れたモノグラム付き十字架、開いた冊子本の一部と、ナツメヤシの木の葉の3本などが確認でき、さらに口縁下には3本の刻線がみられる。これらの特徴は全てオステイアの事例に共通する。年代は5世紀初頭に設定されている。もう1点は、2005年にローマのティベリス街道で発見された直径16.7cm、高さ3.2cmの浅碗で、最上部の一部が欠けている以外は、ほぼ完形である (Nagel II, 227, no. 184)。画面の最下部には、「陰刻」工房の特徴の1つである、波打つ葉の葉に交互に配された八花弁の帯が占め、碗の両端にはナツメヤシの木が二本配されている。そして画面中央には、条飾り付きのゆったりとしたトゥニカとパリウムを着た威風堂々たる人物が、正面向きで立っている。左手には開いた冊子本を持ち、高く掲げた右手で、肩に真横に担いだ十字架の柄の部分を持っている。その柄の部分からは長いリボンがたなびき、その下に紐で縛られた巻物が一本宙に浮いている。残念ながら、わずかに欠けた最上部は、まさにその人物の顔があった場所で、容貌は不明である。Nagelはこれらの十字架を担ぐ人物を全てキリストとしているが、これらの特徴は、ラウレンティウスを指示しているように思われる。もっとも次にみる律法の授与図のレパートリーの中には、ペトロが柄の長い十字架を担ぐ姿もみられる。このため、ペトロの可能性もあるが、ペトロが単身像でこのように描かれる事例を筆者は知らない。

3-2. ポルトゥス出土の律法の授与図 *Traditio Legis*(以後 TL 図と呼称)(図2)

淡緑色を帯びた無色透明のガラス製浅碗の断片。この断片は、サイズは7.6cm × 10.8cm、厚みは1.5cmとごく小さく、その表面が一部銀化していてカット装飾が不鮮明な部分もあるが、まぎれもないTL図であることを示す、重要な部分が残っている。その詳細に行く前に、まず TL 図とは何かをみる。

TL図は、キリストの両側に二大使徒が配された三人一組の像である。その基本的な要素は、①中央のキリストが（天を象徴する四つの小川が流れる）小高い丘の上に正面を向いて立ち、右手を下げてその下に侍るペトロに広げた巻物を渡し、左手を挙げてその下に侍るパウロを祝福する、②画面向かって右のペトロが、時に長い十字架を左肩に預けながら、その巻物を受け取るべくパリウムで覆った両手を恭しく掲げる。③向かって左のパウロは右手を挙げて、その場面を称揚する、というものである。両側の二大使徒はキリストを見上げる横顔で描かれ、その背後にナツメヤシの木が配される場合は、パウロ側のナツメヤシの木にフェニクスが止まっていることもある。また、上下二段構造になっている場合は、三人一組の立像の下に、それぞれに対応するかのように中央の丘に立つ子羊、その両側のイエルサレムとベツレヘムの都を示唆する城門から子羊の列が向かう図が配されることもある（名取1977；Spera 2000, 288-293）。

このタイプの図像がTL図とよばれる由縁は、キリストがペテロに授与する広げた巻物に記された *dominus legem dat* という銘文にある。そして、この図像の元となる表現は、先のテオドシウスの *missorium* で皇帝が高官に巻物を渡して任命をしていたように、皇帝美術の影響をうけたとする見方もある（Bisconti 2003）。一方で、Umberto Utroは、ヴァチカン博物館所蔵の初期キリスト教的石棺の紹介において、この図が旧約のモーセに対し、ペトロが「新モーセ」として、古い律法に代わる慈愛に満ちた「新しい戒め（模範）」を受け取る図だとみなす（その一例として、ヨハネの黙示録 13:14で、主が弟子たちの足を洗った後に、彼らに手本を渡したと述

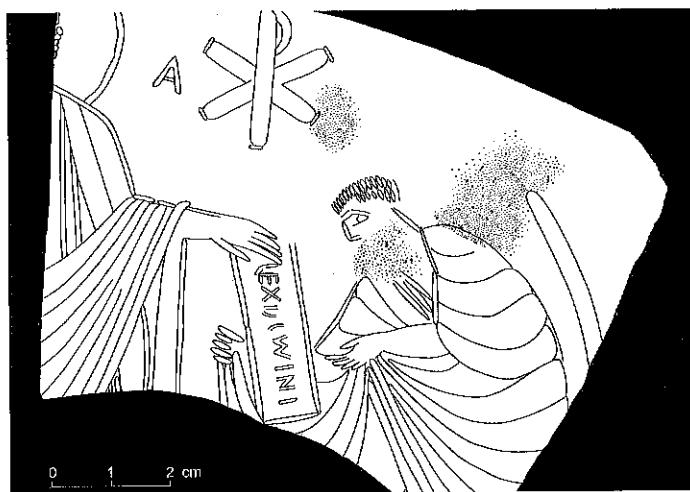


図2 「ポルトゥスのバシリカ出土、Mus. Vaticani (Museo Cristiano Inv. no. 60313) ©L. Saguiによる実測図」

べている)。このTL図については、4世紀後半にローマで生み出された図像と考えられている。そして、4世紀後半から5世紀初頭のTL像については、2015年のRobert Couzinの『律法の授与図：イメージ分析』に、壁画、天井モザイク、石棺、貨幣、金箔ガラス、カット・ガラス、粘板岩製の鋳型などが収録されている(Couzin 2015)。

TL図が生まれた頃のローマ司教は、ダマスス1世(在位366–384年)である。前司教のリベリウス時代に続き、対立司教が擁立され、内部分裂を起こしていた時代、同司教は382年のローマ教会会議で二大使徒がローマで布教・殉教したことからローマ教会の優位性を説いたが、ペトロとパウロの二大使徒だけでなく、ローマのカタコンベに眠る殉教者たちの墓を再整備し、フィロカルス書体という新しく独特な書体で大理石板に彼らへ捧げる六脚律の頌歌を刻ませて飾ったことでも知られる(Ferrua 1942、山田2014)。近年では、ダマスス1世の影響がローマだけでなくオステイアーポルトゥスにも及んでいたことを示す、同書体を有する碑文が注目されている(Fiocchi Nicolai 2018)。のことから、Cacilie Davis-Weyerが1961年に提唱したように、聖都に眠り庇護する二大使徒をキリストに組み合わせたTL図は、彼の治世下でなされた可能性がある(Davis-Weyer 1961, 30–31; Bisconti 2005, 76–77)。なお、金箔ガラスにもTL図が確認されているが(藤井2009、134–135)、同司教はこの金箔ガラスの中でも他の聖人たちと組み合わされた4人一組の胸像タイプで2点確認される(藤井2009、292、表5。Morey 250番では、ダマススがペテロ、パウロ、シクストゥス二世と共に描かれている)。

それでは、ポルトゥス出土の断片にもどう。Saguiの実測図(図2)を元にみると、中央に立つキリストの左肩と頭部の光背の一部、開いた巻物を渡す左手、その巻物に記された銘文LEX DOMINI(Lの横棒がやや短くD,Oの線は大きく途切れ、MはWのように逆さだが)、その巻物をうやうやしく、直接触れないように両手でパリウムの裾を広げ、律法を包み込むように受け取る短髪の(顎鬚の有無は銀化のため不明)ペトロの上半身、キリストとペトロの間の上部に配された円に囲まれたキーロー・モノグラムとその左のA(右にあるべきΩは銀化のため不明)の大文字、などが確認できる。また、写真では何も痕跡が残っていないかにみえるキリストの容貌の手がかりとなる刻線のごく一部が、Saguiの実測図では断片の右端にかろうじて残っていることが示されている。TL図では、中央のキリストは正面向きが多いため、この刻線をキリストの頭髪一部と解釈するのが妥当であろう。この他、「陰刻」工房のカットの特徴でもある、彫刻的な印象を与える深い陰刻は、幾重にも襞がよったトゥニカとパリウムの衣服部分によくあらわれている。

帝政後期のカット・ガラス浅碗で、TL図だと確定できる事例は、イタリア以外で二点報告されている。一点はスペインのAlmoina-Platz(ヴァレンシア)、もう一点はドイツのObernburgである。いずれも「陰刻」工房と思われる。この二点はし

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に（藤井）
かし、TL図だけで占められているのではない。碗の装飾は水平に三段に分割され、
碗の内側からみると、一番上の半月空間にTL図、中間の带状空间とその下の半月
空间に聖書场面が組み合わされている。このような組み合わせは、石棺の装飾分割
を想起させる（山田2019、227–228）。1点目のAlmoina-Platz出土の断片（Nagel
II, 239, no. 196）は、直径20cm、高さ8cmの浅碗で、その中央上部から左上部にかけてと、その他いくつかの小断片が残っている。Soriano Sanchezの実測図は、碗の
外側から描かれたものであるため、反転させて解説すると、一番上のTL図では、
中央に光背を有する短髪で顎鬚のないキリストが正面を向いて立ち、その頭部の両
側にはAとΩを伴うキーロー・モノグラムが配されている。キリストの右半身は欠
けているが、重要な腕の動きは残っている。すなわち、向かって右下のペトロに巻
物を渡したばかりの左手は下がっており（巻物は手から離れ、ペトロはすでに巻物
を受け取っている）、向かって左下のパウロを称揚する右手は高くあげられている。
二大使徒はいずれも短髪に顎鬚、中央のキリストを見上げる横顔で描かれ、両手を
キリストへと掲げている。それぞれの背後には、細いナツメヤシの木が配されてい
る。中段の向かって一番左からみると、杖に巻き付いた大きな蛇を前にしたパリウ
ムを着た人物像（モーセと青銅の蛇？）、一本の若木、アンフォラを逆さに持つ（液
体を注いでいるだろう）短いトゥニカを着た人物の一部（カナの奇跡？）が残って
いる。その下の、下段を向かって左からみると、上の部分だけしか残っていないが、
男性のオランス像（？左手のみ手を挙げている様子がわかる）、ヴェールを被った
女性のオランス像（頭部にそれぞれAとΩの文字）が描かれている（Goerich
2009）。

2つ目は、ドイツのObernburgでリメスの土壘の中から発見された、直径25.8cm
の浅碗の断片である（Deckers 1998; Nagel II, 239, no. 197）。碗は、きわめて断片的
にしか残っていないが、実測図ではほぼ全体が想定復元されている。一番上の半月
空間を占めるTL図には、2つの特徴がある。一つはキリストと二大使徒に記銘が
なされていることだ。PETRVS、SALBATOR、PAVRVSと、キリストがSALBATOR
（=salvator）救世主と記されている。もう1点は、ペトロとパウロの配置の逆転である。
記銘の順序通り、向かって左下にはパウロではなくペトロが控え、すでに巻物を手
にしていることがわかる。そして、ペトロが受け取った巻物の下には、さらに
capsaがあつたと考えられる。なお、右下に控えるパウロは、残念ながらその頭部
しか残っていない。このため、キリストが左手を下げてパウロにも律法を授与して
いるように補われているが、断定はできない。中間の带状空间も断片的だが、中央
にはベッドを担いで歩く中風患者の癒しが、向かって右端には岩うつペトロの奇跡
場面、下の半月空間には、向かって右に、右手をあげるトゥニカとパリウムを着た
人物（キリスト？）、中央には犠牲のために組まれた薪の上に座るイサクの足先（イ
サクの犠牲）が描かれていたと想定されている。

3-3. ポルトゥス出土のキリスト教的三人一組の立像（キリストと殉教者）(図3)

淡緑を帯びた無色透明の三断片の内、二断片は接合され、直径約20cmの碗の半分近く ($17.1\text{cm} \times 10.5\text{cm}$) が復元されている。残りの一断片は $4\text{cm} \times 6\text{cm}$ と小さいが、この碗が三人一組の立像であったことを物語るもう一人の足元が刻まれている。なお、先の TL 図に比べ、ガラスの緑色が濃く感じられるのは、その厚みが0.35cmと、2倍以上だからである。

先の図と同じく、Sagùi による実測図（図3）を元にまず大きな断片のカット装飾からみる。この大断片には、キリストの右に立つ人物と、中央に立つキリストの身体の右半分の一部が残っている。

キリストの頭部は欠けているが、顎鬚があり、肩までかかる長い髪に光背を有していたことはかろうじて確認できる。また光背に接するように、その右にはキリストの名を象徴するキーロー・モノグラムが配されている。右手は、右下の人物を称えるように高く掲げられ、条飾りの付いたトゥニカとパリウムを着用している。その右下の人物は、顔と足はキリストの方を向いた横向きで、身体は四分の三正面を向いて *podium*（基壇）に立っている。*podium* の下には小石のような丸いものが散



図3 「ポルトゥスのバシリカ出土、Musei Vaticani (Museo Cristiano inv. no. 60314-60315) ©L. Sagùi による実測図」

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片：初期キリスト教的事例3点を中心に（藤井）
らばっている。両手の動作は明瞭ではないが、先の TL 図のペテロのように、パリウムの裾を両手で広げているようにもみえる。髪はキリストと同様に肩まで流れる長髪で、顎髭はない。この人物の前髪から目のあたりに斜線が入っているのは、Sagui の実測図には記されていないが、この部分が二断片の接合部にあたり、とりわけ下の断片の接合部に細かい割れが入っていて、詳細が不明だからである。衣服は条飾りの付いたトゥニカとパリウムで、足は裸足である。この人物の背後一右側には、背の高い葦 *Phragmites australis* のような植物が描かれている。De Rossi の図では、背の高い茎と上の穂の部分だけが描き起こされているが、Sagui の図では、茎の両側に交互に垂れる9枚の葉が描かれており、これが木ではなく、水草を表現しようとしたことがわかる。

なお、碗の右下断片も、キリストの左にいた人物が、右の人物と同様な、条飾りの付いたトゥニカとパリウムを着て *podium* に立つ裸足の人物であったことを物語っている。最後に彫り方をみると、先の TL 図と同様に、髪は旋盤を軽く当てた小梢円形の列で、顎髭はそれよりも細い旋盤を軽く当てたより線に近い梢円の列で表現し、幾重にも重なる襞のよった衣服を深く掘り込むことで彫刻的な印象を与えている。また、この碗が最初に中心部の図像から彫られ、最後に口縁下の三重の刻線が彫られたことが、キリストの右手の上に一番下の刻線が通ってしまっていることからわかる。

この断片は、近年の研究で先の TL 図と共に TL 図として引用されることが多い。たとえば先にあげた Couzin (Couzin 2015, p.118, fig. 53) でも、Nagel でも (Nagel 2021, 222, no.176) でも TL 図として引用している。そこで、筆者も当初は TL 図としてみていた。しかしながら、上述の通り、あらためてこの図に向き合うと、TL 図と確定できる要素は無きに等しい。そもそも、初期キリスト教考古学の父 G. B. De Rossi が1868年に、キリスト教的主題を有するポルトゥス出土のカット・ガラス断片の一つとしてこの断片を発表した際には、キリストとその両側の聖人もしく聖女たちとし、さらに論を進めてポルトゥスで崇敬を集めたエウトロピウス、ゾシマとボナサ姉妹のような殉教者のペアとみなした。Squarciappino もこの断片はキリストと聖人たちの図とし、TL 図にはあてていない。筆者は、初期キリスト教美術でガラス工芸品に聖女や殉教聖女が描かれる際には、オランス像という両手をあげた祈りの姿勢で描かれることが多いため、キリストの両側の人物が殉教聖女だったかについては疑問である。ただし、ポルトゥスで崇敬を集めた殉教者のペアだった可能性は、キリストの右側の人物の背後に描かれているのが、TL 図の一要素を構成するナツメヤシの木ではなく、川面に生えている葦のような水草であることが、示唆的に映る。ポルトゥスでも殉教者崇敬を高める活動がローマと連動して行われていたことは、フィロカルス書体の碑文が出土していることからもうかがわれる。ローマの『殉教者暦』でも9月5日にアコンティウス、ノンヌス、ヘラクラヌス、タウ

リヌスがポルトゥスで祝われたとある。

おわりに

オステイアとポルトゥスで出土したカット・ガラス浅碗断片3点は、すべて4世紀末に活動した「陰刻」工房製で、ローマで新たに生まれた「聖都」を象徴するような図像—「十字架を担ぎ冊子本を持つラウレンティウス」、「律法の授与図」、「キリストとポルトゥス？の殉教者たち」—が刻まれている。ローマは、帝国の都としての地位を330年に東のコンスタンティノポリスに譲り、新たにペトロとパウロの二大天使をはじめ、迫害に屈せずに信仰を貫き、天国で永遠の生を勝ち取った殉教者たちの眠る聖都へと生まれ変わった。その産声は、教会内部の分裂という問題を抱える中であげられたが、ダマスス1世の貢献は実を結び、美しく再整備されたローマの殉教者たちの墓を巡礼者たちが詣で、彼らへの仲介と庇護を求めた。イタリア以外で出土した類例は、このような巡礼者がローマで購入し、故郷に持ち帰ったものかもしれない。またダマスス1世の助祭であったシリキウスは、シクストゥス二世に従った助祭長ラウレンティウスのように前司教（教皇）の方針を守った。ローマ教会の祝日表の「*Depositio Martyrum*（殉教者暦）」は、ローマだけでなくその港町を含む周辺まで殉教者たちの放つ光の環を広げている。オステイアとポルトゥス出土のキリスト教的浅碗断片は、3点と数は少ないものの、じっと見つめていると、4世紀末の聖都ローマで捧げられた頌歌が今に響いてくるかのようである。

謝辞 本稿のテーマである、ローマの4世紀後半のカット・ガラスについて、最新の研究動向も含めご指導ください、またご自身がまだ発表されていない実測図の使用許可を与えてくださったLucia Sagui先生に心より感謝申し上げます。

後注

- (1) ローマのドイツ考古学研究所、アメリカ・アカデミーがオステイアの第III、IV、V地域で実施した37回分の調査、アウグスブルク大学が市場の区画で実施した発掘、ローマの英国アカデミーがポルトゥスの皇帝宮殿で行った調査、ならびにオステイア考古学公園が保管・管理するガラス遺物や記録などが対象。ポルトゥスから発見された二次工房の窯址については、ポルトゥス・プロジェクトがその詳細を発表予定。
- (2) 以下本文で言及するSagui-Lepri2018の実測図および出土品のカラー写真は、オンラインで公開されている論文参照のこと (<https://doi.org/10.4000/mepra.6506>)。
- (3) 建築にかかるガラス製品、板ガラスやガラス製のオプス・セクティレ用の疑似大理石板、またはモザイク用のガラス製テッセラなどについては、SaguiやLepriが個別に調査・発表してはいるが、上記の2つの集成では対象とされていない。

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片:初期キリスト教的事例3点を中心に（藤井）

- (4) 古代ローマのガラス製造には、原料となる砂（珪砂 SiO₂）と、天然ナトロン／ソーダ（炭酸ナトリウム Na₂CO₃）を精製・溶融してガラス化させる一次工房と、その原料塊を坩堝で溶かして製品にする二次工房があった。一次工房はシリアーパレスティナおよびエジプト、二次工房は帝国全土で確認されており、地中海に沈む難破船から、原料塊は船底にバラストとして積まれて二次工房に輸出され、二次工房からは、ガラス製品やリサイクル用の壊れたガラス屑などが積まれて交易されたことが明らかとなっている。
- (5) プテオリ（現 Pozzuoli）は、ナポリ北西のカンピ・フレグレイと呼ばれる火山地域の、三方を見渡す切り立った崖に深い湾という立地に、アウグストゥス帝が建設した全長365m もの大埠頭が海に突き出した、アレクサンドリアからの大型穀物輸送船も寄港できる大港。紀元後1世紀にティレニア海側の「東方の窓口」としてその最盛期を迎え、ポルトゥスの完成をもって衰退したとする説もあるが、穀物輸送については2世紀半ばころまで、他の物品についてはプテオリがプラディシスマというその地域特有の地盤の緩慢な隆起と沈下を繰り返す現象によって港の機能が失われるまで、オスティアーポルトゥスと補完的な関係を保ちながら、都の物流を支えたと思われる。一方隣接するバイアエ（現 Baia）は、効能ある温泉や牡蠣の養殖で名を馳せた温泉保養地。
- (6) 市場址の二次工房の窯については、アウグスブルク大学の下記の hp、Abb. 8a と Abb. 8b 参照。
<https://www.uni-augsburg.de/de/fakultaet/philhist/professuren/kunst-und-kulturgeschichte/klassische-archaeologie/forschung/ausgrabungen-im-sogen-macellum-von-ostia/>
- (7) ローマの工房である可能性が高いグループには、もう一つ4世紀半ば頃活動した「gruppo a clipei（盾グループ）」という、円や四角い額縁の中に風景や人物像が刻まれるタイプがある。古代では壁に飾る盾に神話場面などの装飾が施されていたためこの名称となった。オスティアとポルトゥスの出土事例には、筆者が知る限り含まれていなかった。
- (8) 直径10.4 cm、高さ5 cm、厚み0.7 cm。メトロポリタン美術館、inv.no. 18.145.3
<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/465923?searchField=All&ft=saint+lawrence&offset=0&rpp=80&pos=3>
- (9) なお、ポルトゥスの二断片については、2017年10月26日ヴァチカン博物館開催の「ヴァチカン・コレクションのポルトゥス出土のカット・ガラスおよび古代末期の図像付きガラスの製造」で Sagui が使用した、しかしこれはまだ出版はされていない図をご厚意で使用させていただく。
なお、ポルトゥスの二断片については、Sagui が2017年10月26日にヴァチカン博物館で開催された講演会「ヴァチカン・コレクションのポルトゥス出土のカット・ガラスおよび古代末期の図像付きガラスの製造」で使用した、しかしこれはまだ出版はされ

ていなない図をご厚意で使用させていただく。

- (10) 写真は下記 URL 参照：<https://www.artesvelata.it/wp-content/uploads/2020/12/Martirio-di-san-Lorenzo-prima-meta-del-V-sec.-Mosaico.-Ravenna-Mausoleo-di-Galla-Placidia-arte-svelata.jpg>
- (11) 直径10.4 cm、高さ 5 cm。メトロポリタン美術館、inv.no. 18.145.3
<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/465923?searchField=All&ft=saint+lawrence&offset=0&rpp=80&pos=3>
- (12) *LAVRENTIVS, LAVRENTEVS, LAVRETI* 等の綴りの記銘付きで、Morey 1959 のカタログ番号を用いてその内訳を示すと、単独像は 2 点 (040, 460)；二人組はカルタゴ司教で殉教者のキュプリアヌスとの 1 点 (036)；三人組はローマの殉教聖女アグネスとキリストとの 1 点 (283) と二大使徒との 1 点 (Morey のカタログになく、Vopel 1899, 376)；七人組はパウロ、シクストゥス二世、ヒュポリトス、ティモテウス、キリストとの 1 点 (344)。

参考文献

Bauer 2009

F. A. Bauer, *Gabe und Person: Geschenke als Träger personaler Aura in der Spätantike*, Eichstätt, 2009.

Bisconti 2003

F. Bisconti, Variazioni vecchie e nuove sul tema della *Traditio Legis*. Vecchie e nuove acquisizioni, in *Vetera Christianorum* 40, (2003), pp. 251-270.

Boersma 1985

J. S. Boersma, *Amoenissima Civitas: Block Vii at Ostia: Description and Analysis of its Visible Remains*, Assen, 1985.

Boin 2013

D. Boin, *Ostia in Late Antiquity*, Oxford, 2013.

Couzin 2015

R. Couzin, *The Traditio Legis: Anatomy of an Image*, Oxford, 2015.

Davis-Weyer 1961

C. Davis-Weyer, Das *Traditio-Legis-Bild* und seine Nachfolge. *Münchener Jahrbuch der bildenden Kunst* 12 (1961), S. 7-45.

Deckers 1998

J. G. Deckers, Die römische Schale aus Obernburg, *Frankenland. Zeitschr. fränk. Landeskde. u. Kulturflege* 50-1, 1998, S.6-11.

De Rossi 1868

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片：初期キリスト教的事例3点を中心に（藤井）

G. B. De Rossi, Utensili cristiani scoperti a Porto. *Bullettino di Archeologia Cristiana*, 6/3-6 (1868), pp. 33-44.

Ferrua 1942

A. Ferrua, *Epigrammata Damasiana*, Roma 1942.

Fiocchi Nicolai 2018

V. Fiocchi Nicolai, Damaso Filocalo e l'epigrafia di committenza papale nell'hinterland di Roma. A proposito degli interventi monumentali dei vescovi di Roma nelle diocesi limitrofe, in *Studi in memoria di Fabiola Ardizzone, I, Epigrafia e Storia*, Palermo 2018, pp. 129-153.

Foy-Nenna 2001

D. Foy et M-D. Nenna, *Tout Feu Tout Sable: Mille Ans de Verre Antique dans le Midi de la France*. Marseille, 2001.

Fujii 2003

Y. Fujii, "An Iconographical Study of Baiae Group Flasks: Are Vaulted Buildings Fishponds or not?", *Annales de l'Association Internationale pour l'Histoire du Verre* 15 (2003), pp. 73-77.

Fujii 2009

Y. Fujii, Report on four Roman Glass Fragments from the Gorga Collection: a attribution to the "Puteoli-Baiae Group", *Annales de l'Association Internationale pour l'Histoire du Verre* 17 (2009), pp. 136-142.

Gialanella 1999

C. Gialanella, "Una fornace per il vetro a Puteoli", in a cura di Ciro Piccioli e Francesca Sogliani *Il vetro in Italia meridionale e insulare, Atti del primo convegno multidisciplinare (Napoli 5-7 marzo 1998)*, Napoli 1999, pp. 151-160.

Gliozzo et al. 2017

E. Gliozzo, B. Lepri, L. Sagù, I. T. Memmi, Colourless glass from the Palatine and Esquiline hills in Rome (Italy). New data on antimony- and manganese-decoloured glass in the Roman period, *Archaeological and anthropological sciences*, 9 - 2 (2017), pp. 165-180.

Goerich 2009

B. Goerich, El primer cristianismo en la ciudad. La figura de San Vicente Mártir, in J. Hermosilla Pla, *La ciudad de Valencia. Historia, geografía y arte en la ciudad de Valencia II*; Valencia, 2009, pp. 276-277.

Grazzigli 2004

G. L. Grassigli, Il missorium di Teodosio: tra iconografia e iconologia, *L'Annuario della Scuola Archeologica di Atene e delle Missioni Italiane in Oriente* 82 (2004), pp. 519-542.

La Rocca-Ensoli 2000

A cura di E. La Rocca, S. Ensoli, *Aurea Roma. Dalla città pagana alla città cristiana*, Roma,

2000.

Lepri 2021

B. Lepri, *Il vetro tra II e III secolo d. C.: produzione e distribuzione in area romano-ostiene*, Roma, 2021.

Maiorano- Paroli 2013

M. Maiorano, L. Paroli, a cura di, *La Basilica Portuense. Scavi 1991-2007*, Firenze 2013.

Marone 2009

Paola Marone, Lorenzo martire e l'antico ministero del diaconato, in "Cristianesimo nella storia" 30 (2009), pp. 579-589.

Meredith 2015

H. G. Meredith, *Word Becomes Image: Openwork Vessels as a Reflection of Late Antique Transformation*, Oxford, 2015.

Morey 1954

C. R. Morey, *The Gold-Glass Collection of the Vatican Library*, Città del Vaticano, 1959.

Nagel 2020.

S. Nagel, *Die figürlich gravirten Gläser der Spätantike. Archäometrische und archäologische Untersuchungen*, 2 Bde, Regensburg, 2020.

Paolucci 2002

F. Paolucci, *L'arte del vetro inciso a Roma nel IV secolo d. C.*, Firenze, 2002.

Paris et al. 2015

R. Paris, R. Frontoni, G. Galli, C. Lalli, "Dalla villa al casale: attività produttive nella villa dei Quintili", in a cura di A. Molinari, R. S. Valenzani, L. Spera, *L'archeologia della produzione a Roma (secoli V-XV)*, Bari, 2015, pp.195-211.

Sagùi 1996

L. Sagùi, Un piatto di vetro inciso da Roma: contributo ad un inquadramento delle officine vetrarie tardoantiche, in a cura di M.G. Picozzi, F. Carinci, *Studi in memoria di Lucia Guerrini*, Roma, 1996, pp. 337-358.

Sagùi 2007

L. Sagùi, Glass in late antiquity: the continuity of technology and sources of supply, in ed. By L. Lavan, E. Zanini, A. Sarantis, *Technology in Transition A.D. 300-650 (Siena 2004)*, Leiden-Boston 2007, pp. 211-231.

Sagùi 2008

L. Sagùi, Vetri incisi, in a cura del R. Del Signore, *Palazzo Valentini. L'area tra antichità ed età moderna: scoperte archeologiche e progetti di valorizzazione*, Roma 2008, pp. 132-134

Sagùi 2009:

Ateliers de verre grave à Rome au IV^e siècle AD: nouvelles données sur le verre grave "à

オスティアーポルトゥス出土の後期ローマのカット・ガラス浅碗断片：初期キリスト教的事例3点を中心に（藤井）
relief négatif", *Annales de l'Association Internationale pour l'Histoire du Verre* 17 (2009),
pp. 206-216.

Sagui-Lepri 2017:

L. Sagùi, B. Lepri, La produzione del vetro a Roma: continuità e discontinuità fra tardoantico
e altomedioevo, in ed. by A. Molinari, R. Santangeli Valenzani, L. Spera, *L'archeologia della
produzione a Roma (secoli V-XV)*, Roma 2014, Bari 2016, pp. 225-241.

Sagui-Lepri 2018:

L. Sagùi, B. Lepri, Vetri e indicatori di produzione vetraria a Ostia e a Porto, *MEFRA* 130-2
(2018), pp. 399-409.

<https://doi.org/10.4000/mefra.6506>

Spera 2000

L. Spera, Traditio Legis et Clavium, in F. Bisconti(ed.), *Temi di iconografia paleocristiana*,
Città del Vaticano, 2000, pp. 288-293.

Squarciapino 1952

M. Floriani Squarciapino, Coppa cristiana da Ostia, *BdA* 37 (1952), pp. 204-210.

Sternini 1989

M. Sternini, *Una manifattura vetraria del V secolo a Roma*, Firenze, 1989.

Vattuone 2000

L. Vattuone, Vetro dorato con Traditio Legis, in ed. by A. Donati, *Pietro e Paolo. La storia, il
culto, la memoria nei primi secoli. Catalogo della mostra*, Milano 2000, n. 93, pp. 224-225.

Verità et al. 2017

M. Verità, P. Santopadre, B. Lepri, "A late 4th-early 5th c. AD secondary glass workshop in
Ostia. An elemental composition study", in *Bollettino ICR, Nuova Serie* 35, pp. 19-31.

名取1977

名取 四郎「コンスタンティナ廟堂の北側小アプシスのモザイク：「トラディティオ・
レギス（法の授与）図」をめぐって」、『別府大学紀要』第18号（1977. 2）10-39頁。

藤井2009

藤井慈子「ガラスのなかの古代ローマ：三、四世紀工芸品の図像を読み解く」春風社、
2009年。

藤井2020

藤井慈子「ローマ・ガラスにみる帝政後期の港湾都市ブテオリースペイン、アウグス
タ・エメリタ出土の新事例を中心にー」（野村俊一、空間史学研究会編『空間史学叢
書3：まなざしの論理』東京、2020年、159—190頁）。

保坂2007

保坂高殿「ヴァレリアヌス帝迫害」千葉大学文学部『人文研究』第36号、2007年3月、
1-35頁。

豊田1994

豊田浩志『キリスト教の興隆とローマ帝国』南窓社、1994年。

山田2007

山田 順「初期キリスト教における聖人崇敬と民衆信仰—聖女ペトロニッラの図像とその意味—」『西南学院大学 国際文化論集』第22巻 第1号（2007）、81–112頁。

山田2018

山田 順「ローマ地下共同墓地における〈殉教者崇敬〉」『西南学院大学 国際文化論集』第28巻 第2号（2014）、43-73頁。

山田2019

山田 香「初期キリスト教美術におけるキリスト表現と「トラディティオ・レギス（法の授与）」図」『国際交流研究：国際交流学部紀要』第21号（2019）、209-234頁。

（イタリア在住ローマ・ガラス研究者）

Mini-Symposium :

Exploring the Way of Life of Ostia's Inhabitants through Excavated Artifacts

The New Surveys of Ancient Ostia and Its Specificities

TOYOTA Koji

The Japanese team, of which the author is also a member, has been conducting surface surveys in the Ostia site since 2008. The results obtained have far exceeded the level of previous research in Japan, but even more astonishing is the recent progress of research in Europe. Paleogeographic and paleogeologic survey methods, including deep borehole investigations, are now becoming the mainstay of research, overturning many previous academic consensuses as well as proposing a new historical image. Specifically, the importance of the change in the bed of the Tiber River has been highlighted, as well as the existence of a river port and a possible berth for large transport ships at the mouth of the Tiber, which functioned until the mid-4th century. Various surveys in the Isola Sacra area have also revealed the existence of infrastructures such as canals, roads and warehouses connected to Portus. It is also becoming apparent that the two ports functioned by complementing each other.

In conclusion, Ostia, the outer port of Rome, remained a unique entity from its foundation in the 4th century B.C. until the mid-5th century, when it was completely abandoned due to a malaria epidemic. The site's unique characteristics have also been confirmed by our surface survey from six perspectives.

Cursed *Ornatrices*

-A Study of Curse Tablets Found in Ostia-

MAENO Hiroshi

Four curse tablets have been so far found in Ostia. I numbered them as *TDO* (*Tabula Defixionis Ostiensis*)¹⁻⁴. Among them *TDO.2* and *TDO.4* were preliminary reported by Vagliari in 1912 but left unstudied because of their bad conditions. Their whereabouts are now unknown. *TDO.3* was fully studied by Solin in 1968, and there is no hope to improve his study due to the fragmentary condition of the text. Only *TDO.1*, although the tablet itself has been lost, was accurately sketched and its text is clear enough to study further. Thus I focus on this tablet.

The tablet was discovered in a late republican period grave A2-I in the Porta Romana

Necropolis by Vagliari in 1910. Its dimension is 10,5cm × 10,5cm. The material is lead. It was found folded vertically like a codex. Opened, nine names of curse targets were found written on every line in the following order with slight irregularity: name of the target, name of her *domina*, *ser(va)*, *ornatrix*. There are five holes on the tablet. They have been thought to be holes through which a string was threaded to fasten the tablet. Previous studies on this tablet focused on a distinguished family and on a women's *collegium*. But so far there is no study on the motive and mentality of the curser.

This article attempts to listen to a voice of a common person by studying this curse tablet.

Ostia's Erotic Graffiti with a Focus on "Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2)"

OKUYAMA Hiroki

This paper examines Ostia's "erotic" graffiti found in Domus di Giove e Ganimede (I. iv. 2), the site where a concentration of them is found. In addition, the site itself is analyzed from the perspective of graffiti. As result, contrary to the traditional consensus of Domus di Giove e Ganimede being a hotel offering "sexual" and especially "homosexual" services at the time these graffiti were inscribed, it has been revealed that the site continued to function as an upper-class residence, as it has been since its foundation. The building was inhabited by several house slaves in addition to their owners. These slaves, including a certain Callinicus, dwelt in a simple room, and they were most likely the main group who inscribed these graffiti. It is thought that these "erotic" graffiti were nothing more than a simple mean of killing some time.

Late Roman Shallow Bowl Glass Fragments with Cut Decoration from Ostia-Portus : Focussing on Three Early Christian Examples

FUJII Yasuko

The three shallow glass bowl fragments with Christian cut decoration from Ostia-Portus may be now identified as products from a Roman workshop dating from the last decades of 4th century, as proposed by recent contributions by L. Saguì. Fragments which are similar in terms of the glass (colour and weathering), vessel shape and size, as well as the cutting technique, have been excavated in large quantities in Rome. The variety of decorative

subjects on the fragments demonstrate that the output of the workshop was not exclusively Christian. S. Nagel's distribution map of the workshop's finds demonstrates that this glassware reached the far north and west of the Empire, either via trade, or as travellers' souvenirs.

This article provides an overview of glassware and its production in Rome and Ostia-Portus, based on the latest research by L. Sagùi and B. Lepri, then summarises the characteristics of both Roman workshops' products in the late imperial period, as they propose. Finally, three shallow bowls with cut Christian decoration from the workshop at Ostia-Portus are discussed, and through iconographic interpretation and comparable examples, the relationship between the Roman church and Ostia-Portus, and the rise of martyr veneration of that time are considered.